浅野誠

沖縄の子ども
・教育・福祉

2013～2020 年

本書は、私のブログ「沖縄南城・人生創造・浅野誠」に書いてきた「沖縄の子ども・教育・福祉」にかかわる記事を集約し編集したものである。私のもともとの専攻分野は教育学であるが、近年は、教育以上に福祉分野に顔を出すことが増えてきた。しかも、私が生活する沖縄の、わけても南城市の子どもの福祉にかかわることが、私の生活の大きな部分を占めている。それは、学童クラブとのかかわり、南城市『こどものまち』宣言策定にかかわることとして表れている。

ということで、子ども（若者も含む）にかかわる本書も、教育と同時に福祉にかかわる記事を多分に含んでいる。わけても、南城市『こどものまち』宣言策定にかかわるようになった 2019～2020 年が、そういえる。

そして、個々の事例にかかわるだけでなく、沖縄県全体、南城市全体にかかわる記述が多いという特性もある。

本書をご覧いただいて、子どもにかかわる取り組みのヒント・手掛かりを得られることを願っている。

2020 年 10 月発行

目次

沖縄の子どもをめぐる福祉・教育・行政の取組み　　2020 年　　P6

１．　５月１４日　沖縄の子どもをめぐる福祉・教育・行政の取組み「地図」つくり
２．　５月１９日　「格差・貧困」対処を軸にした近年の取組みの歴史的特徴
３．　５月２４日　「やむにやまれず」有志がスタート
４．　５月２８日　調査から発見・行動へ
５．　６月１日　住民自身がつくりだしていく　子ども施設の整備拡充に向けて
６．　６月５日　「家庭教育」　親　学校
７．　６月９日　学校→「勤め人」の流れの増大・確立
８．　６月１３日　学業成績による輪切り選抜体制の広がり
９．　６月１７日　人生選択創造における学校依存の強まり　高額教育費
１０．６月２１日　「標準」とされる核家族よりも、多様な家族の形のなかで考える
１１．６月２５日　人間関係の薄れ　親子密着
１２．６月２９日　虐待　子どもの相互関係における格差貧困
１３．７月４日　行政用語としての教育と福祉
１４．７月９日　子どもにかかわる社会組織と地域自治組織
１５．７月１４日　学校をめぐる歴史変化
１６．７月１９日　学校をめぐる異議申し立て　「沖縄独自」の追求
１７．７月２４日　「勤め人」になる親の増加、地域子ども集団の縮小と保育園・学童クラブの広がり
１８．７月２９日　学校における福祉
１９．８月３日　（続）学校における福祉
２０．８月８日　沖縄おこしと人生おこし
２１．８月１３日　子どもの自信喪失　「上」「外」からの標準に囚われる
２２．８月１８日　模索している当人が、実践記録を書いて自ら気づきつつ実践していくこと
２３．８月２３日　実践の自己展開サイクル　実践記録を書くワークショップ
２４．８月２８日　実践記録をもとに、「園だより」などで実践を公開し、保護者と共同実践する
２５．９月２日　子どものために働く人の確保と質向上
２６．９月７日　職員の質向上と研修のありよう　現場の自律的実践
２７．９月１２日　実践の自律的展開と行政
２８．９月１７日　実践の研究的展開と研究者
２９．９月２２日　実践にかかわる研究会と研究紙誌
３０．９月２７日　沖縄全体の実践にかかわる司令塔的機能への期待
３１．１０月２日　歴史的財産の文献

学童クラブ　　2017～2020 年　　P35

保育士研修「実践記録の執筆と検討」　学童クラブ学習会　2020 年 1 月１５日
子どもをつなぎ、地域をつなぐ、すごい取り組みがあちこちに　１２月「保健室」　2019 年 12 月 06 日
学童クラブ支援員連続学習会終了　参加者のほぼ全員が実践記録を執筆し、相互検討が充実　12 月 02 日
「まぁる」訪問　１１月の「保健室」　11 月 08 日
実践記録を書く学童支援員研修ワークショップがスタート　10 月 12 日
学童学習会　「保健室」という名前になる　10 月 02 日
学童クラブの自慢　やりたくなるアイデア　３日の学童学習会　09 月 07 日
「日課」の交流　沢山の新発見　学童クラブ支援員学習会　07 月 04 日
とっても楽しい美つくりに挑戦　学童学習会　06 月 13 日
子どもの人間関係・遊び文化の成長をすすめる　05 月 17 日
遊びの宝庫　学童クラブ　04 月 19 日
「楽しく夢中に」の学童学習会　遊びも人間関係も豊かになる　03 月 8 日
共同創造と人間関係の驚くほどの成長に低学年イメージがすっかり変わる　02 月 05 日
子どもの話、クラブ運営の話　01 月 11 日
我が家での学童支援員学習会充実　2018 年 12 月 08 日
沖縄の学童支援員のすばらしさ　10 月 20 日
学童支援員は、実践検討でもすごい　09 月 22 日
学童支援員が実践記録を書くワークショップの進め方　09 月 17 日
実践記録を書く　学童支援員研修　09 月 15 日
学童研修　06 月 20 日
学童クラブ総会　学童研修　05 月 25 日
沖縄各地での学童保育研修　沖縄内の地域差　03 月 16 日
沖縄の学童保育クラブ
　１．学童保育クラブと私とのつきあい　2017 年 11 月 09 日
　２．学童保育指導員研修と私の研究　行動的少年期　11 月 19 日
　３．学童保育クラブづくりのこれまでとこれから　行政の役目　11 月 29 日
　４．指導員　12 月 09 日
　５．指導員の特性１　行動力　つながる力　12 月 20 日
　６．豊かな感性と感情表現　抜群の創造力＝想像力　指導員の特性２　12 月 30 日
　７．健康で元気　仕事を愛し、やりがいを感じる　指導員の特性３　2018 年 01 月 10 日
学童指導員研修のための宮古滞在で、うれしいことの連続　2017 年 11 月 02 日
『健康』『元気』『創造的』な学童クラブ指導員に圧倒される　9 月 26 日
宮古での学童保育指導員研修　「遊び」　09 月 13 日

南城市こどものまち宣言策定　　2019～2020 年　　P63

１．2019 年１０月１７日　南城市こどものまち宣言策定委員会
２．　　１０月２４日　賞味期限の設定
３．　　１０月３１日　こどもの宣言　大人の宣言　南城市の宣言
４．　　１１月５日　子ども・市民・南城市が実施主体になるということ
５．　　１１月１３日　格差・貧困からの卒業　閉鎖性を打ち破る
６．　　１１月２０日　世界とつながり、地元南城とともに育つ子ども
７．　　１１月２４日　調査データから読めるもの　今後の調査の課題と方法
８．　　１１月 29 日　こどもたちがつくる、こどもたちの居場所と活躍場
９．　　１２月４日　こどもたち自身が多様な場を作り出しつつ、豊かになる
１０．　　１２月８日　子どもがつくる活躍場・居場所　子どもと大人との関係
１１．　　１２月１２日　こども・まち・南城市という三つのキーワード
１２．　　１２月１６日　大人による子どものための組織の変化
１３．　　１２月２０日　２０００年代に入って現れてきたこどもの変化
１４．　　１２月２４日　「こどものまち」を作り出す場・組織
１５．　　１２月２８日　こどもまちおこしアイデア
１６．2020 年１月１日　正月行事　拡散して視野を広げ、焦点を絞っていく
１７．　　1月５日　人口増・子ども増の南城市
１８．　　1月１２日　南城市外が出身地である親が多い子どもたち
１９．　　1月１７日　つなげることがポイント　困難をもつ子ども
２０．　　1月２２日　目に見える困難がないと思っている子どもたちのなかにある困難
２１．　　1月２７日　子どもの進路選択進路創造のなかでの南城／地元
２２．　　2月１日　学校と福祉　学校と地域
２３．　　2月７日　グローカル　学校を変える
２４．　　2月１１日　南城の強み・特色・大切にしたいこと１　自然
２５．　　2月１６日　南城の強み・特色・大切にしたいこと２　人間関係
２６．　　2月２２日　自治体の施策の中軸に座る「こども」　世界的動向のなかで
２７．　　2月２８日　南城の強み・特色・大切にしたいこと３　文化
２８．　　3月５日　子どもの活発な動きがじかに見られる南城へ
２９．　　3月１１日　地域を育てる学校へ　コミュニティスクール　学校運営協議会
３０．　　3月１８日　地域と学校　コミュニティスクール
３１．　　3月２５日　グローカルな学校へ
３２．　　3月２９日　子ども・市民による取組みを中心にする。それを支える自治体
３３．　　4月３日　一般市民と専門家や担当者　若者・高齢者の取組み
３４．　　4月８日　専門家が専門家になっていく　こどもサポーター
３５．　　4月１３日　南城こども研究

３６．　　４月１６日　　こどもが充実する場を無数につくる
３７．　　４月２０日　　「南城市といえば、こどものまち」といわれるように

2020 年 06 月 15 日　こどものまち宣言の進め方プチワークショップ　政策立案遂行のためのワークショップ

沖縄の教育　　2013～2019 年　　P97

新入社員に、どんな力をつけるか　第２５期同友会大学　2019 年 07 月 14 日
沖縄の専門学校の注目すべき位置・役割　2019 年 2 月 12 日
沖縄県中小企業家同友会大学　新入社員教育　2018 年 08 月 01 日
乾他編『危機のなかの若者たち　教育とキャリアに関する 5 年間の追跡調査』東京大学出版会 2017 年を読む
　その１　2018 年 01 月 11 日
　その２　沖縄に注目　2018 年 01 月 13 日
加藤彰彦ほか編『沖縄子どもの貧困白書』2017 年かもがわ出版を読む　2017 年 12 月 28 日
「学校・企業・社員　どんなちからをつけるか」　沖縄中小企業家同友会の同友会大学で　2017 年 07 月 27 日
上間陽子「裸足で逃げる　沖縄の夜の街の少女たち」太田出版 2017 年を読む　2017 年 02 月 18 日
南城市史インタビュー　「シマの子ども」　公民館幼稚園など　2017 年 01 月 17 日
名桜大学での九州教育学会に参加　「地域と大学を考える」　2015 年 12 月 7 日
中部地区公民館研究大会での私の「指導助言」発言内容　2015 年 10 月 24 日
沖縄の若者の生き方をめぐって　日本生活指導学会報告　2014 年 09 月 04 日
私の「地域起こしと人生創造――沖縄県南城市での事例をもとに――」の発表　日本生活指導学会報告
2014 年 09 月 06 日
全体会　「生活変容」　日本生活指導学会報告　２０１４年９月８日
沖縄の矯正教育　日本生活指導学会報告　2014 年 09 月 09 日
沖縄民間教育研究の会議と南城学童連絡協議会の総会出席　2014 年 05 月 19 日
末本誠「沖縄のシマ社会への社会教育的アプローチ」を読む　2013 年 12 月 22 日、24 日
乾彰夫編『高卒５年　どう生き、これからどう生きるのか』を読む　沖縄の若者たち　2013 年 09 月 03 日

沖縄の子どもをめぐる福祉・教育・行政の取組み　　2020 年

１．５月１４日　沖縄の子どもをめぐる福祉・教育・行政の取組み「地図」つくり

新しい連載で、数日に一回で３０回ぐらいになりそうだ。夏を越して秋まで続くかもしれない。

１０～２０年ほど前から、沖縄の子どもをめぐる問題が大きな社会的話題になってきた。格差・貧困が焦点となり、２０１０年ごろからは、取り組みが多様な形で推し進められるようになる。

それらの取り組みが、どんな位置と特徴をもっているのか、今後どんな風に発展していったらよいのか、について考えるための「地図」を示していこうと思う。その背景には、次のような疑問がある。

・子ども園のように、福祉と教育が重なる取り組みをどう考えたらよいか。

・子ども若者をめぐる事態についての鋭い告発的指摘があるが、それにかかわる実践をどう進めていけばよいか。

・行政と住民運動がすれ違ったり対立したりすることがあるが、どう考えたらよいか。

・新型コロナ「自粛」のなかで、子どもたちの人間関係をどうしていったらよいのか。その悪影響をどう防いだらよいか。

・ハコものづくりからソフトへと行政予算の重点が移動し始めているが、どう受け止めたらいいか

・学校のこれからはどうなっていくか。「学力テスト対策」問題をどうしていくか。教職員の繁忙状況はどうしたらいいか。地域から学校が離れているのをどうするか。子どもの創造性が強調されるが、現在の学校は対応できるのか。

・子どもをめぐる問題の爆発は、以前は非行とか校内暴力とか「騒々しい」ものだったが、いまでは不登校・いじめ・ひきこもりなどと変わってきているが、どうみるか。

・家庭内に秘密のうちに行われる児童虐待などの問題をどう考えるか。家族の形と役割の変化をどう見るか。

・発達障がいがいろいろなところで言われ、増えてきているようにも見えるが、どう対応したらよいか

・子どもたちのなかに地元愛が深まり、将来進路として地元を選ぶものが増えているようだが、どう考えたらよいか。

・子どもにかかわる未経験の仕事についた（つきたい）が、その力量をどこで獲得したらいいか。

他にも、いろいろとある。本連載では、これらの疑問について、私なりに考えて、「子ども地図」を描いていこう。

２．５月１９日　「格差・貧困」対処を軸にした近年の取組みの歴史的特徴

まず近年の取り組みについて、いくつかの特徴を何回かに分けて描こう。

１.「格差・貧困」対処を軸にする

「格差・貧困」対処を軸にする子どもたちへの取組みは、ジャーナリズムが絶え間ないといえるほど取り上げる社会的話題になり、自治体には担当部局が設置され、貧困対処のための予算措置、保育園・学童クラブなど諸施設への施策も増えてきた。それらは、福祉部門が中心になっているが、この問題から取り残されている印象さえある学校教育でも、スクールソーシャルワーカー配置などの福祉的な取り組みが進められ始めた。

こうしたことは、沖縄戦直後の子どもをめぐる悲劇的事態の大量発生の中で、孤児園設立のように、やむにやまれず住民たちが立ち上がった取組みを思い起こさせる。戦後早期に各地で始まった集落立の保育園（幼稚園）も同様であり、地域住民の自主的な動きとして注目される。

２０１０年代から本格化した「子どもの格差・貧困」への取組みは、大きなうねりを作り出している。とはいっても、着手後間もないし、個々の実践における質的発展の追求は「これから」といった方がよい段階のものが多い。また、それらの動きの相互のつながり・連携は始まったばかりに近く、それらの取組みを地域のなかで構造化し深化させていく点では、今後の追求が必要だろう。その典型は、子ども食堂だろう。それは、現在の取組みを、緊急対応の一時的なものにすませず、恒常的なものにしていくことを求めるものだ。そして、今後の歴史的展開のなかでどうしていくのかという展望の問題を考えていく必要があろう。それは、１０年～２０年単位の課題であろう。

２．取り組みは「やむにやまれず」緊急対応としてスタート

取組みの多くには、「やむにやまれず」スタートしたという特徴がある。「対応しないと大変なことになる」と気づいた人たちが、緊急対応として「やむにやまれず」スタートしたことが目を引くのだ。たとえば子ども虐待は、当事者が関係機関にもちこむこともあるが、周りの人（近所の人、学校保育園関係者など）からの知らせから始まり、緊急措置がとられることが多い。発達障がいなどは、乳幼児健診などでの医療関係者の指摘からはじまることもある。

貧困率など行政が出すデータだけでなく、独自調査もおこないつつ、研究者が行う指摘、あるいは新聞報道などがきっかけになることが多い。

それらは、制度として対応できるものがないといって放置するわけにはいかず、目の当たりにした大人たちの緊急行動として始まる。

３．５月２４日　「やむにやまれず」有志がスタート

近年の特徴の続き。

３．まずは、有志が個人として、あるいはつながり合ってスタートする

子ども食堂が代表的なものだろうが、「やむにやまれず」という気持ちから、自宅などを使って急遽始める例が多い。それは志のある人、つまり有志が、個人としてあるいは何人かと連れ立って始めるものだ。

戦争直後の孤児園などには、そうした例があるようだが、集落が設置した保育園幼稚園などは、個人の有志というよりも、集落が相談決定して設置した。それには、子ども達は「シマの子」（集落の子）という住民たちの意識を反映しているといえよう。だから、保育者給与を字予算から支出することが基本となった。保育料を徴収する例があったかもしれないが。

現在の無認可保育園でも、「有志」が経営する例が多いが、認可私立や公立は、公的な制度として運営されている。他に数は多くないにしろ、NPO 法人、一般社団法人、株式会社などが運営する福祉施設（保育園・学童クラブなど）もある。それらの法人格をもつ団体も、行政手続き上の必要に迫られて、法人格を取得したもので、実際のところ、個人的色彩の濃い有志たちがつくっているものが多い。事実上の個人経営というものもかなりある。

かつてのように集落が運営する形があってよいと思うが、近年では聞かなくなっている。私が知らないだけで存在するかもしれないが。

このあたりには沖縄の特徴が見られる。行政が施策に着手する前にすでに取り組まれていたことが多いのだ。いわば住民運動なのだ。それに行政が反応して、施策を始める。なかには、行政施策が始まることが、住民運動を押しとどめることになることもある。たとえば、１９７２年頃の「復帰」施策が、全国画一の本土法制に基づくために、沖縄の地域的歴史的文脈を無視軽視する例が多く出てくる。子どもがかかわる例ではないが、「暖かい豆腐」を認めさせるような事例も存在するが、子どもをめぐる施策の中では見いだしにくい。たとえば、集落立保育園幼稚園は閉鎖され、ほとんどが市町村立幼稚園などになっていく。集落立保育園の歴史的意義を確認して継承発展させることは、テーマにも上らなかったようである。とはいえ、このあたりは未検討にとどまっている。教育委員の公選制も、話題になり多少の運動は行われたものの、結局は本土法制に合わせて任命制に変更される。

その後の、地方行政の動きは、中央政府のトップダウン的施策が支配的傾向になり、政府が出す予算をいかにひきだすかに焦点化される傾向が強まる。その点では、２０１０年代に入って実施される一括交付金が、沖縄の行政による自主的な動きを促進する点で注目される。その配分の際、子ども関連支出はどれほどあるのだろうか。そのあたりを調査検討してみる必要がありそうだ。

４．５月２８日　**調査から発見・行動へ**

４．調査が驚きと行動を生み出す

２０００～２０１０年代には、子どもをめぐる多様な調査が公表される。まず行政が、施策策定作業の一環として調査を行い報告書を出す例がある。その内容の一部は、新聞テレビなどで報道されるが、一般の人々の目に触れることは多くない。

有志や研究者が出す調査報告には、注目を浴びるものが続出する。それらは、実態を明らかにしつつ、それまで気づかなかった社会に対して告発的性格をもつものでもあった。たとえば、

「沖縄子ども白書」編集委員会編著『沖縄子ども白書』２０１０年ボーダーインク

野本三吉『沖縄・戦後子ども生活史』２０１０年現代書館

上間陽子『裸足で逃げる』２０１７年太田出版
打越正行『ヤンキーと地元』２０１９年筑摩書房
などがある。それらは、数量データだけでなく、ヒアリングや観察にもとづく事例検討からの情報収集も多い。さらに体験的調査もある。

そしてそれらは、社会運動的を帯びた多様な活動・実践として具体化していく。たとえば、ファミリー・サポートとか、学童クラブの連携組織が生まれ育っていく。それらはまず、活動・実践を行う当事者たちの連携組織として始まる。その社会的動きが行政を動かし、行政的支援が広がっていく。ときには、行政と社会組織とが連携して活発に動く例も生まれてくる。

５．行政が動き出す

表面化していない部分を明るみに出して、社会的な動きをうみだす社会運動やジャーナリズムの動きが注目されてきた。その中で、各種選挙でも、こども、貧困対処、保育園・学童クラブなどをめぐっての政策を掲げる政党や候補者が増えてくる。１９８０年代に、学校教育とくに学力問題が選挙争点になったのとは、大きな違いである。

そして、市町村行政の中の組織として、教育委員会だけでなく、子どもを専門的に担当する部局を設置するところが増えてくる。また、子どもにかかわる施設の拡充強化を打ち出すところも出てくる。その一方で、公立施設を民営化する動きも出てきて、住民の間に大きな議論を巻き起こすところも出てくる。

また、政府が、女性労働力確保とか少子化とかがからんだ財政措置を次々に打ち出したのも、２０１０年代の特徴である。その動きが、住民の権利としての福祉をめぐる社会運動と対抗しあったりからみあったりと、複雑な動きを見せている。その中にあって、地方自治体の関係部局で、国の予算措置への対応に困惑する状況さえ見られる。小規模自治体にあっては、国の予算化への対応をスルーして、せっかくの予算措置を逃がしてしまうことも起こってくる。「そんな予算措置があるとは気づかなかった」という具合である。

５．６月１日　住民自身がつくりだしていく　子ども施設の整備拡充に向けて

６．住民の自主的な動きの広がり

近年、地方行政が子ども問題をめぐって、とくに福祉にかかわることで画期的な取り組みを展開しはじめたことは注目しておきたい。なかには、行政が積極的に問題提起をして、住民の中に福祉への取組みのうねりを作り始めた例もある。その中で、地方の政治・行政が、福祉について国の施策の下請け的性格からの脱出を試み始めたといえるところもあろう。

その点で、思い起こしていいのは、先にも述べたことだが、「本土復帰」時に、集落立保育園幼稚園が、一斉に閉鎖され、それに代わって公立幼稚園が設置されたことである。それは本土法制に合わせるということであり、また、予算措置が伴うので、整備が進み、集落の財政負担を減らせるという事があったかもしれない。だが、沖縄県特有のこの制度が、一挙に消滅に追い込まれたことは残念というべきだろう。このあたりの歴史的検討が必要ではなかろうか。

それだけでなく、戦後の２７年間に、沖縄住民は、創造的な自治体験をいろいろと積み上げてきた。「住民協同

のボトムアップとしての行政をどう築きあげていくか」を考える際に、こうした歴史的体験を振り返ることは有意義だろう。

先に述べた「やむにやまれず」スタートした有志の動きは、こうした戦後期の歴史的体験を今日風に継承発展させたともいえよう。

他府県では、１９６０年代後半から１９７０年代にかけて、保育園や学童クラブ設立に向けての親たちの要求が集まって、大きな社会的うねりを作り出す。それらが住民運動的色彩を強めていくなかで、親たちの共同による共同保育所や保護者会運営の学童クラブがあちこちに作られていく。それらの声と動きに押されつつ、自治体も、公立保育所や公設公営の学童クラブを沢山設置していく。こうした動きは、保育運動・学童保育運動を巨大規模にしていく。何千人以上の規模での研究交流集会が開かれ、数万部に達する全国誌が保育者・支援員だけでなく親をも巻き込んで、子どもをめぐる動きを共有化していく。

そのころの沖縄では、本土法制に合わせる形で、保育園が公立を中心につくられ、「やむにやまれない」有志による認可私立保育園づくりもすすむ。また、１９８０年前後、ようやく児童館設立が始まる。さらに学童クラブが１９８０年ごろ、「やむにやまれない」有志たちによって、保護者とともに設立されていく。それに行政関係者も支援しようとするが、どうすればよいか暗中模索であった。

１９８０年代に入ると、いくつかスタートした児童館の連携組織、また学童クラブの連絡協議会がつくられた。それらの第一回の会で、私は講演の形での問題提起を行った。もう一つ、私の思い出話。１９８０年代半ばに、当時の厚生省予算で「かぎっ子」対策のための保育所など園庭開放事業が始まったが、企画をどうすすめたらよいか模索中の那覇市福祉部から依頼されて、私が学生たちとともに試行してみることになった。与儀保育所・識名児童館・若狭児童館、さらに、それらとは別に浦添の仲間学童クラブで、子ども達対象にほぼ毎週の週末に遊び大会を企画するのだ。保育所の場合は、場所を借りて近隣で遊ぶ子ども達を集めて、遊び大会をする。

この企画は、なぜか好評で、転勤で私がいなくなった後でも継続されていった。学生たちは、教育学部生で、別の形での教育実習となった。

こんな試行錯誤は、１９８０年代の沖縄の子どもを対象とする福祉・教育の風景の一つだった。

当時の関係者のなかには、「すすんだ本土」の実践から学ぶという姿勢が強かった。そうした期待にこたえる形で、私もかかわったが、重要なことは、沖縄の現実に立脚した沖縄独自の実践の創造という点では、スタートラインについたところだったことである。

６．６月５日　「家庭教育」　親　学校

ここまで５回連載したが、近年の取組みの特徴の提示が、歴史的経過の説明へと焦点移動してしまったようだ。そこで、改めて近年の取組みを引き起す背景にあった、１９９０年代後半から表面化する大きな変動への「歴史地図」を描くことにしよう。

今では、「子育ては、親がするものだ」という考え方は当たり前とみられているが、歴史的に見ると大きな変化が見いだせる。たとえば沖縄の農村部では、１９６０年代までは、子育ては、親／集落がするという色彩が濃か

った。親と集落とが一体となっていたのである。だから、集落立保育園が存在していたのだ。そして、集落単位の学事奨励会、あるいは教育隣組が１９７０年代はじめまで存在していた。子どもが一定の役割をになう地域行事も存在した。だから、地域によっては「シマの子ども」という表現が見られた。周辺の大人がシマの子ども達のことを知り、見守っていたのだ。

ところが、１９７０年代以降、事態が激変する。「シマの子ども」の性格は薄れ、集落単位の学事奨励会、あるいは教育隣組、そして地域の子どもにかかわる行事がなくなっていく。それは、地域の遊び場・自然のなかでの子ども集団の動きが減っていくことに通じる。

また、農家では、子どもが重要な労働力であることが１９６０年代に薄れていく。農家でなくても、子どもが家事家業の一部をになうことが、１９６０年代に激減していく。対照的に子どもたちに家業家事の「手伝い」をさせないで、「勉強しなさい」と言う親が増えていく。

そして、１９７０年代後半以降激増するのが、お稽古事塾・学習塾・スポーツ少年団である。地域のつながりを重視するところでは、大人たちが地域子ども会運営に深くかかわる。

この過程で、「親による子育て」（それを当時家庭教育と呼んだ）に、学校が主導的役割を取ろうとし始める。学校における子どもたちの学業を支える役割を親たちに求めた。それが「家庭教育」なのであった。親が親自身がもつ教育内容や教育方法でもって、子どもたちの教育をするのではなかった。

ということで、それまでもあったが、この時期、学校や教育委員会、あるいは PTA が主催する「家庭教育」講座などがしばしば開かれる。私もその講師を務めることが何度かあったが、そこで求められたのは、学校教育に子どもが熱心に取り組むようにするためには、親はどうすればよいか、ということであった。家業や家事、そして子どもたちの将来の生活設計をめぐって、親自身が考えたことにもとづいて、子どもたちに教育することは、片隅に追いやられていた。

その家庭教育の成否は、学業成績が示すものとなった。

以上は、農村部に焦点をあてて書いたが、都市部では時間的により早く、このような状況があらわれていた。

７．６月９日　学校→「勤め人」の流れの増大・確立

前回述べた「家庭教育」のありようは、戦前からも学校は求めてきたが、その浸透は大変限定的であった。象徴的には、『家庭でも標準語を使おう』というスローガンであった。

戦後もなかなか浸透しなかった。農業などの自営業を中心とし、その担い手を養成するという意味での「家庭教育」は、親自身の必要から推進されていたが、学校を含めた公的機関は、そうしたものを追求したわけではなかった。むしろ、登校と学業を阻害するものとみなしていた。

これまで述べてきた学校教育を支える家庭教育を推進する家族のことを、日本教育史研究の世界では『教育家族』という。戦前大正期にそうした家族は出現するが、裕福な家族に限定されていた。戦後都市圏を中心に少しずつ広がり始めるが、全国規模で本格的に進行するのは１９６０年ごろからである。沖縄の場合も、１９５０年代から多少の広がりを見せるが、本格的には６０年代以降、とくに７０年代半ば以降となり、９０％以上の家族をおおい始めるのは、９０年代のこととなる。

以上見たような変化を職業に焦点をあてていうと、農業から「勤め人」への移行の広がりを背景にもっている。沖縄では、戦前圧倒的多数が農業であったが、戦後劇的な変化を遂げていく。一つは戦争の影響であり、米軍基地による土地取り上げの結果でもあった。それに並行して、金銭経済、つまり商品購入による生活の営みの比率の増大があった。そして、１９６０年代から７０年代になると、「勤め人」が圧倒的多数を占めるようになる。農業においても、サトウキビや野菜生産・畜産という形で商品作物生産が中心になっていく。

それと並行して増大する高校大学への進学が、在学中の子どもの収入をあてにできないどころか、むしろ子どもにかかる多大な学費生活費を支える金銭収入を欠かせないものとしていく。

そのなかで、子ども達の人生コースが劇的に変化していく。学校を卒業して家業を継ぐのは激減し、どこかに「就職」することになる。つまり、学校卒業→「勤め人」というコースであり、できる限り、在学中に就職先が決まることが望まれるようになる。そして、学校が就職先を世話するようになる。

こうしたありようは、他府県では１９５０年代後半から始まり、たちまち一般化する。そのなかで、中卒就職者は「金の卵」といわれるほどであったが、１９６０年を境に高校進学が過半数を超えるようになると、高卒後就職が一般化する。

沖縄でも、多少時期的にはズレるが、学校卒業後直ちに就職することが広がる。１９６０年ごろ始まった本土企業への集団就職がそのさきがけとなった。高校進学も次第に一般化していく。とはいえ、他府県のように完璧なほど、この体制がつくられたわけではない。大学進学率も徐々に上がっていくが、２０２０年になっても、他府県とは大きな差があるが、その背景に学費生活費の捻出が難しい家族が多いことは、広く知られている。

８．６月１３日　学業成績による輪切り選抜体制の広がり

就職と進学をめぐる状況変化のなかで、中学高校における進路指導は、上級学校進学および企業就職の指導（世話）に焦点化していく。その際に、学業成績が選考基準のなかでの比重を高めていく。典型的には、在学校が内申書の点数で進学高校を選択し、それに生徒が従う形がある。そのなかで、普通科―実業科の序列をつくるにとどまらず、すべての高校の点数序列をつくる県が登場し、さらに一般化する。そうしたありようが１９６０～７０年代に「確立」する。そうした偏差値による「輪切り選抜」の進行のなかで、出身高校を誇りをもって自己紹介する生徒が減り、制服が点数表示機能を示すことを避けようとする気持ちが生徒のなかに広がる。

大学生にあっては、就職活動（就活、シュウカツ）が３年生末から始まり、長期の取り組みとなる。それを支える就職指導部が大学に置かれる。一部上場企業など有力企業への就職をめぐる競争が進む。その際、企業側が設定する指定校になるかどうかは大学受験上「難関校」であるかどうかで決まるようになる。

沖縄では、１９８０年代半ばまで、そこまでには浸透していなかった。実業高校が、沖縄地域内の優れた人材を育てる役割を果たしていたし、卒業直後ではなく何年かの試行錯誤を経て地元企業に就職定着する例がかなりの比率に上っていた。

また、一部上場企業などは沖縄内には数社しかない。圧倒的なのは、地元の中小企業である（経済統計的に言うと、中小企業というよりも零細企業が多い）。それだけに、教員を含む公務員就職が重要な位置を占め続けてきた。

と同時に、沖縄における起業動向は注目される。海外を視野に入れるなど産業構図の優位さを活用した動きがその一つである。開閉業率の高さは、起業をめぐる安易さを示すとの考えもあるが、起業への積極性を示すともいえよう。このように日本国内では高い起業率を示すとはいえ、他の先進諸国に比べれば、それほどとはいえないだろう。

１９７０年代末から、大学受験成績での他府県出身者との点数差の表面化をきっかけにし、学校における学力を問題にしつつ、教職員批判を強め、それらを政治問題化する動きが広がる。そうした動向に先導されるようにして、受験専門型私立高校が出現し、しばらくして公立受験専門高校も作られ、さらに公立高校の学区を拡大し、点数序列秩序が各学校を覆い始める。並行して「学力対策」運動を広げる動きが強まる。

それらは長期に継続し、２０００年代に入って行われるようになった全国学力テストのなかでの沖縄県の順位上昇を、最優先目標化する。それを学校だけでなく、「家庭教育」の中軸に据えようとする動きが強まる。と同時に、それらをめぐる不祥事続発をきっかけに問題構造が指摘され、運動にブレーキがかかり始める。

９．６月１７日　人生選択創造における学校依存の強まり　高額教育費

以上述べてきたことからわかるように、子どもの将来人生の選択創造において学校が占める役割が、沖縄でも１９６０年前後から高まり始め、１９８０年代半ばには圧倒的位置を確保する。

こうして、子どもたちの人生選択創造の鍵は、学校卒業後どこに就職するか、そのためにどの学校に入学するかに焦点があてられるようになっていく。

こうしたなかで、子どもに対して、家業など特定の職業選択を指示するのではなく「自分で選んだ希望の道を進みなさい」と言う親が増加していくが、「希望の道」に進むためには、学業成績が鍵になるとみなして、学業成績をあげることに焦点化して「家庭教育」をするようになっていく。こうして、学校が絶対的地位を確立し、学校の下請け補完として家庭教育が位置づくようになる。そして親は、学校から指示された家庭学習を子どもが進めることを手伝うようになる。手伝うどころか指示し、時には強制するようになる。いわゆる教育ママパパになるのである。

それは、家庭教育の画一化を生むと同時に、他の家庭との競争関係さえはらみ始める。そうした学校教育を補完するものとして学習塾通い、通信教材購入などが広がり、無料ないしは安価を原理とする教育費が、実は高額になり、家計の大きな部分を占めるようになっていく。県外大学にやらせるためには、〇〇〇万円が必要と、世帯の年間収入をかなり上回ることが求められるようになる。場合によっては数倍以上に達する例も生まれてくる。

調査データも、それを物語っている。全国学力テストに付随して行われる調査などでは、家計収入と学業成績との間に相関がみられる指摘が相次ぐ。県民所得が全国平均よりはるかに低い沖縄県の保護者や子ども達は辛酸をなめているといってよいほどだろう。

ところで、奨学金に給与制が多かった時期には、親の仕送りなしに大学生活を送ることが可能だった学生がかなりいた。しかし、貸与制奨学金、つまりは教育ローンが大部分を占めるようになって、大学進学のためには、教育ローンとアルバイトに頼らなくてはならない学生が増えていく。

私が再び沖縄の大学で教えるようになった２００４年ごろ、「キセツで生活費と学費を稼いできて復学してき

ました」という受講生に出会った。キセツとは、愛知県などにある自動車工場で働く季節工である。前年まで教えていた愛知県の大学での受講生には存在しない事例で、とても驚いた。また受講生たちと授業が終わる夕方以降に懇親会をしようという１９８０年代まではよく見られた提案をすると、一か月以上前でないと、バイトシフトがあって参加が難しいという学生が多くて断念した。それほどに、教育費問題は、学生自身と親に深刻さをもたらしている。

だからこそ、沖縄県内の私立大学は、全国水準からみると破格の低額授業料でやっているのだ。また、児童養護施設出身者の授業料を無料にするなどの大胆な取り組みをしているのだ。

ここに、教育の問題が経済の問題であるし、さらに福祉の問題であることが如実に示されている。そして、子どもをめぐる「貧困・格差」構造が、学校と結びついてすでに１９８０年代につくられていたのである。

１０．６月２１日　「標準」とされる核家族よりも、多様な家族の形のなかで考える

視点を変えて、家族と教育、家庭教育の問題を考えてみよう。

「シマの子ども」であるありようは、１９６０年代までにはほぼ終わった事を先に書いた。では純粋に「家族の子ども」になったであろうか。１９７０年代に家族というと、沖縄でも核家族を標準的イメージとして描く例にしばしば出会った。両親と子どもで構成し、主として父が勤め先で働き、子どもの教育には専業主婦である母親が主に担当するというイメージだった。

しかし、沖縄県では、専業主婦の母は一般的な存在ではなく、母が勤めに出ることが広く行われていた。多くの場合、いまでいう非正規雇用ではあったが。そして、子ども数の減少傾向が沖縄でも進行し、子ども数が１～３名といったところが多くなってきた。祖父母世代と同居する三世代家族は減少していき、都市地区では例外的な存在となったし、農村地域でも少数派となっていく。

また、沖縄の離婚率の高さは、早くから話題になってきた。子どもにかかわっていうと、単親家族の多さが目立ち始めたのだ。三世代家族、核家族、単親家族、単身赴任による複数住居に分かれて住む家族、これらとは異なる形の家族など、家族の形の多様化が進行していく。また、「シマ」の縮小を含め、近隣関係の希薄化が進行し、家族の対外関係の希薄化が進行する。親戚関係も縮小傾向が見られる。少子化による従兄弟従姉妹関係の縮小だけでなく、近所に住む親戚が減少する。また、家族の中に顔を出す近所のおばさんおじさんも減少していく。それは家族の中に生じた難題への対処をサポートする第三者が縮小していくことでもあった。そのなかで、全く知らない人へのカウンセリングや電話などによる相談という新たな形が増加していく。そして、家族というかどうか微妙であるが、高齢者・若者のなかに単身世帯が激増していく。

こうした家族の形の多様化にもかかわらず、核家族を標準的なものとする観念は根強い。とくに、自分たちを「中流」とか「普通」とかと思う人たちの間で強い観念となる。１９８０年代、子どもの問題行動などにかかわる PTA などの集まりで、こんな発言にであうことがしばしばだった。「ここに来ている人の子ども達は問題がないのだけど、来ていないところの子どもに難しい問題が多い」。発言者は、こうした「中流」「普通」の人達だった。これは典型的な標準観念に囚われている例だろう。

また、高校生のアルバイトについて、「高校生は学業に専念することが本来の姿なので、アルバイトは禁止」とする高校がかなり存在した。実際には、遊びに使うための稼ぎではなく、学業継続のための生活費稼ぎに追われ

る生徒がかなりの数に上っていた。その際、こうした発言をする「中流」で「普通」の家族だと自認する保護者だけでなく、学校教員もそれと同質の発想をする例が多かった。そうした前提にたって、学校が推進する学力向上対策運動に保護者を動員する動きが８０年代末から広がっていく。こうした標準観念が広がる１９８０～９０年代に高校大学生活を送って教員になった人たちが、現在のベテラン・中堅の学校教員に多いことも、頭に入れておく必要があろう。

こうした親の「標準」の姿は、学校の求める標準と重なり合う。そして、その標準に合わせきれない子どもたちの間から、異論・異議申し立てが続出したのが、１９８０年代以降である。ただし、異議申し立てを言論でするよりも、「行動」としてすすめることが主軸となった。言論の場では「中流」「普通」がすすめる「標準」が圧倒し、異論が出しにくい状況がつくられていたのである。そんななか、子どもたちのなかに校内暴力、いじめなどの行動が表面化していく。そして、それらの行動を強力に管理統制する動きがとられるなかで、いじめ、不登校、ひきこもりなどの「静かな異議申し立て」の性格をもった行動が、１９９０年代以降広く深く潜行していく。

１１．６月２５日　人間関係の薄れ　親子密着

前回述べた家族の多様な形の広がりは、家族構成員数の減少と並行していた。と同時に、それが、家族の閉鎖的傾向の増大につながっていくことがある。そして、前回述べたように、難題への対処をサポートする第三者も縮小していく。こうして家族外との関係を薄くしていき、孤立状況さえもつ家族が増えてくるようになった。都市の大規模集合住宅では、「隣に住んでいる家族がどんな人なのか知らない」例が増えてくる。地域の自治組織に加入していない家族の比率が増え、地域の半数以上が未加入である例さえ珍しくない。農村部でも、そうした事例が増え、地域組織に参加するのが「普通」だとはいえない例が増えてくる。

こうした人間関係が薄くなってきた現象は、１９９０年代から世界的に注目されるようになった専門用語でいうと、「社会資本」の問題である。私は「人間関係資本」と言った方がよいと思う。この用語は、個人がもつ「資本」には、経済資本、文化資本があるとし、注目すべき理論構成をしたフランスのブルデューの論に加えて、アメリカのパットナムあたりが提起した用語であり、２０００年代に入って、日本の研究者もその枠組みを使うようになったものである。とくに注目したのは医療関係者であり、社会資本と寿命の関係などに焦点を当てた論が展開された。沖縄でも琉球大学医学部関係者が調査をして、それまで長寿として知られた沖縄で寿命の伸びが緩くなり、特に男性が著しいことが、関係者にショックを与えたが、その大きな原因が社会資本の縮小によると指摘した。（詳細は、浅野誠『魅せる沖縄』高文研２０１８年参照）

子どもの成長にとっても、社会資本の縮小傾向は顕著である。かつて「沖縄の子どもの学力が低いとしても、豊かな社会資本をもっている強味がある」と発言する人さえいたが、沖縄の子どもたちにとっても、１９８０年代以降の社会資本の低下は著しい。その事例を並べてみよう。

・外遊びの減少　遊び仲間の数的減少

・つながりを持つ大人の減少

・「人見知り」と自称する大学生の増加

・「生の」関係ではなく、バーチャルな人間関係の増加　ＩＴゲームへの過剰依存は、人間関係を閉じがちにする。

※　SNS には人間関係を広げる場合と閉じ込める場合とがある。

以上をまとめて、「子どもの孤立傾向」の増大ということもできよう。そのなかで、反比例するかのように、親子関係の密着化の進行をも伴うことがあった。いわゆる「親子べったり」だ。かつて他府県の大企業の入社式に親の同伴があったことが話題になった。沖縄でも、大学入学式に親が同伴するのは、すでに１９８０年代には通例になり始めていた。

このような状況を「仲良し親子」と呼ぶことがあるが、それが友人知人、つまり社会資本の増大を伴っていればいいが、逆に親子関係に閉じこもり、その他の人々との関係の縮小であれば、大変気になる。

ところで、中学生期を中心に「第二次反抗期」ということがいわれ、「親からの精神的自立の過程」を示すといわれていたが、その「第二次反抗期」をもたない子どもが１９８０年代から増え、今では、ほとんど出会わない言葉になっている。それは、親子密着の関係とかかわりがありそうである。

密着は、親離れ子離れをおしとどめがちにし、２０歳代３０歳代以降になっても、密着状況を継続させる例もある。親離れしない子どもだけでなく、子離れしない親なのである。そのなかには、子どもを親の所有物とみなす傾向が強まり、それが虐待を引き起しやすくしてしまう。

１２．６月２９日　虐待　子どもの相互関係における格差貧困

親子密着が、時に子どもを親のいうなりにするための行動を生む時がある。それには暴力や言葉を使っての虐待を生むことさえ見られる。また密着とは対照的な放任、というよりは放置、また無視が、対照的な形の虐待を生む。

そうした虐待は、閉鎖的な家族で、家族外の第三者の目にふれない状況で促進される。また、DV（夫婦間暴力）のような夫婦関係における支配管理関係のなかで促進される。

これらは、１９９０年代に認知されはじめ、００年代以降、かなりの規模に上っていることが気づかれ始める。

こうした虐待の背景に、家族における貧困・格差の問題があることがしばしばである。その貧困・格差には、経済資本だけでなく、文化資本、社会資本の面で見られる。たとえば、文化資本・社会資本でいうと、暴力的親子関係における世代連鎖が多いと言われるが、それは、そうした文化資本社会資本をもつ家族とそうでない家族との格差として表れる。あるいは、家族の文化、あるいは家族関係における貧困が背景に存在していると言われる。

ここでは詳述しないが、高校中退・１０代妊娠などにも、そうした事例がからむことがしばしばである。

と同時に、家族の問題だけに閉じて考察してはならない。家族外の多様な経済資本・文化資本・社会資本が、家族の不十分さを代替しうる可能性も広くあり、それらの充実の度合も見ていく必要がある。

たとえば、高校が、家族条件で不利な条件に置かれている子どもに居場所・活躍場所を提供する例が少ないとはいえ、皆無ではない。あるいは、１０代後半における友人関係、あるいは男女関係が、人間関係資本として貴重かつ有効な役割を果たすことがある。

その点で、子どもの相互関係が重要な意味を帯びる。保育園・幼稚園・学童クラブ、学校における学級・部活などで築かれる人間関係がどうなっているかに関心を寄せたい。そうした相互関係づくりにハードルの高さを感

じて、消極的になる子どもたちが多くなってはいないだろうか。その結果、人付き合いをしないままで、自分を「人見知り」と思い込んでしまう子ども若者さえ広がっている。

１３．７月４日　行政用語としての教育と福祉

以上述べてきた子どもをめぐるありようは、教育と福祉に深くかかわる。だが、教育と福祉は、地域とか家族とかに結び付いた言葉ではあるが、それ以上に行政にかかわる言葉として使われることが多い。たとえば、保育園、幼稚園、認定子ども園の三つはどう異なるかについて、すっきりと説明できる人は少ない。というのは、それらは、まず何よりも行政用語として使用され定義され、それをもとに施策が展開され、予算措置が講じられてきたからだ。

教育と福祉とにかかわる施策・予算措置が、同じ子どもにかかわるものでありながら、全く別のものとして展開されてきた歴史が長い。端的にいうと、文部（科学）省と厚生（労働）省という縦割り行政システムで展開されてきた。いわゆる「縄張り」である。それが、地方自治体行政にも貫かれ、教育委員会と福祉部局に大きく二分されている。

そして、いろいろな経緯があろうが、教育委員会には、スポーツ・文化・生涯学習などの分野も含まれ、福祉部局には、健康医療・生活保護・学童クラブなども含まれている。（なお、学校教室を使う学童クラブに相当するもので、教育委員会管轄であることもある）

両者が、同じ一つのものに対しておのおの独自に行政上の管轄をおこなうこともあることが、さらに複雑にしている。学校における子どもの健康にかかわる行政がそうである。医療系大学専門学校もそうである。

そして、教育分野については、日本では文部科学省が、同じく福祉については厚生労働省が、絶大な権限をもって行政機能を貫き、地方自治体の独自性が弱いことが、両分野の提携協同関係をさらに複雑にして、やりにくくさせている。

少し脱線して指摘しておくと、地方自治体における私立学校にかかわる業務には、首長部局がかかわることが多く、教育委員会の関与は限定されている。

そうした中央官庁の絶大な権限が、地方自治体の業務を下請け化し、地域住民や家族保護者の主体的なかかわりをも抑制している。また、地方自治体にあっては、県と市町村の関係がある。たとえば、小中学校教員は、身分としては市町村に属するが、人事配置などは県が行っている。

そうしたなかで、市町村の教育委員会が、教育内容についての権限行使することは限りなくゼロに近い。せいぜい文部科学省から（一部は県から）おろされてくるものの運用面での独自性を出すことに限られる。

だから、地域住民や保護者が、教育内容について自治体や学校に向けて発言することは限りなくゼロに近い。子どもをめぐって、いじめなどの問題が生じたとき、学校の統廃合や立地などで、意見表明が行われるにすぎない。

福祉を含めた一般部局でも、ほぼ同様のことが言える。さらには、市町村職員は、３～５年前後での部局をまたがる配置替えが行われ、特定の分野における専門性を持つことはなかなか難しい。専門性というと、どの分野に配置されようとも、行政手続きを無難にこなすことがまずは求められ、国や県から降ろされてくる施策・予算措置を適切に処理するという行政上の専門性が軸になる。無論、選挙で選ばれた首長や議員と連携して、市町村

独自の施策を生み出すことに一定の役割を果たすことはできる。

１４．７月９日　子どもにかかわる社会組織と地域自治組織

教育・福祉分野において、国が圧倒的な権限をもっている現状では、自治体は、国が指示し予算措置を講じるものを、いかにより正確迅速に運用するかが課題とされてしまう。新型コロナ対策などはその典型で、それに振り回された自治体には、それ以外の日常業務や自治体独自業務に難渋してしまう実情がある。ある職員は、「国は方針を出すだけで、実際の業務は自治体に預けられて、自治体は大変なことになっている」と語る。近年の国の福祉業務も、そうした様相が色濃い。

ところで、かつては地域の住民組織（自治会などの自治組織）が、教育や福祉にかかわる業務の重要な担い手であったが、その住民組織の弱体化が１９６０年代以降激しく進行した。いまでは、ほとんど機能していない所さえある。そうした所では、民間企業が運営する組織、あるいは NPO などを含め、社会運動組織が重要な役割を担う例が増えている。

そうした変化と並行して、自治体のリストラ・財政難が進行し、これまでの自治体業務のかなりの部分が、そうした諸組織に委託されていく。指定管理者制度はこうした流れの中で生まれ拡大してきた。いまでは、役所の窓口業務でさえ、指定管理者が担当しているところが増えている。

そうした受け皿を見いだせない場合、役所自身が受け皿つくりに力を入れる必要があり、その業務が大きい比重を占めるようになっている。さらに、役所職員ですら非正規職員がかなりの比率を占めるに至っている。

こうした地方自治体におけるリストラと民活は、国が主導して展開したが、１９９０年代末より広がり、「とどまることを知らない」といえるほどの進行である。その結果、教育、福祉、文化、土木建築などといった分野での専門性をもった職員が減少し、職員の業務は行政実務と施策立案推進へと重点をますます移動させていく。

だから、いまや民間企業や社会組織（社会運動組織といっていいものも含まれる。NPO や一般社団法人。福祉法人や学校法人も）のありようや力量、自治体のありようや力量、そしてこの両者の関係を視野に入れて、子どもの教育や福祉の地図を描くことが求められる。民間企業や社会組織は、個人加入の任意参加組織である点で、アソシエーション（自発的結社）と私は呼んでいる。（学校法人や福祉法人のなかには、そうした色彩と、他の色彩とが併存していることも多い。）

その際、長く重要な役割を果たしてきたが、近年衰弱しつつあるコミュニティ（地域自治組織）をどうするのか、という課題が並存している。地域住民が、子どもの教育や福祉にかかわる際に依拠するのは、これらのコミュニティ諸組織と並んで、PTA や地域子ども会など、公的機関ないしはそれに準ずる組織が用意したものである。

１９６０年代以前では、国と自治体がかかわる「公的組織」とコミュニティ組織とがからんだ長い歴史をもつありようが教育や福祉を支えてきた。しかし、そのありようが徐々に、とくに１９９０年代以降は劇的に変化し、民間企業を含めて流動性を備えた多様な社会組織（アソシエーション）が舞台の広汎な部分を占めるようになってきた。そして、自治体ですら、旧来の官庁組織であるだけでなく、起業的性格さえ滲み出し始めた。

そのなかで、教育と福祉を支えていくために住民ができることは、自治体に対して、それらの維持推進を要請するだけでなく、住民自身がコミュニティやアソシエーションをいかに築き、そこから出てくるものをボトムアップで、自治体行政、さらに政府施策に反映させ、自治体、そして政府からの財政支出をふやしていけるかどう

か、ということも大きな柱となってきた。

１５．７月１４日　学校をめぐる歴史変化

ここで、子どもにかかわる教育・福祉をいくつかの組織に焦点をあてて見ていこう。最初は学校であるが、主として小中学校に焦点をあてて考えよう。

明治期に設立された学校は、国→地方行政組織→地域住民組織という流れの中に位置づけられ、トップダウンによる、住民および子どもたちを管理統制する機能を絶大な権限をもって推進していく。だから、学校が指示するものは、国という絶大な権力を背にした有無をいわさぬものであった。

その際、地域住民組織間に存在してきた対抗・競争意識を活用して、学校への忠誠競争を組織してきた。その前段にあるのは、字対抗の「原勝負」（農作業・農地・地域管理をめぐる競争で、形を変えて戦後まで続いた）であり、子どもの通学競争・学力競争にもそれを援用してきた。小中学校の運動会における字別競技や、市町村の体協行事に、今もその痕跡が残っている。それだけに、地域自治組織は、１９６０年代ごろまでは、地域住民を管理統制するだけでなく、生活扶助・安全確保・福祉教育機能を強力に果たしてきた。１９７０年代初めまで見られた字毎の学事奨励会、とくに奨学金支給にもそれが反映していた。

また、字別対抗の動向は、学校の立地・新設分離・統廃合にもあらわれた。戦前にもすでにそうしたことをめぐって、市町村施策に異議申し立てをして、集団的不登校をする字が見られた。字単位の自治的取り組みが否応なく要請された戦後期にも、こうした「事件・紛争」が続発した。

そうした主として字単位の自治的取り組みが、字立幼稚園を至る所に出現させた。それが、全国的にも例をみない沖縄県における就学前就学率の高さをうみだしたのだ。そこで注目されるのは、教育と福祉との行政的二分状態ではないありようが、字単位の取組みの中で継続してきたことである。

だが、日本復帰後、例外を認めない政府の施策の中で、そうした独自性が薄れてきた経過がある。そして、福祉行政系列の保育園と、教育行政系列の幼稚園とに二分されたのである。

こうした戦後沖縄における地域独自の取組みでは、学校教師の地域密着的特質をともない、学校教師が地域リーダー的役割を果たした。地域における婦人会でも、学校教師の役割が大きく、母親と女教師の会が大きな役割を果たしたことも記憶に残ることである。

しかしながら、「日本復帰」に伴う日本システム化が成功のうちに進んだことが明瞭になる１９８０年代以降の施策では、沖縄の自主的独自的営みは薄らぐ。とくに地域との深い結びつきが減退していく。それに代わってかのように、学校と「家庭」との直接の結びつきが前面に出てくる。そのなかで、子どもの人生進路も、学校における学業成績次第であるというありようが進行していく。そして、それを受け止め、学校での学業をサポートするものとして家庭教育が位置づくことは先に述べた。そして、学習塾の広がりが象徴するように、家庭の経済状況が学業に強くかかわり始める。義務教育は無料が原則であるにもかかわらず、「金次第」が横行し始める。そこに、新しい形での福祉問題が、貧困格差の色彩を濃厚に帯びつつ、学校をめぐって登場してくる。

他方、地域の自治組織や、保護者以外の住民にとっては、学校との関係が薄くなっていく。そして、沖縄独自の教育の色彩が薄れ、全国平均に合わせることが重視されていく。

１６．７月１９日　学校をめぐる異議申し立て　「沖縄独自」の追求

前回述べた学校のありように対して疑問を感じることが、２１世紀に入って広がっていく。

まず学力テスト結果の全国比較のなかでの「最下位脱出」の取組みが、いろいろな歪みをもたらしつつ進行するが、それが最終結果として、子どもたちの将来に希望を与えたかどうか、という疑問がある。小学校での学力テスト結果の上昇では、それなりのプラス数値が出てきたが、中学高校になったらどうなのか、という疑問である。さらには、そのことが大学進学率を押し上げ続けたのか、といわれれば、４０％台直前でストップしたままである。その背景には、大学進学を可能にする経済的状況が生まれないことがある。そこには子どもの高い貧困率などに表れる格差貧困が鋭く投影している。たとえ入学しても、頼りにする奨学金は事実上の教育ローンであり、その返済に悩む２０代３０代が増加し、破産に追い込まれる例も生まれてくる。ついでに書くと、大学生・専門学校生が学費・生活費をどこからえているのか、という研究が意外に少ないように思う。

また、学校卒業後の就職にあっては、非正規が増加している。学校での学業に依存して将来の人生を構想するだけではどうにもならないことが明るみになってきた。

そのなかで、子ども自身が地元志向を強めてきていることが注目される。県外ではなく県内の就職を希望する若者が多いことが、それを象徴しているだろう。

これらのなかで、「日本の平均」「日本の標準」を追いかける事への疑問が広がる。「沖縄独自」のものを追求する動きは、底堅く存在してきただろう。それどころか、拡大する傾向さえ見せている。音楽芸能分野で「日本に追いつく」というのではなく、「日本をリードする」、さらには「世界をリードする」ような「沖縄独自」性を持って展開している点が強烈な刺激をもたらしている。それにとどまらず平和を希求する人々の動向（社会運動・地域運動・世論など）は、大きなうねりとなって、世界とつながっている。また、最近の観光などの産業展開にしても、沖縄独自性は大きな注目を浴びている。

それらは、沖縄に大きな「自信」と「誇り」を築き上げつつある。

こうしたなかで、潜在的には存在してきた、学校を「沖縄の学校にしていく」動きが、顕在化していくことになろう。そうしたこととつながって学校を地域に戻す発想が広がり、沖縄基盤に立ち、世界とつながる学校とはどういうものかを模索する動きも芽生えていくことだろう。そのなかで、校長を含めた学校教員が、地域に結び付き、地域リーダーになっていくという５０～１５０年前に見られたありようの再構築があってよいだろう。

ところで、学校は、家業家事分担という形の労働から子ども達を引き離す役割を果たしてきた。と同時に、家業家事にかかわる家庭教育機能をも減少消滅させてきた。この点への注目が意外に少ないようだ。６０年以上前のことだが、１０代前半の私は家業継承教育を家業分担という形で「仕込まれてきた」。

※家業は婦人服仕立業と農業

では、今日の時点で、家庭教育の再構築はどう展開されているのだろうか。

１７．７月２４日　「勤め人」になる親の増加、地域子ども集団の縮小と保育園・学童クラブの広がり

１９７０年代初めまでの字立保育園幼稚園に代わって、市町村立幼稚園保育所、認可無認可保育園の設置が増加してきた。そして、学童クラブも激増してきた。その背景について見ていこう。

まず親が離農し「勤め人」化したことがある。それは両親ともにであり、その比率の高さは、沖縄の特徴ともなってきた。そのため、昼間の乳幼児の世話をどうするか、という問題が発生してくる。

三世代同居家族で、祖父母に乳幼児の世話を依頼することもあったが、１９７０年代を境にして、三世代同居家族が激減していく。祖父母は田舎に、親は都市に住む例が増えていく。

近隣関係が弱まり、親の都合がつかない時に、近隣の大人が世話をするということも激減していく。

そのなかで、「シマの子ども」と言うありようも縮小していき、地域子ども集団が薄れていく。となると、乳幼児期だけでなく、少年期の子どもの世話も必要になってくる。そうしたことが広がっていく時期（１９７０年代末以降）に、塾・スポーツ少年団・地域子ども会、そして学童クラブが激増していく。児童館の設置開始も同じ時期である。

もう一つ、子どもの成長上、子ども集団が重要な役割を果たすという認識が浸透し始める。２１世紀に入ると、社会資本（人間関係資本）として地域子ども集団への注目が広がり、それへの期待が学童クラブ・児童館増加にこめられていく。

また、保育園や学童クラブにおける実践の充実向上のなかで、集団保育が子どもの成長に肯定的役割を果たすという認識が広汎なものになったことも大きな変化である。かつて見られた「子どもを預ける所、つまり託児所」的イメージを超えるものになってきたのである。

保育園や学童クラブの増設は、１９７０年代に始まるが、２０１０年代に第二の波が訪れる。その背景には親たちの要求がある。と同時に、政府が、女性労働力増加策の視点から、予算措置を激増させたこともある。それらは待機児童問題と言う形でもマスコミに登場してくる。

政府や自治体は、その要求に応えるために、福祉予算を抑え込む狙いをもって、公的施設を増やす方略よりも、先に述べた有志による「やむにやまれず」設置に動くことに依存した展開であることが注目される。だから、行政による財政補助・施設建設補助という面と民営化という面とが重なって登場したのである。

同様のことは、障がい者・児、とくに発達障がい者・児のための施設の激増という事でも見られる。特別支援学校・学級の設立と並行するが、ほとんどが公的なものではなく、有志による「やむにやまれず」設置という形をとる。

不登校・ひきこもり支援にも類似の事態がみられよう。同様のことは、高齢者などへの介護サービスなどのでも広がっている。また、若者支援、とくに就業支援の分野でも展開している。

このように、「やむにやまれず」対応という面を濃厚にもつ福祉機能が先行する形で展開してきたが、福祉機能と結びついた教育機能が展開してきたことを見落としてはならない。

１８．７月２９日　学校における福祉

前回まで述べてきた福祉の視点からの子どもにかかわる取り組みの展開のなかで、学校にかかわる教育と福祉の動向はどうだったろうか。

日本の学校は、その９９％までといえるほど、中央文教行政の枠内で、その指示命令にもとづいて展開してきたことに大きな特質がある。学校現場自身の創造的展開はタテマエであり、それさえ「中央の指示」にもとづいて行われるほどのものである。

ところが、文教行政自体が、ここ５０年近く激しい変化を展開してきた。代表的なものとしては、「つめこみ」と「ゆとり」との間の揺れである。また、先進国における「創造力」重視動向の中で、「詰め込み」型の死守とそこからの脱却の模索との間の揺れも激しい。それを象徴するのは PISA テストへの対応である。A テストと B テストという苦肉の策まで登場した。そこには、「日本スタイル」の死守と、先進国動向に遅れてはならないという焦りが共存してきた。それは、大学入試におけるセンターテスト実施とその廃止にもよくあらわれている。

そうした「揺れ」のなかで、沖縄県の教育界も揺れるが、どちらかというと、死守されている旧来の施策に力点をかけてきた。全国学力テストにおけるＡテスト重視、全国順位の重視などがそれをよく示している。２０２０年の全国学力テスト中止のなか、沖縄県だけ実施するのも、その例だろう。

そんな中、沖縄県独自のものと言うと、沖縄戦をめぐる教科書記述問題、教科書採択問題、あるいはシマクトゥバ重視などがあるが、教育行政のなかに占める位置はかなり低い。

こうしたなかで、沖縄県における子どもの貧困率の図抜けた高さなどに見られ貧困格差問題がクローズアップされ、福祉的視点からの関心の広がりと取組みが学校においても広がる。最近の学校教育での福祉的関心の広がりの事例をいくつかあげよう。

学力と保護者の経済状況との相関の高さへの注目　具体的取り組みとしては、不鮮明だが。

奨学金について、貸与がほとんどで事実上教育ローンになっているなかで、給与奨学金の拡大の検討

以前から行われている就学補助について、周知不徹底状況改善への取組み

学校給食費支払いが滞っていることへの対応

子どもへの虐待についての通報促進をはじめとする対応

スクールソーシャルワーカーの学校配置

このように関心は広がるが、本格的取り組みは、これからだという段階にあろう。

１９．８月３日　（続）学校における福祉

学校における福祉的取り組みへの関心の広がりは、これまでの教育の取組みといかにかみ合わせて、学校構造として本格化することが大きな課題として存在する。

そうした時に、新型コロナウィルス対処としての、学校の休講措置が、政府の指示を受けて実施される。その折、「休まない」「休めない」学童クラブや保育園など福祉系施設が、感染の危険は学校同様であるにもかかわらず、休校の学校の受け皿となる。それらは、政府の指示で行われるが、学校と学童クラブという現場サイドの意向や判断は「無視」状況にあった。「非常事態」という名目で行われたそうしたありようには、見過ごすことのできない問題が存在している。

もう一つ巨大な問題として、「幼保一元化」と言われる数十年間言われてきた問題がある。そこには、教育行政と福祉行政という中央官庁の「縄張り」構図が存在している。現場では、行政の「縄張り」どうのこうのというよりも、実践のなかで、教育と福祉を深くからませて推進するしかなかったが、その現場の意見は重視されず、行政的視点で、「子ども園」という施策が登場し、幼稚園・保育園・子ども園という三種の併存状況が作り出されつつある。

同様のことは、学童クラブを学校校舎を使用して行う場合に、教育委員会系列の存在になるという奇妙な形が登場している。

教育とか福祉とかの系列下に置かれること以上に、何よりも行政の系列になり、教育行政・福祉行政の系列下のおかれるという奇妙なありようが生まれる。しかも、それらが、現場の中から作り出されるのではなく、中央政府の上意下達の施策の中作られるのである。

もう一つ注目しておきたいのは、近年スタートした子どもの福祉にかかわる諸施設の多くが、緊急対応機関・施設の要素、つまり「やむにやまれずスタート」したものである。そのため、多くの子ども食堂のように、財政的支援なしに寄付を中心に運営している。安定して長期に運営していくためには、財政支援と人材確保が必要不可欠になっている。

２０．８月８日　**沖縄おこしと人生おこし**

私は、２０１１年に「沖縄おこし　人生おこし」（アクアコーラル企画刊）という本を出したが、読者の関心を期待ほど引き出すことができなかった。奇妙な言葉という印象を与えたかもしれないが、そういうアプローチから考えることが珍しかったからだろう。いまではどうだろうか。

子どもたち、さらに若者たちは、自分の人生をどのように構想し、それに沖縄をどうかかわらせているのだろうか。残念なことに、学校では、この双方とも扱う対象とはほぼなっていないから、子ども達の関心がそこに向かないのはやむをえないと言えるのだろうか。

「沖縄をどうしていくのか」にかかわりつつ自己の将来像を考えるよりも、テストの点数のなかでの自分の位置がどうなっているのかを考えつつ進学就職を考え、それをもとに自分の人生を考えるのが圧倒的になっているのではないだろうか。というより、自分の人生を具体的にイメージする機会が限りなく少ないといってもよいだろう。家業を継ぐことが多かった祖父母の時代以前とは全く異なってしまったのである。だから、大都会やディズニーランドに憧れるなかで、「自分の夢」を考える子どもも結構いるのだ。

といっても近年、キャリア教育がいわれ、職業体験学習が行われる中で、職業については多少の現実的思考が高まっているかもしれない。しかし、全体としてみると、与えられたものを学習体験する要素が強く、自らの人生を選択創造するために、自らの学習を模索創造する点は大変未熟なレベルにある。

と同時に、仕事についての学習が職業についてのものに限定され、家事・育児などの仕事、性教育（人間関係を含む)、人間関係についての体験・学習は、すでに家庭科・保健科などでおこなわれているとはいえ、大人になっていくうえで十分かというと、かなりの不足だと言わなくてはならないだろう。炊事ができない。洗濯ができ

ない。友達・恋人をつくれない。エッチ動画だけの情報で、性への対応がわからない。といった状況がごく普通にみられる。数十年前とは全く事情が異なり、これらを学校で「教える」必要性が高まっているといえるかもしれない。

たとえば人間関係についての学習は、これまで子どもが成長していく中で「自然と」行われてきたし、特別活動の機会などでも行なわれてきたと言えなくもないが、実際の子ども・若者を見るとき、余りにも「人見知り」が多いし、未体験の世界に飛び出していく際に必要な対人能力の不足は多くの子ども達が実感しているようだ。たとえば、進学就職の際の面接でとまどうものが多い。また、異文化の人と出会い、共同で何かする際に、言語上のハードルだけでなく、異文化接触上のハードルが高すぎる実情がある。なかには、気づかぬうちに身に着けた差別感覚に囚われているものも多い。そのために、共同で何かをすることに向かわない子ども若者が多すぎるのだ。

２１．８月１３日　子どもの自信喪失　「上」「外」からの標準に囚われる

前回書いた状況のなかで、子ども達の自尊心・自己有用感の低さ、つまりは自信喪失状況が見られる。それは、現在に限らず、長い間の歴史的構図になっているのかもしれない。沖縄自身を否定的に見るようなありようが、長く引き継がれていると言えるかもしれない。そこを超えて、沖縄を高めつつ自分自身への誇りを高めるような教育と人間関係を育てていくことが求められる。

残念ながら、子どもに接する大人も、子どもの自己有用感を高めるような付き合いをしていないことが多い。その要因の一つは、過剰な競争関係の中に子ども達を追い込んで、標準とされる軸に沿って提示される「～～すべき」「～しなくちゃ」といったことを日々声掛けして、叱咤激励ばかりしていることにある。そのことで、子どもたちの自尊心を低めていることに気づいていない保護者は多い。と同時に、学校自体もそうした体質に、長年染まってきた。

大人が子どもの将来に寄せる期待についても、テストに象徴される学業競争に焦点化することで、子どもの人生づくりを膨らませるような働きかけがあまりにも不足しているのだ。

ここまで、余りにも学校や保育園などの制度や施設を中心に教育や福祉を考えすぎてきたかもしれない。それ以外の子ども集団や家族など子どもを取り巻く人間関係にかかわっては、あまり語らないできた。

それらは、５０年前と余りにも変化してきた。今では当時の常識が全く通じない状況さえある。と同時に、新たな創造の芽も広がっているといえよう。

そのあたりに焦点を移して、今後の教育と福祉をめぐる創造への見取り図を描いていこうと思う。

たとえば沖縄では、男は職場で職業に就き、女は家庭で家事育児するという性別役割分業を前提とする核家族は、例外的存在だった。にもかかわらず、そのような核家族が標準であると広く思われていた時期が長い。今でもそう思い込んでいる人は多い。

そうしたここ数十年の歴史のなかで、共働き家族または単親家族のなかで行われてきた、職業、家事育児、人間関係のありようについての模索的創造的体験の蓄積は、莫大なものである。それは苦難に満ちたものが多いとしても、それが多数の人々の体験であり、そこに創造的独創的な事例が大量に存在している。にもかかわらず、

その蓄積を生み出す豊かさが、そして人々の示唆に富む体験が共有されているとはいいがたい。どちらかというと、個人的体験に閉じ込められ、広い場には出されていないのだ。

その結果、そうしたものが例外であり異常であり、核家族が標準であり正常であるという思い込みさえ広く作られてきた。

こうしたことは、家族形態にかぎらず、教育や福祉の多面で見られる。設定された標準に適合しているかどうかで「優劣判定」がされることが日常的にさえなっている。しかも、その標準は、人々自らが作り出したものではなく、「上」からおろされ、「外」からあてがわれたものである。沖縄では、そうした類が数百年にわたって蓄積され、体質化されてきた。

だから、人々が作り出してきた多様な模索創造を、人々が共有してきた豊かさとして捉えなおす作業が必要なようだ。　そのためには、そうした模索創造の具体例を明らかにしつつ賞賛し、人々の共有財産にしていく営みを作り出していく必要があろう。

２２．８月１８日　模索している当人が、実践記録を書いて自ら気づきつつ実践していくこと

前回の最後に、「人々が作り出してきた多様な模索創造を、人々が共有してきた豊かさとして捉えなおす作業が必要」と書いた。そのことを第三者が発見指摘し、模索創造している当人に気づいてもらい、自信をもって実践を展開してもらうことは重要なアプローチだろう。その第三者には、専門家、研究者、退職した経験者、ときにはジャーナリストが担うことが多いだろう。

だが、重要なことは、模索創造している当人自身が、自ら気づきつつ実践していくことが、中心的なアプローチだといえよう。

という事で、私は、学童クラブ支援員、保育所保育士、学校教員などを対象にして、自らの実践の記録を書くワークショップを、長年にわたって各地で行なってきた。実践記録を書くというと、かなり優れた実践者、ないしは高度な専門的実践者が行うものだというイメージを多くの人がもっている。そのため、自分がしている実践の業務がかなりの高水準に達した時に書くもので、実践経験が２０～３０年たったときにやっと一つ書ければよいといったイメージさえある。

そうではなくて、実践が上手くいかなくて困っている人が、自分の実践がどうなっているのか、どこを改善すればいいのか、あるいは、自分の実践にはないかもしれないが、仮に良いところがあるとしたらどんな点にあるのだろうか、ということに自ら気づいて、自分の実践を向上させていく手掛かりとして実践記録があるといってもよいだろう。

つまり、実践がうまくいってないと感じている人こそ書いたほうがいいのだ。無論、優れた実践記録から学ぶところがあっていいが、それだけでなく、うまくいってない実践を書いて、それを検討して、実践の改善をはかるのだ。そのためには、自分自身で検討するだけでなく、他の人も一緒になって、共同検討することで打開策を見いだすことが多い。

だから、実践検討は、実践向上のための大変有効な手段なのだ。

にもかかわらず、なぜこうした実践記録が稀だったのだろうか。その基本的原因は、「外から」「上から」与えられた基準に沿って、それをそのまま子どもたちにあてはめることが基本だという考え方が深く染みついていることにあろう。だから、大人から子どもへの一方向的流れとして、実践が展開してきたのである。かりにそういうことをもとにして、実践を検討すると、基準に沿っているかどうかが、判定基準になってしまう。

あるものを、基準に沿ってつくりあげるのなら、それでいいのだろう。型枠にあてはめる成型で作られて、「１００均」で売っているようなものだ。しかし、子どもは型枠にあてはめて成型するようなものだろうか。まずは、子ども自身が自分を成長させていくものであるから、それは無理難題だろうし、仮にできたとしても、成型後における自分自身による成長を望めるものではない。また、一人一人の子どもは、実に多様であり、一人一人に応じた働きかけが不可欠だから、型枠成型には、とんでもない無理がある。

２３．８月２３日　実践の自己展開サイクル　実践記録を書くワークショップ

前回述べたことを学校でいうと、「外から」「上から」指示されたものを正確に子ども達に与える営みとして、実践をイメージするものがある。とんでもない校則という型枠で子どもたちを成型するようなものだろう。授業でいうと、「外」「上」によって決められた知識などを、説明を中心にして渡し、子ども達に収納させるようなものになる。そこには、大人と子どもとの相互やりとり、共同創造、子ども自身が創造する活動が極小化される。さらに、子どもにかかわる大人の役割も、型枠に子どもをセットする、あるいは知識を運搬し子どもという棚に収納するような役割に閉じ込められる。

だから、そこでは子ども達の共同創造を促進するワークショップ・スタイルは敬遠されてしまう。それが学校でワークショップがそれほど広がらない理由の一つだろう。たまに見かけると、知識運搬収納整理に、子どもの自発性の装いを着せるものにとどめるものが、結構多いのだ。それは、子どもを信頼していない、さらに教師自身が「外・上から」信頼されていないことの表れともいえよう。

実践記録を書くという事は、個性的存在を前提にした子ども達自身の活動を促進するような、実践者の創造的な活動が基本であり、型枠成型・知識運搬収納とは対照的なものだ。

ところで、私は、１９８０年ごろより、教育実践の自己展開サイクルということを主張してきたが、それは教育に限定されない。子どもたちへの大人の働きかけ全般にわたって主張していることである。そのサイクルとは、次のようなものである。

子どもの事実　→　それについての分析　→　分析に基づく実践の方針作成　→　実践(子どもへの働きかけ)　→　それに対する子ども達の反応の事実　→　それについての分析・・・・

これらが、サイクルになって進む。そのサイクルには、長期にわたるものもあるが、多くは、１分間に２～３サイクルといったように短時間にすすむ。たとえば、

事実（子ども a が泣いた。近くに b がいる。）

分析（b と a との間に、何かがあったのだろう。それにしても、a はすぐに泣いてしまうなあ）

方針（まずは a を落ち着かせよう。そのために、a が好きな C 先生に、当面の対応をお願いしよう。その間に、b に事情を聞こう）

実践（C が a を連れていってくれる。b に、どんなことがあったのか聞く）

事実（b は、「私が人形と遊んでいると、a がとっていったので、ダメだよと言ったら、泣きだしたんだよ」と言う。）

分析　・・・・

といった流れだ。この間、１分ぐらいのことだ。こうしたサイクルが５～１０余り続くと、実践のおおよそがつかめてくる。

実践記録と言うのは、このサイクルの記述の積み重ねということになる。私がコーディネイトする実践記録を書くワークショップでは、ほぼ全参加者が、１時間ほどで１０～２０サイクルを書き上げていく。その過程は、参加者相互が補い合う過程でもある。同種の仕事をしているものとして、お互いに共通の実践経験を持つものだから、補いやすい。

こうして、実践記録ができあがると、意外にたやすく書けるものだと感じられるようになっていく。

２４．８月２８日　実践記録をもとに、「園だより」などで実践を公開し、保護者と共同実践する

前回書いたワークショップでは、１時間ほどでほぼ全参加者が実践記録を書きあげるが、その書いたものを参加者が共有しあい、コメントを述べ合う。

その過程で、日常の実践では無意識にやっていたことに気づく。とくに分析と指導方針の個所がそうである。普段は、それを考える暇なく、実践がすすんでいくが、改めて書いてみると、自分の実践の形を意識できていく。その中で、自分の実践特性、つまり得意点と今後の課題などが明らかになっていく。

そのことを、職場集団でやれば、個人だけでなく、職場としての実践力が飛躍的に向上していく。

しかしながら、こうした機会がこれまでほとんどなかった。実践記録執筆者が限りなくゼロに近いことがそのことを示している。こうした実践記録とその相互検討を、職場で、あるいは職場を超えてやっていけば、職場も個人も、「外」や「上」を過剰に頼りにして、「無責任」に実践を進めることが減っていき、自分たちの力で実践を向上させていくことができる。

それは、個人としてだけでなく職場として実践の自己展開サイクルを確立させることである。そしてそれを、「園だより」などの職場報告として公開すれば、職場だけでなく、保護者をはじめとする住民が広く知って、実践への信頼度が高まる。最近よく言われる説明責任をこうした形で果たすことが、もっとあってよいと思う。無論、実践記録公開の際には、個人情報を保護する適切な書き方が重要である。

どんな実践がおこなわれているかを、保護者・住民に知らせることは実践者の責務である。学校でいうと、運動会や学習発表会や授業参観がその機会になってきた。連絡帳なども、保護者と直接につながり、情報交換の上で重要な役割を果たしてきた。

と同時に、日常実践がどのように行われているかを「園だより」「〇〇の活動紹介」「▽▽で成長する子ども」「実践指針の具体例」などの文書を通して知らせることが重要だ。それは、保護者に伝えるだけでなく、住民にも、そして職員自身にも知らせていく必要がある。

残念ながら、そうした事例がこれまでほとんどなかった。施設や組織が「やむにやまれず」スタートして、そうしたものを作る状況がないテンヤワンヤである場合もあるが、それにしても、３～４年もたてば、実践を紹介する何らかの広報物が必要だし、それにもとづく意見交換があってよい。

そうしたものがなく、いわゆる行政文書に近いものを出すにとどめている所が結構ある。「いじめ」などの事件が出た時の報告も、そうした形にとどまっており、保護者の不信感を高めてしまう例が多い。

そうした事件に限らず日常的に、実践を実践者と保護者とが語り合うことはとても重要だ。そして、情報共有を通して、実践者と保護者とが共同実践者になっていくことが求められる。保護者に対して、実践者の言うとおりにやらせるような「上から目線」的なありようから卒業する必要がある。逆に、保護者ないしはその声を代弁する人から、施設の実践を告発するようなトーンでの発言が続き、両者の対立を増長する例も見られる。

そうではなく、実践者と保護者とがつながりあって語り合い、共同実践者となるありようへと進みたい。近年世界的に広がっている学校協議会などは、そうした場なのである。

２５．９月２日　子どものために働く人の確保と質向上

子どもの貧困率の高さに象徴されるような近年の格差・貧困のなかで、取組みが急激に拡大し、従来見られなかった新規の取組みが多くなってきている。子ども食堂、ファミリー・サポート、スクールソーシャルワーカーなどがその例だろう。

そのなかで、急拡大に伴う経験不足者増加が生み出す未熟な実践が多い状況が見られる。と同時に、貧困対処に子どもレベルで取り組む社会運動などでも、問題指摘告発型ないしは異議申し立て型にとどまりがちになることが多いが、実践の取組み開始へと踏む込み、さらにそれだけでなく、新たな取り組みの実践の質向上への視野を持つ必要がある。

そこで、そうした取り組みでの働き手の確保養成と力量向上が大きな課題となってくる。取組み開始時の応急的随時的対応から持続的制度的対応へと展開し、さらに質向上のための自己展開サイクル確立へと向かっていく必要がある。取組み当初はボランティア的なものであったりするかもしれないが、持続的なものにするためには、職員として働いてもらう必要がある。それも短期なものではなく長期なものにしていき、非正規雇用ではなくて正規雇用のものへと移行させていく見通しを作り出していく必要がある。そしてさらには、専門性のある働き手となり、取り組み領域での業務遂行にとどまらず、地域社会での関連分野とつながり合って、地域の不可欠な存在として活躍してもらう見通しを持ちたい。

その点では、近年の特徴として、多くの地域住民とくに女性が、子どもにかかわる分野で働いていることに注目したい。そうした人々の多くが自主的動きを基盤に、かかわりを深めてきた点が注目される。そしてそれらはボランティア的個人的なかかわりにとどまらず、地域の共同の仕事として発展していき、市町村行政施策とも多様なつながりを持って展開していることが注目される。いわば住民運動的性格を強めているのである。

別の視点からいうと、地域における雇用増、地域産業おこしに、子どもにかかわる分野での仕事が不可欠の位置を占めるようになったということである。地域の仕事おこし産業おこしのイメージが大転換され、子どもにか

かわる分野での仕事が大きな比重を占めるようになったことに注目したい。それは、高齢者にかかわる仕事の増大ともつながっている。したがって、地方自治体での地域おこしの担当部門も、大きな転換が必要だろう。

こうした取り組みは、初めのころは補助的補完的な位置づけのため、業務推進の予算と人材確保で苦労している。だから、恒常的な施設運営に必要な財政支援と人材育成が求められる。少なくとも有資格者ないしはそれに準ずる正規採用の職員が必要数だけ確保される必要がある。

２６．９月７日　職員の質向上と研修のありよう　現場の自律的実践

職員の資格の問題についていうと、従来からある学校教員や保育士などの他に、新たな資格が設けられてきている。典型例としての学童クラブの支援員がある。資格制度が設定され、資格取得のための研修制度がつくられ、予算措置も講じられている。そして、資格取得のための取組みには、個人としてだけでなく、組織としても求められてきている。

だが、それらの職種の待遇、特に給与面が、以前と比べれば、多少の改善が見られるものの、自分の子どもを養育教育できるに必要なほどの待遇とはいいがたい。たとえば、保育士資格所有者は多いが、かなりの人が保育園などに勤務していないことが、保育士大量不足を生み出している。経済的処遇が厳しいことが主要因となっているからである。

子どもをめぐる仕事に携わる職員の研修の機会は広がっている。それだけに研修講師の養成も大きな課題となっている。と同時に、研修のほとんどが、知識伝達型で行なわれていることの問題性を指摘する声は、意外に弱い。なかには、「上」「外」からの情報の紹介と受容にとどまる例も少なくない。別の言い方をすると、職員の力量向上によって実践の自律的創造力を生み出す研修ではなく、上から下への「行政」的指示の伝達徹底としての研修になりがちなのである。研修にかかわる予算にしても、伝達講習型のものしか、ほぼイメージされていない。

そのことを大きく変えて、職員の仕事が実践であるだけに、知識伝達にとどまらず、実践展開と結びついたものが求められる。とすれば、実習・演習型が中心を占め、ワークショップ型が重要なものとなろう。

ちなみに、教員養成、保育者養成は、戦後大学等の高等教育機関で行なわれるようになった。それは、戦前のような型枠成型スタイルをやめて、研究創造的な実践ができる専門家を養成する必要があるという考えに基づいているからである。

にもかかわらず、子どもにかかわる業務の多くが上から下への「行政」処理的なものにとどまり、下からの自律的な実践創造を展開する体制になっていないのである。実践創造を展開できる「研修」にするためには、「研修」というよりも「研究」的な性格が濃いものにしていく必要がある。「研修」というと、与えられたものを身に付けるという意味に近く、「研究」というと、新たに自ら創造する意味合いになるからだ。

下からの実践創造の経験は皆無ではない。戦後の一時期には広く存在した。沖縄では、破壊されつくした戦後状況における中央教育行政は、整備に手間取り、各地の学校及び教員たちの自主的な営みに依存するところが大きかった。同じころ、本土においても、学習指導要領は「試案」として位置付けられ、それを参考にしつつも、

学校や教員が自分たちで研究しつつ教育活動を展開していった。そこで、試行錯誤的ではあるが、多様な創造活動が展開された。また、戦後の集落立保育園では、保育者の自律的創造によって、実践することが通例であった。

だが、こうなったのは、現場での自律的な力量増大にもとづく積極的提起というよりも、中央政府における教育・福祉機能の弱体化による要因が大きかった。そのため、学校教育界では、沖縄教員の研修について、日本政府に依存する傾向が強大になっていくのである。

それにしても、沖縄の現場で独自に進めざるをえない事態が広く見られ、自律的創造の体験を多くの人がもったのである。その事態を大きく変えたのは、「日本復帰」のなかで、中央文教行政に従う教育活動が前提とされるようになって以降である。

２７．９月１２日　実践の自律的展開と行政

前回述べた沖縄における戦後２７年間と『日本復帰』後との違いをイメージ的にいうと、現場における自律的実践創造と中央教育行政に従うままの実践との比率が、戦後しばらくは８対２ぐらいであり、時間経過とともに徐々に変化し、今日では逆転し、２対８ほどになっているといえるかもしれない。

その背後には、子どもをめぐる実践における現場の働き手の自律的な動きと、政治・行政による施策との関係の問題が潜んでいる。首里王府時代のことは別にして、少なくとも明治政府統治下に入って以降、中央政府の施策展開にもとづいて、学校における教育実践が展開していった。現場実践の自律的展開はゼロに近いが、それでも実践検討活動は存在した。だが、そこでは、中央政府が指示した標準に沿っているかどうかが絶対的基準であった。そのなかにあっても、音楽などでは創造的展開がみられたのは、注目に値する。沖縄の文化を反映した音楽を教材にしたのがその例である。

世界的に見ると、戦後日本ならびに沖縄の教育施策に強い影響を与えたアメリカでは、それまでの日本の教育行政と比べると、地方自治的性格が強く、また一般行政から相対的に独立した教育行政が存在し、教育税を独自に徴収し、現場による自律的な展開を行政上も保障する仕組みがあった。日本のような強力な中央集権的で、行政政治主導型の教育体制は、どちらかというと、「遅れた」国々で採用されてきた。

戦後沖縄では、アメリカシステムの影響下で、「日本復帰」まで教育委員の公選制が継続されたが、「日本復帰」で行政系列での任命制へと変えられた。それでもなお、教育委員会の独立性はある程度維持されてきた。そしてまた、教育長や教育委員には、教員経験者が就任する例がみられ、教育委員会には現職教員が就任する部署が作られてきた。

しかし、全体としてみると、沖縄教育界には、文部科学省という絶大な権力をもつ中央教育行政に従う体質が、個々の学校レベルまで染み付き体質化してきた。それは「日本復帰」後激しくなっていく。世界的動向を視野に入れるという点では、沖縄教育界は、文部科学省より一層「遅れ」ているのだ。

その点で注目されるのは、保育園や学童クラブなどでは、文部行政とかかわらないこともあって、実践レベルでの中央行政の指示の影響力は弱く、現場の実情に応じて、自律的に実践を構築せざるをえない現実が長く存在したことである。

重要なことは、政治・行政が、教育・保育現場を指導指示する形ではなく、教育・保育現場の自律的展開と政治行政とが相互促進関係をつくりだし、現場実践を創造することを中心軸にすえることである。それはなによりも、子どもに向き合って展開することに、これらの活動の存在価値があり、子どもに直接向き合って仕事をしている職員の自律性が不可欠だからである。

２８．９月１７日　**実践の研究的展開と研究者**

前回まで述べた実践の自律的展開は、研究的展開ということでもある。自律的展開は、子どもの事実→分析→方針作成→実践→事実という実践の自己展開サイクルを確立することでもあり、そのためには、研究的姿勢をもって、実践を展開することが求められる。だが、繁忙の実践の中で、それを追求するためには、専門的な研究者の支えが有効である。その点では、行政は、外部から規定される標準にしたがって実践させることになりがちで、研究的展開のうえでは妨げになりやすい。無論、行政職員であっても研究的展開が必要なのだが、３～４年単位の配置換え体制がある行政では難しいことである。

専門的研究者の典型的存在は、大学教員である。あるいは、現場から離れて研究的活動をしやすい環境にあるOB などがその役割を果たすこともあろう。

行政職員にも、そうした役割が期待されるが、行政原理が実践原理に優先する仕事であるし、長期にわたる育成期間が必要なので、現実には難しい。また、行政にかかわる外部コンサルタントに依存することも一策だろうが、そうした力をもつものがどれだけあるのだろうか。行政がかれらに依頼するもの自体が、実践にかかわる専門職的なものでないので、そこまで期待するのは無理な現実だろう。

では、大学教員における、実践にかかわる研究の力量はどうであろうか。残念ながら、実践にかかわる研究力量養成の機会は、とても少ない。そうしたこともあって、教職大学院の教員は、小中高校での現職教員から採用される例が多いのだろう。

行政職員が書く文が行政文書らしくなるのと同様に、研究者が書く文が研究論文らしくなってしまう。通常の研究論文と実践にかかわる文章とは大きく異なる。３７年も前になるが、大学教員の授業実践記録集の出版にかかわったが、たいていのものが研究論文になってしまって、実践記録ないしは実践記録にかかわる論文になっていないのだ。実践記録にしていく過程で、何度もアドバイス・添削をさせていただいた。

似たことだが、日本教育方法学会などの学会で、実践にかかわる論文の査読をしたことが何度もあるが、その際、研究論文でもなく実践記録でもなく、実践にかかわる研究論文を書くことはどういうことなのか、についていろいろと考えさせられ、提案したことを思い起こす。

ということで、専門的研究者としての大学教員にあっても、現場実践を指導できる力量をいかに獲得することが、かなり大きな課題なのである。実際に、沖縄の大学教員で、そうした用意のある人は、どのくらいいるのだろうか。２桁もいるだろうか。

２９．９月２２日　**実践にかかわる研究会と研究紙誌**

前回述べた実践の研究的展開は、実践水準の確保、質向上の課題ともいえるが、そのためには、実践者が、自らを専門家として確立し成長させていく必要がある。それは、実践の自己展開サイクルを確立し、その実践を改善するための指摘検討ができる力量をもつということである。

それができなければ、外部が定めた基準にしたがって実践を展開する、つまり権威主義的なものから抜けきらない。あるいは、子どもをただ世話しているに過ぎないことになろう。子どもにかかわる働き手がそうした段階から抜けきって、研究する個人として確立成長する事が求められる。

こうした成長を、一人きりで達成することは困難なことだ。そこで、個人としてだけでなく、集団としてこうした力量を獲得していくことが大変重要になる。

そのためには、実践にかかわる研究会をつくり、そこに定期的に参加し、多様な方々の実践を交流検討し合うなかで、自己の実践の現状と課題を発見・創造し、前進の方向性・技を獲得していくことが不可欠である。研究会と言うと、硬いイメージを感じるなら、サークルといっても構わない。

その研究会・サークルは、実践者がアクセスしやすいように、同じ職場で、あるいは近隣の同業者とともに作るのが現実的だ。無論、遠隔地でも、時には県外にまで出かけて参加することは有意義だろう。そうした場で、年に一回は、自分の実践記録を発表し検討してもらうことが重要になろう。

私が、ここ数年学童クラブ支援員対象に行っている実践記録執筆検討のワークショップ研修は、こうした研究会・サークルを作っていくきっかけになればと願って、行っている。そのなかで、外側から与えられる情報の伝達講習型の研修を主とするものから卒業し、参加者自らが作り出すような研究会・サークルが増えることが期待される。

行政の役割は、そうした研究会を促進することである。そのために、研究会補助金支出、勤務時間内の参加を保障するための補助者の確保予算設定、さらには、実践研究の印刷物作成配布費用への補助などが必要だろう。

印刷物のことだが、旺盛な実践が展開されていけば、印刷物がかなり頻繁に発行されることになる。残念ながら、そうしたものに滅多にお目にかからない。そのなかにあって、学童保育連絡協議会の支援員部会が出している実践記録集は貴重なものである。

大学教員などの研究者たちが研究を推進するための学会のような組織も重要である。残念なことに沖縄教育学会は、２０００年代に解散してしまったが、教育に限定しないで、沖縄子ども学会のようなものが活動することを期待したい。　その点では、沖縄保育問題研究会や沖縄学童保育連絡協議会が大変重要な役割を果たしていることに注目しておきたい。

こうした動きは地味で、人々の目に触れやすくない。対照的に、ジャーナリズムをにぎわせて、人々の耳目を集めるのは、問題発見・告発を含んだ社会運動的動向だろう。それらの問題提起を、行政による施策実施につなげるだけでなく、実践的取り組みにまでつなげ、実践の質向上の取組みと結び合いたい。

３０．９月２７日　沖縄全体の実践にかかわる司令塔的機能への期待

前回述べた研究的機能を軸に据えた、実践にかかわるリーダーシップ（司令塔的機能）についても考えたい。残念ながら、それを行政機構が代替しているのが現実である。教育行政の場合は、文部科学省に結び付いた中央集権的体制が、それを担っているが、それは沖縄全体の実践を統括する点では、「中央動向に対しての遅れ進み具合」という判断基準が強く、沖縄独自の検討が希薄だ。福祉にかかわるものでは、行政的には、県庁担当部局などがその役割を代替することがあっても、あくまでも行政レベルでの施策進展度合いに焦点があてられて、実践の質までは関心が向いていかない。

この問題を考える際に注目されるのは、米軍統治下時代に、沖縄教職員会が果たした役割の大きさである。とくに屋良朝苗および関係者が１９５０～７０年代初めに果たしたリーダー的役割である。屋良だけでなく、戦前の教育実践リーダーの一人だった中山興真などもリーダー的役割を果たした。彼らが提起して開催し長く継続したものに、教育研究集会があった。１９７０年代までは、その地区集会は、学校を休校にしてほぼ全教職員が参加し、教育実践について語り合った。また、大学教員が助言者として大量参加したことも注目される。

作られたばかりの教育研究集会では、調査発表的性格が濃く、実践論としてどうするかという点では未熟であった。その点では、１９６０年代半ばから結成され始めた、ボトムアップの自主的な研究会の役割が徐々に大きくなっていく。民間教育研究団体と呼ばれるものだった。トップダウン的に文部省施策として降りてくる実践への指示をいかにうまくとりこんでいくか、というのではなく、自分たちの実践を基盤に、実践向上をつくりだしていったのだ。その民間教育研究運動では、沖縄の自律的実践展開への模索が１９７０～８０年代と広がっていくが、沖縄全体から見れば部分的な動きにとどまっていた。

沖縄教職員会は、戦後の一時期、教育だけでなく『復帰運動』をはじめ社会のありようについて、沖縄全体のリーダーシップを一時的に取ることがあった。その背景には、１８９０年以降継続してきた中央政府――教育委員会――学校というルートでの圧倒的支配の歴史が、米軍支配のもとで、一時的に「空白」状態に陥ったことがある。その中で、沖縄独自の取り組みを展開しなくてはならなかった時に、沖縄教職員会は、リーダーシップ的役割を積極的に担ったのである。

だが、１９７２年の「復帰」以降、中央政府から発する圧倒的支配が復活し、独自性を多少とももっていた沖縄も「他府県並みに」になり、「他府県に追い付こう」と言う動きが主導するようになった。そして、中央政府とつなぐ形で、教育行政組織が「強まっていく」。そしてそこに、教職員組織だけでなく、沖縄保守政界・財界が部分的にリーダーシップに加わろうとするが、それらは、教育実践創造にかかわるというよりも、政治的色彩を帯びたものであった。

そうした中で、先に述べた教育研究集会も徐々に縮小傾向を強めていく。

こうして、トップダウン的な行政上の「リーダーシップ」の独占状態が広がる。他方で、子どもをめぐる困難状態が広く深く潜行し、それに「やむにやまれず」対応する自発的な動きが福祉分野を中心に広がっていく。だが、それがボトムアップになかなかなりにくい状態が見られた。

３１．１０月２日　歴史的財産の文献

前回述べた歴史経過のなかで、子どもをめぐる格差・貧困問題が社会問題化し、その実態を明らかにし、社会的に取り組む動きが広がる。「沖縄子ども白書」などは、その象徴的存在であろう。

現在は、それらを生かして、課題を構造化し、次への展望を提起する時にきている。そこに現時点での「司令塔」的機能が求められる。その役割を担いうる人々、自分の持ち場で活躍するにとどまらず、沖縄全体の「司令塔」的になりそうな実践者・研究者・社会運動者・施策立案遂行者などの知恵を集めていくことが期待される。

ここまで、沖縄の「子ども地図」として、子どもをめぐる福祉・教育などの動向を行政動向をも視野に入れて論じてきた。この小論が、論議の広がり深まりのきっかけとなることを期待している。

補論　最近５０年で、「司令塔」的に考えようとした足跡・宝を並べておこう。その評価分析は、他の方に任せたいが。

１．１９７３年創刊「民主的な子どもをそだてるために」（沖縄生活指導研究会編刊）　７０年代末から「おきなわの教育実践」に改称　　当初、富田哲と浅野誠が中心になって編集　後、多様な方々が集まって編集

その一例　『民教夏季合同研究会基調提案　どこから、どのように始めたらよいか』基調提案委員会執筆１９７８年

２．浅野誠『沖縄教育の反省と提案』明治図書１９８３年

３．『おきなわの教育実践』編集委員会編刊『沖縄にねざすたのしい教育実践』１９８８年

４．『おきなわの子どもと教育』沖縄民間教育研究所１９９０年６月創刊号　富田哲所長が中心になって編集発行　２０１３年『共育者』と改称

５．小林文人・島袋正敏編『おきなわの社会教育―自治・文化・地域おこし―』エイデル研究所２００２年

６．「沖縄子ども白書」編集委員会『沖縄子ども白書』ボーダーインク刊２０１０年

７．野本三吉『沖縄・戦後子ども生活史』現代書房２０１０年

８．浅野誠『沖縄おこし　人生おこしの教育へ』アクアコーラル企画２０１１年

９．嘉納英明『沖縄の子どもと地域の教育力』エイデル研究所２０１５年

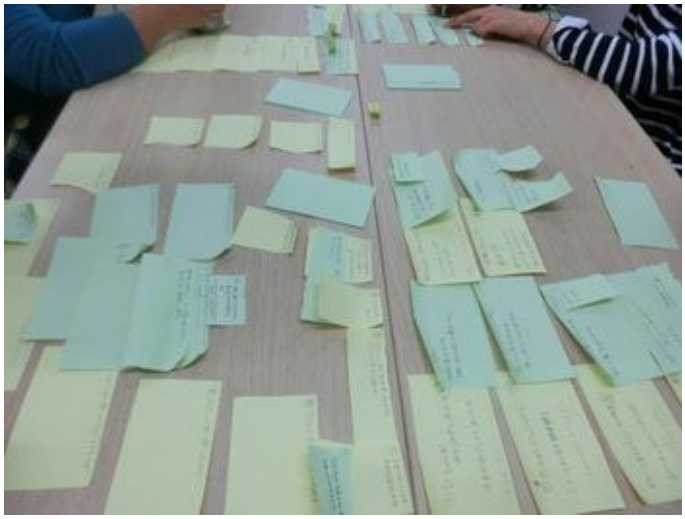
こうしたものを踏まえて、今後どのようなものが生み出されていくかが注目される。

学童保育

保育士研修「実践記録の執筆と検討」　学童クラブ学習会　　２０２０年1月１５日

１２日、３時間にわたって、沖縄全域にできた新しい保育園の５０名近くの保育士対象研修の講師を務めた。保育計画・実践記録・記録の検討といった内容で、これまで学童クラブ支援員対象にしてきた実践記録執筆とその検討に保育計画作成を絡めて、一挙に３時間で行なった。

実践記録は、全員が執筆でき、実践検討も中身が濃いものになり、今回もまた充実したものになったが、保育士と支援員の個性の違いが浮かび上がってきた点で興味深かった。」



毎回、楽しく、そして真剣に記録執筆をしてくださるが、参加者全員が書きあげることができる進め方が定着してきてよかった。以前なら、3時間も続けると、私の頭にパニックに陥るが、それもなくなってよかった

保育士・支援員いずれも真剣に集中して執筆していただける。相当に高度な課題だが、日常実践を書くので、可能になる作業だろう。支援員の際は、「明るく楽しく、おしゃべりをしながら」であるが、保育士の場合は、「真剣に集中的に」という違いがある。また、支援員の場合は、マクロに書いていくが、保育士の場合はミクロに書いていくという傾向の違いがあっておもしろい。日頃の実践特性が反映しているのだろうか。

１４日　定例の学童クラブ学習会　一年間のまとめの冊子つくりの話に盛り上がる。出てきたアイデアを盛り込むと、とんでもなく素晴らしいものができてしまうので、アイデアの四分の一の程度のものが出来れば「おんのじ」だ。

雑談の話。学童や児童館、そして保育園が、このあたりで広がってから３０～４０年になる。それ以前は「シマの子ども」たちの居場所があちこちにあり、地域の大人たちも日常生活を子どもたちとともに送っていた。

それが変化し、学校のなかに、そして保育園のなかに、子ども達が存在するようになり、「シマの子ども」ではなくなってきた。そのなかにあって、学童クラブや児童館は、地域と子どもたちとをつなぐ重要な役割を果たすことが増えてきた。

これらのものが、地域から子どもたちを離陸させる役割をはたすのか、それとも地域に着陸させる役割を果たすのか、そんなことが話題になる時代になってきた。

子どもをつなぎ、地域をつなぐ、すごい取り組みがあちこちに　１２月「保健室」

2019 年 12 月 06 日

今回は、多彩な話題でユンタク。今回の参加者は、いつもの南城市・与那原町に加えて、那覇からも。話がいろいろと飛んでいくのが、ここの特徴。

南風原町の「カナカナ」の取り組みが話題になる。同じように、ワンパク学童も、そして参加者の「マール」学童、みなみ学童も。いろんなところで、いろんな取り組みが噴出しているなあ、と実感する。そんなつながりが、あちこちに「飛び火」しだしている。その足掛かりに、子ども食堂など子どもの居場所、そして学童クラブがなっている。

そうしたネットワークが、貧困をはじめとする困難を抱え孤立気味の子どもたちのつながり作りにもなっていく。南城市「こどものまち」宣言の取組みも、そうしたネットワークづくりであろう。南部市町村の取組みとのつながりもできそうだ。

さて、「保健室」の会も満一年となった。この間にしたことを収録した冊子をつくろうと張り切っている。

学童クラブ支援員連続学習会終了　参加者のほぼ全員が実践記録を執筆し、相互検討が充実

12 月 02 日

11 月２８日の研修が終わって、１０月から通算６回の学童研修（学童連協支援員部会学習会を含めると７回）が無事終了。

これで、3 年間で、沖縄全域での研修をほぼ終えたことになる。残るは八重山のみとなった。各地でやったが、地域色がものすごくにじみ出る。簡単に言うと、都市地域と非都市地域の違いだ。参加者の服装の色にはじまって、参加者の雰囲気、プレゼンのやり方の理論的説明中心と演技中心との違いである。皆さん意識していないことだけど、私から見ると、とても違う。都市地域は、黒っぽい服装が多く、地味な雰囲気（時にはシーンとし過ぎてしまう）、プレゼンは説明中心。非都市地域は、明るい服装、おしゃべりいっぱいの楽しい雰囲気、プレゼンは演技中心、というのだ。不思議な現象だが、学童クラブや子ども達の違いも映し出しているように思う。

ある参加者に、「〇〇地域で学童支援員をなされてきたのですか」と言われた。事例の話をしたからだろうが、支援員にそう思われたことは、私にとってとても嬉しいことだ。「支援員経験はありません」と応えると、とてもビックリされていた。

今回の一連の研修では、参加者のほぼ全員が、４０分で自分の実践記録をポストイット約３０枚（１０００字弱）に書き上げた。ほぼ全員が初体験で書き上げたということは、日ごろの実践の充実した基盤の上でできることだ。そして、書き上げた実践記録をいくつか選んで検討し合い、グループで意見を説明または演技で表現した。

その中身の深さは、「すごい」の一語に尽きる。

ここで、実践記録を書くことの良さと、実践記録の生かし方について、書いておこう。
1）自分の実践を意識化し、実践向上につながる
2）次の実践を構想できる
3）実践を仲間と共有し、共同実践を発展させる

ところで、学校教員対象にして、同じような実践記録を書き検討をするワークショップをかなり長期にやってきたが、学童支援員と比べると、相当に難渋してきた。その理由を考えて見よう。言い換えると、なぜ学校教員は実践記録を書きづらいのか

権威主義ないしは「すべき」ものが強く存在する。学習指導要領にはじまって、日本の学校の中央集権、上意下達体質が、教員を強く縛っている。

教員自身の生育体質、つまり、「模範生」コースを歩んできて教員になってきた人が多い。その結果「～すべきだ」という基準があって、それに自分自身を、そして自分の実践を合わせる、近づけることに必死になる。教育実践の自己展開サイクル、自己遡及型展開とは正反対の権威従属型になってしまいやすい。

「まぁる」訪問　１１月の「保健室」　　11 月 08 日

１１月６日、定例の「保健室」は、スケジュールがかち合ってお休みの人が多かったので、急遽予定変更。
・我が家の庭めぐり　偶然だが、オオゴマダラ３羽が乱舞。卵を産み付けるシーンに出会う。幼虫も見つける。他にも４種のちょうちょ
・メンバーが務める与那原の「一般社団法人きっずまぁる」が、運営する「まぁる学童クラブ～風」「まぁる学童クラブ～森」「おれんじはうす」（小規模保育所）を訪問。

楽しい見学の時間だった。クラブ風では、子どもを夢中にさせている駄菓子屋さんごっこを体験。小規模保育所を私は初訪問。とっても上等。希望者殺到で、入所が大変とのこと。

学童を訪問しあうのは、大変有意義だ。その後、まつぼっくりというユニークな場所での昼食会もあり、楽しい時間を過ごした。

写真は「まぁる」　風　→駄菓子屋さんごっこ　→森　→おれんじはうす

実践記録を書く学童支援員研修ワークショップがスタート　　10 月 12 日

ここ数年続く学童支援員研修の今年がスタート。４日、北部の中堅支援員５０数名の実践記録を書く研修。各地でしているが、同じ沖縄内にあっても地域性があふれ出るのが面白い。北部は、「明るく元気よく」そのものだ。動きがとってもいい。でも「やる時はやる」で集中がすごい。実践記録を書く時、全体がシーンとなる。そして、お互いに補足コメントを書くことも、史上最大量。

かくて、５０数名の立派な記録が完成。この中から、４つ選んで、２回目の１８日に実践検討の研修会。その４つは、次の通り

・迎えにいっても、集合時間にいない。おたまじゃくしを探しにいっていた。
・一人でいるとき、体調が悪いという。でも、ある子どもといるときは、調子がいい
・ドッジボールで、線を超えたかどうかで、ケンカ
・ままごとをはじめようすると、その場にねころんで、やらせない。

こんな事例に出会った時、どうしますか。そのことを参加者全員が考えます。楽しい会になりそうです。

学童学習会　「保健室」という名前になる　　10 月 02 日

今回は「困りごと相談会」というテーマ。二つでてきた。

1）おやつを食べられないことへの対処　苦手のおやつ・食事が出た時どうするか。いろんな作戦が登場。印象的なのは、自分たちで栽培したものは食べる。ということで、学童クラブ農園の話で盛り上がる。他には、自分で盛り付ける作戦。食べられる量だけ盛り付ける。子どもたちが自分で調理したものは食べるを活用する作戦も。

2）人に近づきすぎる子ども　子ども同士でも支援員に対しても、距離をおかずに、すごく接近する子ども。もしかすると、甘えたいのかもしれない。スキンシップを求めるのかもしれない。受け止めて、安心を感じさせながら、徐々に、人との距離の取り方を学ばせていく。

他に人生話も登場。自分の人生の中で、学童の仕事に携わって感じたこと。この後の「人生の夢」計画など、あっちこっちしながら、楽しい語らい。なかには、驚くような発見も。

この学習会を今後どうするか、の話し合い。そのなかで、「保健室」がいい。現状がそうなっているから、それを続けたい。特に何か難しいことがあるわけでなく、なんとなく、この場に来ると、ゆったりした気持ちになれる。そして、仕事へのやる気が湧いてくる。困ったことがあった時は、話して相談に乗ってもらえる。

そんな「保健室」のような集いを続けたい。

これまで一年間、実践記録執筆や検討などをやってきた成果を冊子にしていく話も進んだ。

今後の「保健室」も楽しみになってきた。

学童クラブの自慢　やりたくなるアイデア　３日の学童学習会　　09 月 07 日

３日に定例の学童学習会があった。今回は、各学童クラブの自慢する取り組みの紹介。紹介しあって、互いに、「使えるアイデアを盗み合おう」ということだ。出てきた自慢アイデアのいくつかを並べてみよう。

・「仕事求人票」を何枚も貼り付ける。

学童クラブには、いろんな仕事がある。本棚の整理、掃除、おもちゃのかたづけなどなど。

そんな仕事を「求人票」に書いて、掲示板に貼る。「報酬」は、学童クラブ内で使える「地域通貨」だ。「求職」希望者が、沢山出てきて、仕事がどんどんはかどる、ということだ。

・学童でできる遊び一覧表を、貼りだす。６０個も集まったそうだ。子どもたちが「何をして遊ぼうかな」と困った時に、それを見て、したい遊びを見つけるというわけだ。

遊びを作って、一覧表に書き加えることもある。

・５，６年生キャンプの運営・進行・仕事をすべて、子ども達にさせる。６年生が中心だが、５年生を「弟子」にして、次年度への準備にもなる。

・異学年でグループを作り、活動させる。昨年は同性で編成したが、今年は男女混合で編成。

・地域のアパートで学童クラブをしているので、地域住民とのつながりを増やし、住民が学童活動に参加することも多い。近くの公園では、学童外の子どもも一緒に遊ぶ。

話は、どんどん弾んでいく。

次回は、１０月１日（火曜日）１０時～

Ｑ＆Ａ　聞きたいことに、他の参加者がこたえる。
１年近くなるので、実践記録集のような冊子をつくる相談

「日課」の交流　沢山の新発見　学童クラブ支援員学習会　　07 月 04 日

３日の学習会。早いもので、もう９回目。２０歳代を中心に若い人たちが集まり続ける。みんな明るい顔。学童の仕事が楽しく明るいからだろう。
今回は、各学童クラブの日課の交流。まず、各学童の日課（平日、土曜日・長期休暇期間の各々）を大判の紙に書き込む。
開所から閉所までの９～１１時間のなか、受け入れ、出欠点検、遊び、おやつ・食事、清掃、スローダウン、学習、退所をどのように、区切っているか。
多様な遊びの交流　かかしケンケンパー、「テニス」、・・・・
食事　ケイタリングサービスの活用、弁当、食事作り
清掃　分担の仕方（希望、グループ単位）
学習（学校の宿題）時間の設定
グループの作り方
実に多様だ。

興味深かったのは、
夏休みに、講師を招いての食事つくり。
遊びの変化発展
仕事の分担　などなど

学童ごとの差異はとても大きい。だから、交流するなかで、興味津々なものが続出で、質問がどんどん出てくる。

次回は、各学童で、「これは」と思う、アイデア・自慢など出し合うことになった。
８月はお休みで、９月３日（火）１０～１２時
今回は４学童だったが、もう少し参加学童クラブ数が増えればいいと思う。

とっても楽しい美つくりに挑戦　学童学習会　　06 月 13 日

１１日の定例の学童支援員学習会は、いつもと大変わり。前回から参加してくださった美術教室主宰の宮里さんが、「学童で使える美つくり」というメンバーの注文に応えてくださったのだ。

まず、２メートルを越す長い障子紙を、空中にセットする。そこに、絵具を溶かした水をスポイトに含ませ

て、好きなように垂らす。いろいろな色水を１０人近くの参加者が垂らす。楽しさと驚きとの連続だ。写真のようなものが出来上がる。それをドライヤーで乾かす。

次に、それを菱形の型紙に合わせて切る。それを折ると、封筒になる。豊かな色封筒だ。

もう一つは、透明プラスティック板に、スポイトで水玉をたくさん作って載せる。一つひとつの水玉に、筆で溶かした多様な色の固形絵具をつける。水玉がパーッと色に変わる。

楽しみながら、美しいものが出来上がっていく。

学童クラブで使えそう。安価。すぐに楽しめる。美しい。個性的なものができる。ということで、参加者たちは早速、材料購入の相談を始める。近辺の学童クラブで広まりそうだ。

宮里さん、ありがとう。

私のワークショッププログラムでの美術系は、「リレーお絵かき」しかない。刺激されて、新しいもの作りに挑戦しよう。

次回は、７月３日（水曜日）１０～１２時。我が家にて。
学童クラブの「日課」がテーマ　どんな活動を組み合わせて日課を作っているか、各学童から出し合うアイデア交流会だ。

子どもの人間関係・遊び文化の成長をすすめる　　5月１７日

１４日は、定例の学習会。お休みの常連のお二人に代わって、新人のお二人が参加。スタートして半年になり、「うわさ」を聞いて、参加問い合わせも増えている。１０人前後のゆったりと楽しいながらも、深い中身に魅力を感じておられるのだろうか。増えてきたら、細胞分裂しなくてはならないかもしれない。南城市の学童希望者が増えて、第一〇〇、第二〇〇、第三〇〇と学童クラブが細胞分裂しているように。
今回は、熱心なメンバーが、別の場所で持たれる学習会のための予行演習も兼ねた、実践記録の検討。もうお一人のメンバーが書いた記録だ。
この近辺のクラブでは、１，２年生の人数が増えてきて、３年生以上の子どもに戸惑いがあるようだ。今回の例では、３年生の女の子が２人で、一人が休むと、残された一人は遊び相手と遊びを新規開拓することになるが、それを支援する話だ。
２年生までだと、その場にいる子どもたちと、日替わりで遊びを変えて楽しむことが多い。少しずつグループめいたことと、遊びの固定化をしはじめるが、まだ過渡期だ。３年ともなると、固定化が進み、自分なりの好みとテーマを意識して深め始める。といっても４年生以上といっしょに遊ぶというと、ハードルがある。４年生以上がグループを固定化して、低学年を受け入れないこともある。
そんな状況にある子どもへのサポートだ。支援員のやさしくゆったりとしながら、子どもの新しいチャレンジを支えるかかわり方は、好感のもてるものだ。

それにしても、このあたりの学童クラブにいる子ども達の健康さ・豊かさには感心する。そうした子ども達に向けて、特定のことに限定しない多様な人間関係と文化に分け入って、それらを発展させていくような働きかけが進んでいるが、それをさらに進めるのはどうしたらよいだろうか。そんなことがテーマになる世界だ。
個人でやるゲームの世界とか、大人にしごかれる活動などからは縁遠い感じだ。加えて、仕事とか役割遂行をどうするかといったテーマも大切になる時期だ。子ども達と同時に、それを支援する大人の活動に期待したいものだ。
次回は、６月１１日。今回新しく参加された方が、子どもの美術活動の専門家なので、学童でできる美術活動を焦点に話が進むことになるだろう。

遊びの宝庫　学童クラブ

04 月 19 日

１６日は、定例の学童支援員学習会だった。今回は、実践記録検討ではなく、各学童クラブで子どもたちがどんな遊びをしているかの交流が軸になった。単なる話ではなく、実物・実技もあるので、大変すばらしい会になった。

本当に多種類の遊びが飛び出しただけでなく、既存の遊びをアレンジしながら、子どもたちと支援員が新たな遊びを創作することもたくさん紹介された。お互いにいろいろ飛び出してきた遊びを、自分のクラブでもやろうということで、パクリ大会にもなった。

レゴ　ブロック　（巨大な）ゴム鉄砲　メンコ　塗り絵　ぬいぐるみ当てっこ　トランプ　コマ　ベーゴマ　野球　ブランコ　学校ごっこ　お家ごっこ　木を使って秘密基地つくり　将棋　ドンジャンケンポン　大型積み木　わりばし工作　お絵かき　リップスティック　たきび　・・・

４月で新年度を迎えたばかりだが、子どもたちは学年ごと、ときには学年枠を超えて、いろいろな遊びをスタートさせ、そろそろ、応用発展段階になってきている。

私の注目点

・既存の枠組み・ルールに沿って競争し勝負のつく遊びよりも、物語を生み出していく創造的な遊びがはるかに多い点が注目される。競争し勝負を争うような遊びでも、自分たちで新たに創造する方向で工夫がなされていく。

写真にあるように、板と木片で迷路を作り、回したコマが、ゴールに至るようにする。難度が極めて高い遊びだ。迷路は子どもが設計し、支援員と子どもたちとで工夫しながら制作したという。この合作も注目される。

・小さな遊びが、時に、たくさんの遊び仲間を生み出しながら、物語を作り出し、クラブ行事に取り入れられたりする。時には、「劇団」が作られる。

・遊びが、子どもたち相互の人間関係を編み出していく。それには、学年を超えたものも多い。その中で上級生が、リーダー役割をとったりもする。

・こうした豊かな遊びが学童クラブの人気を高め、クラブをめぐる子ども文化がつくられ、クラブの発展へとつながる。近年、学童期におけるこうした文化が弱まっているといわれるが、学童周辺では、そんな声はない。学童クラブが各地で人気を博して、この時期の子どもたちをリードしている様相が見える。いずれ、周囲を巻き込み、地域の子ども文化・子ども集団の渦の中心になりそうな気配だ。

「楽しく夢中に」の学童学習会　遊びも人間関係も豊かになる　　03 月 8 日

５日午前は、定例になった我が家での学童クラブ支援員の学習会。参加者が毎回少しずつ増え、今回は１０名。
毎回、自主的に出される実践レポートを素材にして討論。
今回は、友達が少なくて、一人遊びが多い一年生に、支援員がかかわって、徐々に関係がふくらんでいく話。人間関係のふくらみは、遊びのふくらみと並行する。学童クラブでは、けん玉・ベーゴマの類、ドッチボール、サッカーの類、工作の類、お店屋さんごっこの類といった多様な遊びが同時に並行してすすんでいく。そのなかでも、ブームがある。ベーゴマなどは、ブームのようにあらわれ消えていく。
あるクラブでは、子どもたちが劇団をつくってしまったという。
ということで、いろいろな遊びについての交流で盛り上がった。ということで、次回は「遊び」に焦点化して話すことになる。
次回は、年度初めでもあるし、学校の始業式の都合もあるので、４月１６日（火曜日）１０時からとなる。

世話役的に活躍してくださった方が、４月から中学生などを対象にした新しい職場で活躍するとのこと。そのこともあって、今回の最後は、メンバーのお一人のピアノ演奏。
いろいろと飛び出してきて「楽しく夢中に」なる会だ。

共同創造と人間関係の驚くほどの成長に低学年イメージがすっかり変わる　　02 月 05 日

４日は、第三回目の学童支援員学習会。参加者のお一人の実践記録の検討からはじまって、いろいろなことに話が広がる。２時間なのに、中味がすごい。
１年生中心の今回の実践記録は、豊かな文化の共同表現を盛り立てる記録だ。数人の子どもたちが共同でつくるダンス。タレントによるダンスを自分たちでアレンジして踊りまくる。その動画を見せてもらったが、すごい。２０年ぐらい前までには考えられなかった表現力だ。

その表現を軸にした遊びの過程で、いろいろとすれ違い・トラブルが起きてくる。それを子どもたち自身で解決するように支援員が働きかける。昨年４月に開所したばかりで、子どもも支援員も一年目。最初のころは、トラブルがあると、いじけていて、困ったことや自分の考えを言えなかった子どもたちが、徐々に、トラブったら仲介して聞き取るようになる。謝ったり仲直りしたりすることも、自分たちでできるようになる。そのなかで、いじけていた子どもが共同表現のリーダー役を取ったりすることさえ出てくる。

１０ヶ月間の学童クラブ生活での子ども達の成長ぶりがわかるレポート。その１月末段階の話だが、年度末に向けて、さらに次年度に向けての成長を予測させる支援員の活躍ぶりだ。

子どもたちが内向けではなく、外向けで明るく行動力溢れる点で、私の小学校一年生イメージを大きく変えてしまった。子どもたちは、多様な文化と人間関係の面でぐんぐんと成長していく。そのうねりを支援員が豊かに膨らませていく。

２時間の討論は、ロールプレイや参加者自身の体験話も入れ込みつつ、活発にすすんだ。こんな話を、学童クラブ案内チラシにおりこんだら、保護者が読んで入会希望者であふれてしまうかもしれない。

次回の学習会は、再び第一火曜日に戻って、３月５日だ。どんな話になっていくか楽しみだ。若い方々との話は、とっても生き生きしていて、老人の私には元気薬だ。

ところで、今日は旧正月。旧正月をやるところはもう珍しくなってしまったが、周辺は中国などからの春節観光客でいっぱいのようだ。

子どもの話、クラブ運営の話　　01 月 11 日

８日午前、第二回目の学童支援員学習会を我が家で開いた。前回より２名増える。こんな学習会への期待が高いようだ。

今回もまた、参加者のお一人が出された実践記録をもとに語り合った。成人になったばかりで、支援員歴も半年ほどの方が、２年生の子どもとの生き生きしたやりとり、そのなかでのその子の成長ぶりを描いた記録。

長い間、学校教師が実践記録を書くのをお手伝いしてきたが、難渋の歴史だった。対照的といってよいほど学童支援員は、生き生きした記録を焦点化して、かつ速度をもってお書きになる。昨年夏～秋の各地の研修の際にも実感したことだ。

その記録にたいして、参加者全員が丁寧なコメントをお話になったのもすごい。多様な経験・世代・性別の方の集まりだから、聞いていて楽しい。話を聞いていて、私の体調不良がふっとんでしまった。

私が一つだけ出したコメントは、子どもと一対一関係だけでなく、まわりのつながりを持つ子どもたちとの関係を描くとさらに一層深まるだろうということだ。小学生２～４年生というのは、友達関係をいかに豊かに築くかに関心が集まる時期だからなおさらだ。

一つひとつに独自の多様な物語がある学童クラブ。だから、お迎え（受け入れ）から始まって終わりまでの時間の運び方がクラブごとに異なる。ほとんどが共通している学校とは大違いなのだ。長年支援員をしている方でも、近くのクラブが異なる運び方をしているのを知り驚くことがあるようだ。

クラブの内部組織の持ち方も大いに違う。同一クラブにいくつかの小クラブがある時、その編成をどうするかも重要だ。

同じクラブの支援員も多様な人の集まりなので、豊かであるとともに、調整にとまどうこともある。

学習会後半は、そんなことをめぐって話が弾み、時間切れになってしまった。

クラブの歴史によりながらも、当の子どもたち、保護者たち、支援員たちの希望と相談をもとに共同に決めていくことになるが、そのありようも創造的であり、変化発展していくものだ。

一例をあげよう。学童希望者の激増の中で、とくに１年生２年生が激増し、クラブをどう編成するかということに難題が生まれている。そのため生じることがある同一学年ばかりで編成するとか、新人ばかりで編成するといったことは避けたい。いくつかの学年をまたがり、クラブ経験者が一定比率を占めるような編成に心がけたい。とくに友達作りが本格化する低学年の場合、その点への留意が欠かせない。

そんなことについても、今後深めていくために、私が講師を務める研修でも扱いたいな、と思うようになる。

学童クラブが豊かに発展していくと並行して、私自身の学童クラブにかかわる考えも深まっていく。

我が家での学童支援員学習会充実　　2018 年 12 月 08 日

４日に我が家で行った初めての学童学習会は、「充実」の一言。

私も含めて７名の参加。四つのクラブなどから集まる。２０歳になったばかりのかたから、ベテランまでの男女、多彩な顔触れ。２０代が中心だが。

自己紹介から始まって、この日に合わせて、３名のかたが実践記録を準備してくださった。ありがたい話だ。時間の都合で、そのうちの一つを検討した。司会進行には、その場の雰囲気でベテランの方が活躍していただいた。

学童支援員２年目というが、「本当かな」と思えるほど、濃密な経験を蓄積した方の実践だった。人付き合いに難題を抱える子どもを守りサポートしながら、当人の自己肯定感を高め、居場所を作っていく実践だ。保護者とも深いかかわりを持ち信頼関係を築いておられる。

この実践をさらに進めるために、友達関係仲間関係をどのように伸ばしていくのか、に一つの焦点を当てて、議論が進んだ。すぐにでも、一段と高い実践が進みそうな気配を強く感じる。

こんな中身のユンタクで、参加者に満足感充実感があふれたようだ。

ということで、さらに継続していこうという話になった。次回も、今回同様火曜日の午前１０～１２時に我が家で、だ。１月８日。

おそらく誘い合ってこられるので、次回は人数が増えそうな気配だ。今回用意された実績記録のうち２つが残

っているので、その検討から始まるだろう。

希望者の自由参加なので、遠慮せずご参加ください。駐車場の用意がありませんので、乗り合わせか、近くのスペースに止めて、歩いておいでください。

お待ちしています。

この情報をお広げになるのはいっこうに差し支えありません。

沖縄の学童支援員のすばらしさ　　10 月 20 日

台風ではないが、私にとっての大きな「襲来」は、学童研修だった。合計 10 回にわたるものを 5 地区でした。共通テーマは、実践記録を書き検討しながら、実践の質向上を追求することにあった。

ほとんどの参加者が初体験の実践記録執筆を実質 1 時間ほどで、ほぼ全員が見事に書き上げた。普通に考えれば、驚くことだ。過去３０～４０年ほど実践記録を書いていただくことにかかわってきたが、こんな体験は初めてだ。

加えて、実践検討も実に楽しく行い、その検討をもとにしたグループごとの「実演・ロールプレイ」も素晴らしかった。

それらを通して、参加者は、日ごろの自らの実践を再発見するとともに、近隣の他学童での実践と子どもたちの様子を交流し合い、大きな満足を得たことだろう。

わたしも、これらの過程で、学童支援員のすばらしさ、子どもたちの成長ぶりを、手を取るように感じることができた。

それにしても、沖縄の学童支援員の素晴らしさには、舌を巻いた。素晴らしさには、次のような中身がある。

１）健康。心身ともに。

２）明るく前向き

３）子どもがぶつかる困難を、子どもたち自らが解決していけるように支援していくありよう。

４）私流にいうと、身体知性（行動知性）と大脳知性とが並行して発揮される。

こうした実践を作り出している、沖縄の学童クラブ（いくつあるんだろうか。数百かな。沖縄各地をまわったから、その大半と出会ったことになりそうだ）は、すでに相当な実践蓄積をもっているといえよう。

保護者の仕事の都合で子どもを預けられる場ではあるが、子どもたちが居場所として、その年齢相応の自己実現がはかれる場として、子どもたち自身に強い愛着をもたせているといえよう。そして、そこでの成長ということでいうと、学校・家庭と並ぶほどの役割を果たしている。

そんなことが、参加者皆さんが書いた実践記録ににじみ出ている。だから、こうした実践記録をぜひとも、本や冊子にして、保護者・子ども自身・福祉関係者・教育関係者（合計すれば数万人以上、場合によっては 10 数万人以上）の目に触れるものにしていただきたい。今年の参加者は合計すると数百名にのぼるが、参加者が書いた実践記録を集めて掲載するだけで、10 冊以上の本・冊子になるだろう。

そうなれば、大きな感動が広く伝わり、急激に広く知られ愛されるようになってきた学童クラブの社会的名声はますます高まることだろう。

期待は膨らむ。

学童支援員は、実践検討でもすごい　　09 月 22 日

15 日 17 日記事に連載した学童支援員による実践記録作成についで、書いた実践記録の検討を、地域ごとに進めている。

書かれた実践記録をアトランダムに近い形でいつくかを抜き出して私が入力したものを、参加者が検討し合った。宜野湾と南城の例を紹介しよう。来週からは糸満・豊見城、南風原・与那原・八重瀬で行う。

つい最近の出来事を書いたもので、学童クラブで日常的に登場する例ばかりで、参加者の強い関心と共感を引き出した。

ドッジボールの投げ方をおかしいと笑われた子どもが泣き出した。どう対応するか。

サッカーのルールがわかっていないために、サッカーに入れない子ども。入れようとしない子どもたちへの対応

同学年女子が二つのグループに分かれたが、片方のグループから締め出しをくっている子ども。それへの対応

保護者が迎えにきても、帰る準備をしないままでいる子どもへの対応

支援員にちょっかいを出すことで、関心を引こうとする子どもへの対応。

などなど、日常的にある多様なことへの対応だ。

各実践記録を読み合わせた後、一人一人が「素敵な点、対応へのアイデア」を A5 の紙（ポスター）にマジックペンで書き、5～6 人グループのなかで話し合い、そのうち一つを壁面に貼りだす。貼りだされた 7～12 枚（会場によって参加者数が異なるため、グループ数も異なる）について、実践記録を書いた当人が、注目したポスターを中心に全体討論を進めていく。時間の都合で、各１０分余りの討論だが、核心を突いた討論が進む。

参加者の意見は簡単には一致せず、意見が分かれることも多かった。それにしても、相手の言い分を理解しながら、その場面（相手の子どもたちの状況・成長の課題、子どもたちと支援員とのかかわりの持ち方など）に応じた対応を、その場その場に応じて見事にしている支援員の姿が浮かび上がってくる。

こうした実践記録の検討については、私は 30 年余り小中学校教員対象に行ってきた経験があるが、大きな違いは、学校ではおおきな縛りがあり、あるいはその縛りとは異なるにしても、「こうあるべきだ」という感覚が強い。それに対して、学童クラブ実践では、「縛り」が弱く、子どもたち・学童クラブ・支援員の相互関係の持ち方と、実践の蓄積のなかで、かなり自由に（なり多様に）実践がすすむ。その多様さを理解承認しつつも、さらに深めていこうとする姿勢を強く感じる。

そして何よりも子どもたちの自主的自治的解決の事例が多い。それを支援員は支えるという感覚なのだ。そのなかで、子どもたちはのびのび育ち、自信を身につけていく。そこのところが素敵なのだ。

一つ一つの実践記録の検討に充てられる時間はとても短いが、驚くほど焦点を突いた議論が進む。私には驚きだった。

こうした検討が蓄積されていくことで、一層素晴らしい学童実践が生まれていくと感じる。私も夢中になってしまい、頭と身体が「満杯」状態になってしまった。

学童支援員が実践記録を書くワークショップの進め方　　09 月 17 日

実践記録は、なによりも支援員みずからの実践の記録だ。実践をするのは、子どもではなく支援員自身なのだ。だから、子どもの記録を含んではいるが、それとは異なる次元の支援員自身の実践を記録する作業が求められる。そのあたりが、実践記録執筆ワークショップの焦点となる。

私は、実践記録を書くワークショップを何度も繰り返して、バージョンアップしてきた。そのポイントを書き並べよう。

１）大変なことが始まると思い、始める前から固まってしまう参加者が多い。実践記録を書くなんて、すごい実践力がある人がやるもので、私のような未熟ものにとっては、相当にレベルアップしてから取り組む課題だ、と思い込んでいる人も多い。

その点を打破するために、

a.会場の雰囲気を、柔らかく暖かいものにするアイスブレーキングをする。

b.一人で書くのはつらい感じがあるので、グループで支え合って書く。作ったグループを仮想学童クラブの支援員会議に見立てる。

ｃ.何度書き損ねても OK。　気づいたら追加しても OK。 ということで、ポストイットを書き並べていくことで進める。

d. 書く素材は、ここ 2, 3 日の 15 分ぐらいの間に実際にあったことに絞って取り上げる。困ったこと良かったこと、なんでも OK

２）通常よく使う小さなポストイット一枚につき一つのことをＩ０～30 字で書く。他の人も読みやすいように、サインペンで書く。書いたポストイットを時間順に縦長の大きな紙に貼り付けていく。貼りだしたポストイットの順序を入れ替えたり、挿入したり、追加したりして、さらに膨らませていく。

３）子どもの事実　→　その分析　→　方針　→　実践　→　事実というサイクルで進むが、事実と実践の間にある分析と方針は、「思い起こせば、～～～だったはず」ということで書いてよい。

こうして書いていくと、1 分足らずで起きたこと・思ったことがポストイット 4～８枚ほどに記入される。

ということで、１５分ぐらいのことが、ポストイット２０～３０枚に書かれる。

４）書かれたものをグループ内で回していき、他の人が書いたものに、「多分、こんなことをしているはず」と推理できるものをポストイットに書き、タテに並んだポストイットのなかに挿入していく。「この時、どうしたんですか。どうおもったのですか」という質問でも OK

５）グループ内で回すのが一周して自分の所に戻ってきたら、並んだポストイットを整理する。他の人が挿入したものが OK であればそのまま挿入しておく。ちょっと違うな、という時は後で話し合う。

６）グループ内でおしゃべりして、発見・感想などを述べ合う。次にする実践検討の準備になる。
実践検討について書くのは、連載の次回にしよう。

実践記録を書く　学童支援員研修　　09 月 15 日

9 月から 10 月半ばにかけて（そのうち一回は 7 月に終了）、合計１０回の研修をワークショップスタイルですすめている。NPO 法人沖縄県学童・保育支援センターが県内の自治体から委託を受けて実施している「中堅支援員研修コース」で、「学童保育実践の質・記録・実践検討」というタイトルだ。

中部・宜野湾・南城・南部１・南部２の地域で、おのおの 1～3 回セットでしている。
昨年も同様の研修を含んで行ったが、今年は一層本格的だ。すでに 3 回終わったので、そこで出会ったことを紹介コメントしていこう。

昨年は新人支援員がかなりいたが、今年はすでに何年も経験している人、なかには 10 年 20 年経験のベテランが多い。それだけに意欲が高い。昨年は申込者の 6～7 割参加だったのが、今年は 9 割以上の出席だ。南城などは、当初予定をかなり超えての参加者だ。

ということで、加齢のなかで体力限界がある私は息も絶え絶えやっている感じになっている。それでも参加者のやる気と質の高さが、私を支えている。

主催する自治体によって回数が 1～3 回と異なる。内容から言うと、3 回以上必要なのだが。
というのは、まずは実践記録を参加者全員が書くという大仕事がまずある。それをもとにして、実践記録を検討しつつ、実践の質向上を考えるという内容だからだ。

学童支援員に限らず、学校教師など実践者が、自らの実践記録を書くということは大変で、難題の部類に属することだ、ということは広く知られている。学校教師で実践記録を書いたことがある人は、実際のところ、1～2 割程度ではなかろうか。40 年以上前からのことだが、学校教師に実践記録を書いていただくのに、かなり苦労してきた。一か月二ヶ月と悪戦苦闘して、やっと書き上げたという人が多い。書き切れなかった人の方が多いかもしれない。学童支援員の実情に大きな違いはない。

ということで、実践記録の書き方をワークショップ風に進める試みを始めた。それがある程度形になって成功をおさめ始めたのは、一九八〇年代後半のことだ。保育園の保育士さんたち対照のものが、成功し始めた最初だ。その後は、大学授業にあっても、受講する学生たちに実施してきた。

という個人史があるのだが、数年前の学童研修でこのことに再び取り組み始め、懐かしい思いがした。

今回の学童支援員対象の実践記録ワークショップをしてまず驚いたことは、早く上手に書けるということだ。60～80 分ほどで、たいていの人が 500～1000 字ぐらい書いてしまうのだ。なかにはそのまま実践記録集に掲載できるほどの内容のものも出てくる。

学校教員が難渋していたのと対照的にさえ感じるほどだ。

その理由は、まだよくわからないが、今思いつくことは、日常的に、子どものことをメモする習慣があることにある。支援員相互に情報を共有するために、そういうメモを日常的にとっていることが、子どものことを書く上で役立っているのだろう。そして、子どもひとりひとりを見ることを日常的にしていることがその前提にある。学校教員にとっては授業をはじめとする諸活動をすることがまずあり、近年では繁忙化といわれる状況の中で、子どもたちをひとりひとりのレベルまでみることがなかなか難しいということもあろう。また、教員一人当たりの子ども数は、学童支援員より多そうだ。

続きは、次回さらに書いていく予定だ。

学童研修　　06 月 20 日

ここしばらくの私の中で、印象的なことの一つは、学童研修だ。中堅主任対象で、学童クラブを現場で中心的に担っている人たちなので、動きと知的質が高い。テーマも実践の質向上で、本当は３回連続のものだが、地域によって２回になったりする。今回は１回だけだ。３回分を１回でやるのは無茶だが、１回でできることをした。日々の実践から取り上げた具体的課題を全員に出してもらい、それをグループ単位でポストイットを使いながら検討深化させ、次の取り組みの目標と方法を具体化するものだ。

さすがベテラン学童指導員たちで参加者をうならせる検討提案が続出だった。

ところで、ある方に、「沖縄アクセントですね」といわれた。私はウチナ―グチを話すことはほぼできないが、話し方は沖縄式になっているのだ。

学童クラブ総会　学童研修　　05 月 25 日

新年度の会議の第一号は、南城市学童保育連絡協議会定期総会。結成以来７年目に入る。加入学童クラブが２３ヶ所になったのが特筆事項だ。結成時のほぼ倍だ。市内のほぼすべての小学校内につくられたのが大きな要因。それに伴い、既存のクラブが細胞分裂して、第二〇〇クラブが作られていく。第三もあるし、多いのは第四まである。

制度整備充実にともない、立派なクラブが作られていく。新しい指導員も多い。だから顔を合わすのは旧知の

方よりも新顔の方が多い。市役所の支援も進んできている。市議会議員も大きな関心を抱いている。

そうなると、中味充実がますます重要になる。そんな時、昨年から始めた指導員資質向上研修の講師の本年度打ち合わせがあった。今年も、沖縄各地にでかけてやるが、昨年以上に各クラブの実践向上のための軸になる方々対象の講座が中心になる。今、その構想を練っている。昨年は、１時間で実践記録が書けるレベルにまで達したが、今年は、その記録検討をとおして、実践の質向上を図るという、かなり高度なものになりそうだ。指導員の元気よさ明るさ行動知性がそれを現実のものにしていくことだろう。

沖縄各地での学童保育研修　沖縄内の地域差　　2018 年 03 月 16 日

２０１７年９月から３月まで、沖縄各地に出かけて十数回の研修ワークショップをした。学童保育の指導員対象で、力量向上が趣旨だが、わたしが担当したのは、「遊び」と「実践記録を書く」だ。次年度も担当することになっているが、具体的なものは、もう少したってから決まる。

この半年で出かけたのは、宮古３回（一回２コマ）、糸満・豊見城２回、八重瀬２回、那覇２回、中城２回、宜野湾１回２コマだ。１コマというのは、正味２時間ということだから、総計１２回１６コマということになる。

参加者がたくさん学び発見するだけでなく、私もたくさんの発見があった。

ずらずら並べていこう。

各会場で出していただいた検討したい「遊び」は、地域ごとに特徴が出てきた。地域ごとの違いが激しいのが驚きだった。同じ沖縄内なのに、である。「沖縄県内の地域ごとの遊びの違い」というテーマで大学生が卒論を書けそうだと思う。

屋内遊びが多い都市地域と、屋外遊びが多い地域との違いも目立った。

沖縄の子どもたち特有の遊びに出会うかと思ったが、それは気づかなかった。

あるベテランが、５０年ほど前の鬼ごっこの特別ルールを紹介したが、だれも知らなかった。面白いルールなのに、残っていないのは残念。

４０年ぐらい前に、私もかかわって広めた「団結の木」「集団じゃんけん」などの集団遊びを知っている人はほとんどいない。「知恵の輪」を知っている人は、少しいた。

遊びの地域差だけでなく、指導員の地域差もある。野外活動が日常的にできる地区とそうはいかない地区とでは大きく違う。都市地区は、都市風なのだ。学童クラブということもあるのか、野外活動ができる地域の指導員は活動的で、都市地域は思索的傾向が強い。

会場は、役所、公民館、福祉センターなどだが、建築後４０年近いものと新築とでは大きく異なる。建物の新旧以上に、照明の明暗が会場雰囲気を大きく変える。

こんな地域による、人間、場所、遊びの違いに触れるのは、興味深いことだ。

地域ごとの、文化の継承と創造に出会うことも、「お出かけ・旅」の楽しみの一つになりそうだ。

沖縄の学童保育クラブ

１．学童保育クラブと私とのつきあい　　2017 年 11 月 09 日

近年、注目を集めている沖縄の学童保育クラブについて、これから 4～5 か月かけて、約 10 回の連載をするつもりだ。

はじめに、沖縄の学童クラブと私とのつきあいについて述べておこう。

最初は、１９８０年代半ばのころだ。そのころの資料を、私が保存していないので、記憶をたどるしかないが、幸い手元に「浦添小学校区なかま学童クラブ５周年記念誌」１９８７年があり、当時の様子が詳しく書かれているので、参照する。

そのなかの年表のなかのいくつかを抜き出してみよう。

１９８２年1月３１日　浦添市に学童保育所をつくる会結成
　　３月２８日　浦添小学校区学童保育所の開所式
１９８３年1月１５日　仲間１７７番地（現在の場所）へ移転
１９８４年4月1日　　指導員　３名着任
　　１１月２３日　第一回沖縄県学童保育スポーツまつり（港川小）
１９８５年3月３１日　沖縄県学童保育連絡協議会結成大会

このなかま学童クラブは、沖縄内での学童クラブのもっとも早いものの一つだろうが、そのころには他にいくつも存在していただろう。１９８５年の沖縄県学童保育連絡協議会結成大会には、すでにかなりの学童クラブが存在したように思う。その際、私が講演した記憶があり、相当数の参加者がいた記憶がかすかに残っている。

そして、上の年表の１９８４年４月１日に着任した３名の指導員は、私の卒論ゼミ生だった。そして、１９８５年前後から、私が担当するゼミ生の「実習」場として、那覇市在のいくつもの児童館や保育所の週末園庭開放事業とならんで、このなかま学童保育所にも、学生たちを送り込んでいた。それは、私が琉球大学を退任する１９９０年ごろまで続いた。

そして、１９８５年１２月１日には、琉球大学教育実践研究会主催で「地域教育実践交流集会」を開き、なかま学童保育クラブからも問題提起をしている。その集会で、私は「今日の沖縄における子ども集団の状況と指導の課題――沖縄の子どもをめぐる社会状況の近年における変化――」という基調問題提起を行っている。

１９９０年代に入ると、私が沖縄から離れたことで、つきあいには長い中断があった。再びかかわるのは、２０１０年ころからだ。２０１０年開催の第１９回沖縄県学童保育研究大会に参加した。その大会は、実行委員会ならびに沖縄県学童保育連絡協議会が主催だが、加えて沖縄県学童保育支援センターが支えている。同センターは旺盛な活動を展開し、全県下に学童保育を作り上げていく上で重要な役割を果たしている。

そのバックアップもあって、南城市学童保育連絡協議会が２０１２年３月３日に結成され、私は顧問に就任した。

そのころから、指導員研修が各地で行われた。私は、県全体対象のものだけでなく、うるま市、西原町、南城市で開かれたものに、講師としてかかわった。

また、２０１３年の学童指導員研修会では、「沖縄の学童クラブが、沖縄の教育にどんな役割をはたすことが期待されるか」という問題提起を行った。

写真は、「浦添小学校区なかま学童クラブ５周年記念誌」の表紙

２．学童保育指導員研修と私の研究　行動的少年期　　2017 年 11 月 19 日

この９月から始めた学童クラブ指導員研修は、これまで私が担当したものとは異なって、沖縄各地で連続して開くものだ。平均して月２回担当しているが、私の体力に合わせて設定してもらった。

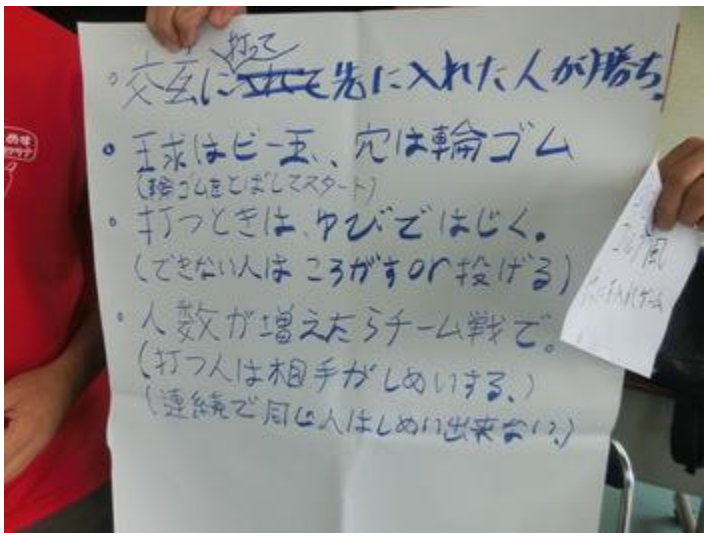
そのテーマの一つは「遊び」だ。これは、私が学童クラブにかかわりはじめた１９８０年代半ばに至るまでの研究テーマの一つ、「幼児期から少年期にかけての子どもの発達」と深く結びついている。その研究は、「子どもの発達と生活指導の教育内容論」（１９８５年に明治図書より刊行）という著書にまとめあげた。

その一つの主張点は、「小学生時代、つまり学童時代を、行動的少年期にしていくことが重要だ」ということだ。それには、地域から子どもたちがいなくなり、地域の教育力の極度の低下のなかで、子どもたちは、学校・塾・スポーツ組織になかに囲い込まれたことが背景にある。親のなかに、我が子に対する所有感覚が強まり、教育熱心になるが、それは親自身が教育活動をするのではなく、学校・塾・スポーツ組織での我が子の成功を支援する役割を取ることになる。その結果、子どもは大人が提示した基準にもとづく競争の中で成功を収めることが生活の中心になっていき、結果として、「指示待ち人間」に陥り、人間関係能力（つまり社会性）に乏しい事態が広がる。そうしたなかで、校内暴力や不登校、さらには心身症的なものが広がっていく。

そうしたことが、少年期に獲得すべき力量が獲得できないまま、子どもたちが大人になっていく現象を大量に作り出す。

そのなかにあって、全国的にも、そして沖縄においても広がる学童クラブが、子どもたちに必要な少年期を豊かに提供している。そしてそのことが、学童クラブの魅力になっていく。それに気づいたのは、子どもたち自身であり、指導員たちであり、学童クラブで生き生きしている子どもに気付いた親たちであった。注目されるのは、そんな学童クラブ体験を持った若者が、近年学童クラブ指導員となる例を見かけることである。

学童クラブが持つ、少年期の生活と発達を保障する豊かさが、学童クラブの魅力を高めている。他の同世代組織に預けていた保護者たちが、学童クラブへの期待を高め、場合によっては移ってくるかもしれない。とくに、塾・スポーツ組織とを比較しながら、選択している保護者にとって、学童クラブの条件と中味がどうかは関心の的なのだ。それらが良くなるにつれて、潜在的待機児童を引き寄せて、クラブ児童数がさらに爆発的に増加しそ



うな気配さえ、私は感じる。

それだけに、沖縄の子どもたちの課題の分析とそれに見合った、学童クラブの内容充実作業が求められている。と同時に、それは、学校・塾・スポーツ組織のありようを大きく変化発展させていくことに通じる。

私の研修講座もそこに焦点をあてている。

写真
学童クラブ指導員研修で、子どもの遊びをアレンジするプレゼンテーション

３．学童保育クラブづくりのこれまでとこれから　行政の役目　　11 月 29 日

公設民営ないしは公設公営が多い他府県と比べて、沖縄の学童クラブの多くは、現実の必要のなかで、保護者の要求と、それに対応する指導員たちの自主的営み、つまりは民設民営を中心として作られてきたことが注目される。

国や自治体の施策は、近年まで大変乏しいものだった。ようやくここ十年足らずで、いくつかの施策がなされるようになった。それには、学童関係者の自主的営みと行政への働きかけが大きい。行政側は後手に回り、国の予算がおり始めるなかで対応が始まったという印象さえある。その国の政策には、女性労働力の確保という別の課題の施策とつながって考えられてきた。そこでは、いかに豊かな少年期を保障するかという視点は薄い。

また、沖縄の学童クラブの一つの特徴は、自発的な「篤志」雰囲気を持つ人々の努力が大きい点にある。類似したものとして、保育所の多くがある。認可私立にしろ無認可にしろ、涙ぐましいほどの個人としての保育関係者の営みによって作り維持されてきた多くの保育所だが、学童保育にもまったく同様の事が言える。むろん、保護者による共同運営の貴重な積み重ねによるものもあるが、それほど多くはない。

近年の行政のかかわりのなかで目立つのは、国の予算化を背景にして、建物だけを公設し、その運営は１００％民営にするものが、急に増えたことだ。その民営を引き受ける学童保育関係者の負担は大きい。行政はそれを積極的に支えるという点で、ゼロスタートを切ったところといえよう。行政関係者で、学童保育を論じ施策を構想できる人材もまた、ゼロスタートに近いのだ。そのため、沖縄の自治体の取り組みは、国の政策や予算の執行の色彩が濃く、独自展開が見られないことが多い。たとえば、公設された施設の建物には、沖縄の学童保育に相応しいものを作るという研究検討の跡は見つけにくい。

こうしたゼロスタートのレベルを引き上げていくには、行政関係者の研究検討の蓄積が欠かせないが、その点での取り組みが大いに期待される。そんな点では、これまでの学童保育に直接携わってきた関係者が作りだした蓄積を掘り起こし、行政関係者を含めてそれを広く共有していけるような仕組み、たとえば研究会や情報誌などをつくりあげることが期待される。そうした場としてこれまで継続されてきた研究大会は貴重な場であるが、その輪をさらに広げる必要がありそうだ。

小学生期（学童期）にかかわるものとして、学童クラブの他に小学校、おけいこ事塾・学習塾、スポーツクラブ、合唱団、児童館、地域子ども会、公園・遊び場、字公民館などがある。他にも、盛り場、野山、海岸などもある。

子どもたち自身は、こうしたものとつながりつつ日々生活している。そして、これらのほとんどに大人たちもかかわっているが、それらの大人どうしのつながりは強くなく、都市地区などでは、つながりがほとんどないところも見かける。

そうしたつながりの弱さを超えて、大人たちのつながりを作っていくことが求められるが、そうした動きは少ない。離島のように人口が少ない地域では、子どもたちだけでなく大人たちも顔を知りあって、つながりあい、子どものことで協力関係を結ぶことが多いが、都市地区では、年々希薄になっている。それだけに、子どもたちに何が起こっているかを知らない大人も多い。

学童クラブを含めて、そうしたつながりを作りだすことが求められる。その際、子どもの相互関係が豊かで深い学童クラブが重要な役割を果たせる可能性がある。そうした視点からも、学童クラブの存在に注目したいものだ。

４．指導員　　12 月 09 日

学童クラブの激増は当然指導員の激増を伴う。と同時に、指導員人材の確保問題がこれまで以上に重要になってくる。それらの問題は、保育士と共通する問題である。とくに給与面での改善が不可欠だが、それを保護者負担に頼るわけにはいかない。民設民営の比率が高い沖縄の場合、なおさらそうだ。公費支出が不可欠だが、学童保育問題への議員議会や行政の取り組みがゼロスタートに近い状態をいかに変えていくかが問われている。それを女性労働力問題からの政策立案にとどまらず、子どもの発達問題、沖縄おこしの人材育成の視点からの政策立案へと進むことが求められる。

さて、激増している指導員需要に対して、多様なキャリアをもった人、あるいは新卒のエネルギッシュな若い人が応え、多彩な指導員構成を生み出している。新しい指導員には２０歳前後の人を含め、若い人が多いのだが、４０代５０代６０代のかたも結構多い。そうした方がもつ多彩なキャリアには、子どもを対象にする業務でない職種だったの人もかなりいる。そうした多彩さが、学童クラブの多彩さを作りだすうえでプラスに働くことが多い。

多彩な指導員をいくつかのタイプに分けるとすれば、母親タイプ、父親タイプ、保育士タイプ、学校教師タイプ、地域づくり活動家タイプ、にいにいタイプ、ねえねえタイプなどが思い浮かぶ。学校であると、教員タイプが、保育園だと保育士タイプが圧倒的に多いのだが、学童では学童指導員タイプというものは、それほど固定的にあるわけではない。

こうした多彩なタイプの指導員が、パートの人を含めると、各クラブに２～５人ほどいる。当然のことながら、多彩なタイプの構成になり、子どもたちは「好みの指導員」を慕ったりする。慕うという関係ではなく、適度な距離を置いたり、あたかも遊び仲間のように、指導員に対することも多い。

重要なことは、学童クラブでは、子どもたち自身によって遊びをはじめとする諸活動をすすめることである。

その基盤には、子どもたち自身が多様なグループをつくり、指導員を「使い」ながら、あるいは「助け」ながら、豊かな活動を展開することである。指導員が少なすぎで必要なタイプがいない時であっても、子どもたち自身が補うことが結構ある。たとえば高学年生がその役割を担うこともある。なかには、中学生高校生になった「卒業生」が、時々やってきて、その役割を担うことも見られる。そのことがまた、子どもたちのやる気と力量を高める面があることは重要なことだ。

そして、指導員の業務は多様である。それらを一人でいくつも同時に担うし、必要と条件に応じて分担しあうことが重要である。業務は、次のように多様なのだ。

管理運営　企画作成実施　諸機関・地域との連携

保護世話　おやつ・食事　安全（含む救急対応）　健康保持　預かり対応

少年期の発達保障対応　障害を持つ子への対応

子ども集団形成　社会性

子ども文化の発展

５．指導員の特性１　行動力　つながる力　　12 月 20 日

２０１７年９月から６～７回にわたって、各地の指導員の研修にかかわっているのだが、そこで出会った指導員の特徴として、私が気づいたことを並べていこう。

私が進める研修は、ワークショップ形式、つまり参加者がつながりあって作りだす形なので、一人一人の指導員の特性がすごく表に出てくる。会場ごとの地域差も大きいのだが、細かく指摘するほどには経験していないので、ここでは全体をひとまとめにして述べよう。

１）行動力が抜群

私はほぼ３０年にわたってワークショップを多様な年代・職種を対象にやっているのだが、参加者のなかで抜群の行動力を示す双璧は、看護師と学童指導員だ。看護師は、緊急事態対応を含めて、行動が問われる職業だから当然だろう。学童指導員の行動力は、子どもの行動力と比例するのだろう。

たとえば、ワークショップが始まってそうそうに「ジャンケン列車」をして、参加者全体を一つの大きな輪にすることを最近の私の定番にしている。大学授業で学生相手にすると、はじめはキョトンとしている学生がほとんど。「ジャンケン列車はどうやるんですか」と尋ねる学生もいる。「やっていったほうが、説明するより早いよ」と応える。そのうち知っていて動きのいい学生が始め、徐々に全体の動きになる。「なんだ、その遊びなら知っている」という学生がほとんどだ。こうして５、６分ぐらいかけて、輪ができあがる。やりかたがわからないよりは、初対面どうしなので、とまどっているのだ。

それに対して学童指導員は、未体験でとまどう人がいないとはいえないが、５割以上の人がすぐに動き出し、１５秒足らずで全体の動きになり、１分余りで輪ができあがる。研修参加者も初対面同士が多いのだが、動きが素早い。

行動力の速さは、多様な活動の全般についていえることだ。普通のワークショップなら２時間で５～１０の活動を用意して、時間の範囲でやれるところまでやるということが多いが、学童指導員対象だと、どんどん進み、

予定の時間より早く進んでいく。そこで、その場の展開のなかでアレンジした発展的活動とか、新規追加の活動をすることになることが多い。というよりも、それが普通だ。活動がどんどん展開していくのだ。

行動力の高さはノリのよさといってもいいだろう。

２）つながる力、協力しあう姿勢がすごい

大学生だと、私は「人見知りなので、初対面の人と話し合い活動するのは苦手なのです」と弁解することが多いのだが、学童指導員では、そんな例に出会ったことがない。無論、指導員になって数日しかたっていなくて、緊張を示す人もいるが、しばらくすると、ごく普通に参加している。

つまり、つながる力、協力し合う姿勢がすごいのだ。ワークショップのなかで、多様なグループやペアをつくり、初対面の人との話し合いや活動になることが多いが、みなさん、臆せずどんどんすすめていく。

６．豊かな感性と感情表現　抜群の創造力＝想像力　指導員の特性２　　12 月 30 日

３）豊かな感性と感情表現

学童指導員には、自分の気持ちを素直に出すことが普通で、喜び、悲しみ、怒り、悩み、笑い、といったことを豊かに表に出す人が多い。研修ワークショップの初めは「緊張しているな」と見られる人でも、周りにつられてか、すぐに「地」を出してしまう。

事務職とか販売職とかなどでは、自分の感情を表に出さないようにすることが普通だ。学校教員にもそうした人が多い。感情を出すと、業務に差し障りがちであるし、自分の感情をコントロールできない人として低く評価されてしまいかねない。

子どもたちでも、学校教員など大人の前では、自分の感情を出すのを抑えるように躾けられることが多い。そこで、子どもたちだけのなかで感情を出すことになることも多いが、近年では、友達の間での「気づかい」の必要性が高まり、「気づかい」の下手な子どもは「ＫＹ」などといわれてしまう。

こうした結果、感情を豊かに表現する機会が減り、感情を出すのは、かなり爆発的な怒り悲しみをもつ時に絞り込まれていく。そんななかで、感情を出さないことで、つまり能の面のような顔つきで生きていく子どもが増えている。

感情も、豊かにもち表現するように育てていく必要がある。そのためには、人間関係のなかで、豊かに感情を出す経験を積み重ねることが欠かせない。その経験が浅いといつまでも幼児のような感情表現にとどまってしまう。

子どもに接する大人には子どもにその意欲と力が育つようにしていくことが求められる。その点では、多様な感情を豊かに出す学童指導員は、今日では貴重な存在になっている。私のワークショップでも、参加した指導員たちの豊かな感情表現に包まれていく。全体的に、明るくリズミカルな感情が多い。と同時に、思考を深める討論や共同制作の場面では真剣な顔つきが出され、笑いと交互に織り交ぜられる感情表現が会場を包んでいく。

感情表現のベースには、ヒト・モノ・コトに対する豊かな感性をもつことが求められる。ここでヒトといったのは、自分自身、そして対人関係においてのことである。たとえば、誰かが悲しい状況に出会っている時、それ

に共感して悲しむこと、喜びたいことがあった時、喜びを隠さずに適切に表すこと、などである。

近年では、知性とか理性が重視され、対照的に感性が抑え込まれる風潮があるが、これらは対立するものではない。豊かな知性理性には豊かな感性が欠かせない。その逆もそうである。

４）抜群の創造力＝想像力

ワークショップでは、参加者の創造力＝想像力が期待されるとともに、そこでそれらの成長がはかられる。私がすすめるワークショップは、与えられたもの指示されたことをするというありようとは対極的なものだ。他の参加者とハモリながら、自分なりに創造力＝想像力を発揮することを求めるが、学童指導員はすごいのだ。物語を即興でつくる、遊びをグループごとにアレンジするといった活動で、指導員の実力が鮮明に出てくる。

人間として成長するとは、ヒト・モノ・コトを創造していく意欲と力量を高めることであり、創造には、どんなヒト・モノ・コトをどのように作るのかをめぐる想像力（イメージ力）が不可欠だ。与えられたものを吸収し、指示されたとおりに動く「指示待ち人間」とは対照的な姿勢であり力量だ。

７．健康で元気　仕事を愛し、やりがいを感じる　指導員の特性３　　2018 年 01 月 10 日

５）すごく健康で元気だということ。健康というのは、身体上のこともあるが、精神上の事が大きい。別の言い方をすると、まっすぐで、美しささえ感じさせるということ。だから、研修のワークショップでは、砂に水がしみとおるように、学習し創造なさっていく。

そんな具合だから、参加者だけでなく、ワークショップをすすめる私自身も、参加者のなかに引き込まれていく。夢中になりすぎて、私の頭脳がパンクしそうになることがしばしばだ。そこで、パンク対策として、研修開催の運営にあたる方に、黄信号のサインを送ってもらうことにしている。サインに促されて、途中休憩をとる。

６）最後になるが、仕事を愛し、やりがいを感じておられることがある。これで給与がアップすれば「いうことなし」だ。そうなると、希望者が激増するだろう。現状では、給与理由で、退職せざるを得ない人が出るという残念な事態に出会うこともある。

そんなやりがいのある仕事なので、進路先未定の大学卒業生に、私は学童指導員の仕事をすすめてきた。３０年余りにわたって、たくさんの指導員を送り出した。沖縄だけでなく、私の以前の勤務先大学があった愛知でもそうだ。

こうした指導員であるし、学童クラブであるので、今後の成長発展がおおいに期待される。最大の理由は、子どもの成長にとって、抜群の機会であるからだ。

そこで、教育論的に、より一層深化させていく必要がある。すごい可能性に満ちている開発的創造的力量の向上の面で、また重要な役割を果たしている社会性向上の面などで、追求が必要だろう。

そして、知性・感性・身体性の総合的追求をしている点、たとえば、行動的知性と創造的感性といったことの探求が必要だろう。また、身体面でいうと、学童に来る子どもたちは、手足などの巧みさ、運動上の俊敏さが高まりやすい年齢時期であるので、その点も明らかにしていきたい。

こうしたことの追求には、学童クラブの実践記録、およびがその相互検討が重要な役割を果たす。実践記録執筆のワークショップは、４年前にうるま市の学童クラブ指導員を対象にして行った際に、質量ともにすごい記録ができあがり、このブログのなかで「すごい！すごい！　実践記録をどんどん書くうるま市学童クラブ指導員」2014 年 1 月 22 日記事に書いた。今回の連続した研修ワークショップでも、各地とも、２時間ほどで、参加者全員がかなりの長さの記録を書き上げた。学校教員でも同様のことをしてきたが、かなり難渋するかたが多いのと対照的でさえある。おそらく、指導員の行動的知性の高さが反映しているのだろう。書き方さえわかれば、すぐに書けるという感じなのである。

学童指導員研修のための宮古滞在で、うれしいことの連続　　2017 年 11 月 02 日

２９日は、以前から予定されていた宮古島の学童指導員研修。３回目の今回で一区切りだ。午前午後とフルにあるので、前日夕方に宮古入りする予定だった。しかし、台風が本島に来て、飛行機欠航が予想されるので、急遽金曜日に宮古にいくことになる。そのため、南城市史民俗編調査委員会の金曜夜の勉強会は欠席。

２８日の台風は、想定外。大きくはないが、直撃で、帰宅してみると、ミフクラギの枝の約半分が折れていた。北風なので北側は荒れたが、南斜面にある我が家は、南側はそれほどではなく、ラッキーだ。

宮古も風は結構強かった。研修の時以外は、ホテルでの読書中心生活。連泊で部屋も変わるので、昼前後は清掃のため部屋を開けなくてはならないので、そこで、同行者とともに通り池（写真）など伊良部島・下地島めぐり。ゆったりした時間を過ごす。同行者３名は、私よりずっと若い方々。夕食は、居酒屋で語り続ける。異世代と話すと、とても楽しい。久しぶり、理論問題を語り合える人がいたことと、私が１９８０年代に模索していたことを現在追求しておられる動きを知ったことで、嬉しさのあまり涙ぐんでしまった。

学童指導員の研修も充実していた。参加者一人一人が実践記録を書いて、それを検討討論する活動だった。どうやら実践記録を書くのは、ほとんどの人が初体験なのだが、２時間足らずのワークショップで、全員がポストイット３０～７０枚ぐらい書いた。字数に換算すると８００～２０００字相当だ。

午後は、その検討。全部はできないので、選ばれた４つにしぼった。学童便り制作、ハローウィン行列の取り組み、子どもたちからでてきた意見・アイデアをもとにしたお菓子づくり、子どもたちがもってきたメダルのやりとりをめぐってのトラブル対処。

いずれも、前向きで、アイデア一杯の意見ですごく盛り上がった。

このような研究会が継続することを祈る。

終了後、討論で活躍した方とユンタクしていると、私の卒業生の義姉妹であることがわかり、卒業生が元気に大活躍していることを聴き安心。空港の待合室にいる時、電話。その卒業生が空港に会いに来るという。３５年以上ぶりの再会。卒業して以来だ。学生時代と変わらず元気。それにたくさんの経験をもとに熟して大活躍だ。

こんな発見・出会いに満ちた充実した時間だった。台風のおかげ？

『健康』『元気』『創造的』な学童クラブ指導員に圧倒される　　9 月 26 日

学童指導員研修ワークショップで圧倒されたことを書こう。

２１日　浦添市役所講堂で、浦添の学童クラブ指導員の研修ワークショップをする。たくさんある浦添市内のクラブから参加。１０日にした宮古に引き続くものだ。そして、１０月～１１月には、豊見城・八重瀬と予定されている。

共通のテーマは「遊び」なのだが、多様な遊びのなかで、どんな点に注目してかかわっていったらよいかを、ワークショップ形式で深めていく。とくに、既存の遊びをアレンジして、より豊かな遊びを作りだすことに焦点化した。

会場ごとに、地域の違い、参加者の経験の違い、世代の違いなどがあって、多様な展開になっていく。ワークショップは、参加者がつくりだしていくものだから、当然のことだが。

それにしても、すごい集中と行動力で、創造性豊かだ。ワークショップで同じゲームめいたものをしても、会場によって全く異なる様相がでてくる。

それらの背景にあるものを一言で言うと、『健康』『元気』『創造的』ということだ。これらの言葉は、よく使われる言葉だが、最近では、「『健康』『元気』『創造的』になりたい」という目標としてはよく聞く。ところが、ここでは現実に「『健康』『元気』『創造的』だ」なのだ。だから、勢いがいい。そして、参加者から出てきたものがパターン化せず多様なのだ。たとえば、アレンジしたい遊びの名前を出してもらったが、驚いたことに、５０人近くの参加者が提出したものにダブリがない。

なぜそうなのか、これは重要な検討課題だ。これから各会場で出会う指導員の方たちの協同創造のなかで、そのことを解明していきたい。

参加者の『健康』『元気』『創造的』に圧倒されて、コーディネイトする私は、圧倒されてしまい、肉体の限界を超えてしまう。充実しすぎているため、その後丸一日は休養日になる。

宮古での学童保育指導員研修　「遊び」　　09 月 13 日

１０日、宮古島市中央公民館で行われた研修だが、今回から連続して３回だ。今回のテーマは「遊び」。
当日は日曜日で、中学校の運動会と日程が重なって、受講者が予定より少なくなった。宮古島の学童保育事情についてほとんど知らなかったが、今回の指導員の方々との出会いで、多くの事を知った。

かなりの歴史をもつ学童クラブがかなり多く、参加なさった指導員も、ベテランのレベルに達している方々がほとんどで、私の展開するワークショップ型講座も、どんどん盛り上がった。

一言で言うと、学童クラブそのものが健康的で、指導員も健康的だから、子どもたちが大いに健康的であることは間違いないだろう。それは、屋外遊びの条件に恵まれているというだけでなく、前向きに創造的に諸活動にかかわる姿勢・意欲のすごさから読み取れるものだ。

当初予定していたプログラムに、参加者は躊躇なく積極的にかかわり、予定の三分の二ぐらいの時間で完了した。省いたわけではなく、それだけ濃密にすすんだということだろう。小学校１，２年生が中心の子どもたちで、幼児期から少年期への移行時期だが、その時期にふさわしい遊びで、充実した学童クラブ生活が築かれている印象だ。だから、結果的に、すでにしている既存の遊びを、いかにアレンジして、より充実したものにするかが焦点となった。

濃密化により浮いた時間で、私の「オハコ」であるミニミュージカルを作った。「初恋」テーマで、わずか２０分で出来上がってしまった。短時間新記録で驚きだ。そのなかで、子どもたち自身が行事をつくりあげていくイメージをつかんでいただいたが、最後の「絵しりとり」大会行事つくりは、とても豊かで、即興的に行事を創造し、楽しんでいく活動が出来上がった。

あまりにも濃密になったので、私の頭はパンク状態というかパニック状態になった。それでも深い満足感と伴っていた。次回は、記録の書き方、記録の検討などのテーマへと移っていくが、さらに充実したものにあなる予感がする。

宮古は、観光客が激増していて、交通量も増えている。建築ラッシュも続いている。少々散策したが、以前と光景が変わり、道に迷ってしまった。すると、いきついたのが、研修会場だった。

南城市こどものまち宣言策定　　2019～2020 年

１．2019 年 10 月 17 日　南城市こどものまち宣言策定委員会

１５日午後、南城市役所で、第一回南城市こどものまち宣言策定委員会が開かれた。委員に委嘱された私は委員長にも選任された。市長から諮問は、「こどものまち宣言」の策定であり、答申ができあがるまで２年間の任期である。

委員は、こどもに日々直接かかわっている人たちが中心だ。児童委員、保育園園長、子どもの居場所づくりなどにかかわる法人代表、子育てサークルを主催している方、社会福祉協議会でファミリーサポートなどに取り組む方、中学校長、小学校長、保健指導センター代表、副市長、子どもシェルターに取り組む人、そして関心が深く自ら名乗り上げた３名の公募委員の方々、いずれも子どもに直接かかわる人々、という具合だ。

会議では、冒頭に市長自らこの課題に寄せる「思い」を長時間にわたって語られた。不遇な状況で育ったが、３０代になって定時制高校に通う決意をした人、中学生になっても自分の住所を書けない人の話、英語塾や学童クラブをしてきた自らの経験など語りながら、「普通」通りとみられていない子どもたちを支援し、彼らがいかに活躍できるようになるか、ということを目指した『宣言』をつくりたいという熱意溢れる話であった。

委員会は、スタートにあたって必要な議事、そしてこれまでなされた調査報告を受けて、自由討議の形で委員の期待と委員会の課題への取り組み方などが、大いに語り合われた。熱意に押されて、最初から時間延長の会議となった。

当初は、まずは「宣言」を出した後に、諸施策に取り組んでいくということのようだったが、諸施策提起と結び付けて「宣言」を作ろうという話になって、委員会スタートにいたったようだ。

副市長を始め行政の担当者も、これまでの各種委員会とはかなりスタイルの異なるありようを期待していることを期待していた。行政の委員会というと、前例にのっとって、「型どおり」に進めることが多いが、この委員会は、委員自身が問題提起をし、充実した討論ができるようにする雰囲気で進行している。並行して、市民ワークショップも行い、市民参加型ですすめたいという流れである。私が言い出したことだが、子どもたち自身が参加して作り出していくものにしていこうとするものだ。

話し合いの中で出てきた一点は、アンケート調査も重要だが、それには限度があり、子どもの生の声ができる限り反映できる方向を追求したい、ということである。その点では、子ども達と日常的につき合っている委員の方々からの問題提起を重視していこうという流れが生まれてきている。

振り返ると、南城市の委員会参加は６回目であるが、いずれも会長・委員長を務めてきた。そのなかにあって、大変斬新な委員会になりそうな印象を強く抱いた。「さすが南城市」と言われ、市内外から「目を開かせる宣言」だという声が上がってくるものになればいいな、と願っている。

これを機に、「こどものまち」についての連載をスタートしよう。これは、この委員会に参加する私自身のための学習ノート、準備ノートのようなものだ。御愛読を期待しています。

２．１０月２４日　賞味期限の設定

どこの市町村も、「平和都市」「文教のまち」「いじめゼロ」などといった宣言を出して、市町村内外にアピールすることが多い。たいていの市町村は２～３個以上の宣言をもっているかもしれない。

そして、「宣言」には、ブームにのって制定されることが多い。

「こども」関連では、子どもの権利条約にからんで出すことがブームめいた時がある。宣言ではないが、「川崎市子どもの権利に関する条例」（２００１年）は、その象徴かもしれない。「沖縄市こどものまち推進部」をつくるなどの動きを見せたのは、２０００年代と記憶している。

いじめなど子どもをめぐる否定的動向がクローズアップされたときも同様である。その時々に話題になることに対応する動きとして登場する。子どもをめぐる貧困や格差が関心を呼ぶ近年では、そうしたメッセージを含んだ「宣言」などを出す自治体があるかもしれない。

だから、そうした宣言などは、高い関心を呼ぶ問題に集中的に取り組むという意味合いを持っている。そして、できれば長期の取り組みを示唆する場合も多いだろう。とはいっても、長期になればなるほど、「いま、ここで」とは対照的で抽象的なものになりがちだ。その結果「飾り文句」に陥る危険さえある。住民には記憶されずに、「そんな宣言をだしていたの？」という反応になってしまう。

とりくみを抽象化しないで具体的なものにするために、いろいろな工夫が求められる。「平和都市宣言」だったら、「〇〇市平和の日」をつくって、「世界各地の平和に取り組む市と交流する」「体験者の語り」の場を持つイベントをもつなどが行われている。モニュメントをつくることも多い。沖縄の各地の市町村に、「平和都市」などのモニュメントが並んでいる。

だが、時代によって力点が変化しがちな「こどものまち」のような場合に、たとえば８年というような取り組み期限をつくってはどうだろうか。そして、そのことで、期限内の取組みを明瞭にすること、期限がきたら、成果点不十分点を明確にし、宣言を終了するか、キャッチフレーズを変えて新しいバージョンをつくるかして、次の取組みに移行していってはどうだろうか。

たとえば、２０２１年　「こどものまち」宣言
　　２０２９年　「こどもたちとつくる南城市」宣言、
　　「こどもととしよりが湧きたつまち」宣言、
　　「南城と世界を結ぶこどものまち」宣言を出すというイメージだ。

３．１０月３１日　こどもの宣言　大人の宣言　南城市の宣言

「こどものまち」と聞いて、すぐに浮かぶイメージは、当のこどもたち自身が、住んでいて充実しているまち、引っ越して住みたくなるまち、大人になっても住みたいまち、である。

そして、子どもにかかわる大人にとっての「こどものまち」は、引っ越して、こどもとともに住みたくなるま

ち、子育てをしたくなるまち、こどもたちともに充実した生活が送れるまち、こどもとともに、豊かな未来をつくりたくなるまち、である。

その際の大人というのは、親を含め、子育てをしている保護者、子どもにかかわる仕事をしている大人、子どもと出会うことがある大人である。数十年前、市内の各集落では、「シマのこども」というイメージを誰しもがもっていた。そのころまでは、一生ついてまわるシマであったが、どこで暮らすかを選択し決定することが普通になった今では、そういうわけにはいかない。住んでいる所で、周りの子ども・大人とともに、意識的にそうしたまちづくり・集落づくりをしなければ、生まれてこない。それは義務的なものではなく、自由選択で共同でつくるイメージである。

だから、「こどものまち」宣言は、「南城市」という自治体の宣言ではあるが、その「南城市」という言葉の中心に座るのは、まず第一にこどもである。そして、こどもにかかわる大人たちである。そして、これらこども・大人の生活と活動を支えるものとして、自治体としての南城市が存在するというイメージである。

だから、自治体の「宣言」ではあるが、こどもの宣言であり、大人の宣言なのである。そのためには、子どもも大人も「自分たちでつくった」という実感が持てる宣言である必要がある。直接には、市職員や策定委員会が文案をつくるとしても、その過程に限りなく多くの子ども・大人が参加することが必要である。一番わかりやすいのは、宣言文案を、子ども投票・市民投票で決めることである。信任投票でもいいだろうし、二つ以上の案のなかから選ぶのでもいいだろう。「なんじぃ」選定の際にも、それに近いことをしたと聞いている。

そこまでいかなくても、子ども大会を開いて、あるいは子ども議会と市議会の合同会議で最終決定するというのもあるだろう。あるいは、キャッチフレーズを募集して、それを宣言文に盛り込むのもいいだろう。

その最終決定に至る過程で、子ども祭・子ども自慢大会・子ども歩行者天国・子ども市役所づくり（子どもたちでつくる市役所）などの大きなイベントを開くことがあってもいいだろう。

４．１１月５日　子ども・市民・南城市が実施主体になるということ

かつてリンカーンは、「人民の人民のための人民による民主主義」と語ったというが、それになぞらえていうと、「子どもの子どものための子どもによる『こどものまち』」ということになろう。

この三つのなかで、抜けがちなのは、「子どもによる」である。これまでの多くの場合、「子どものために」が中心に座りがちになってきた。かつて、「人民のために」ということで独裁政治を行った権力者がいたが、そうならないようにしたい。子どものために役立つことが中心になり、子ども自身が作り出すことが抜け落ちがちということだ。

同じことは、市民にとってもいえる。その市民の中にも、大きく分けて、１）集落、２）家族、３）個人、４）関係諸組織・諸施設などがある。それらが、自分たちで、「こどものまち」を作り出す動きにしていきたい。４つのなかで抜け落ちがちなのは、１）集落だ。数十年前までは「シマの子ども」といわれていたが、今ではまったく様変わりだ。集落という地域の中での、動きを作り出すことを、改めて重視していきたい。

そして、子ども・市民の動きを保障支援していくのが、自治体としての南城市の役割である。

では、それらの取組みにあたって、どんなことを大切にしていけばよいだろうか。

１）多様性創造性　画一的枠組みからの卒業

現代は、画一的とは対照的な多様性を大切にしなければならない時だ。多様なありようが、南城市内でも広がっている。多様な人々が、市内で生活している。多様な移住者も増えている。とくに子育て真っ最中の若い世代がそうだ。

ところで、「郷に入りては、郷に従え」という言葉が、かつてあった。転校生が「変わっている」ということでいじめられたことがよくあった。だが、いまでは、その「郷」そのものが大きく変わっている（南城市については、このブログの中の、１０月２８日以降の「南城論」の記事を参照)。劇的といえるほどだ。そこで、世代間の感覚や習慣の違いから、小さなトラブルがよくある。加えて、多様な人々が移住してきた。今や、南城市人口のかなりの部分を占める新興団地やアパート・マンション住民は、多様さを持ちつつ、南城市で生活し、つながりながら、新しい「郷」を作りつつある。

そして、必要なのは、劇的変化のなかで、「郷」のありよう自体を作り出していく営みだ。そこに生活する多様な人々がつながりあって、新たな「郷」を作る、そういう時代なのだ。無論「こどものまち」もそうなのだ。

と同時に、他の市町村に「右にならえ」式の画一的なものに収まってはならない。「南城市らしい」ものを作り出すことが重要だ。まずはこの宣言を作り出す過程をそうしたものにする必要がある。

ところで、大量生産大量消費を中心思考にした画一的なものに固守する時代は終わりを告げて、もう３０年が経過する。そして、多様性を尊重しつつ創造性が重視される時代へと移行してきた。一つの基準だけで序列を決め、勝敗を決めるようなありようから、「さようなら」をする必要がある。世界各地は、そこから抜け出るための取り組みを蓄積してきた。

多様性は、異なることでバラバラになるととらえるのではなく、異なるものが集まることで豊かになり、異なる者同士が、からみあって作業することで、新たな豊かさを創り出すということで、多様性と創造性とを結びつけてとらえたい。

５．１１月１３日　格差・貧困からの卒業　閉鎖性を打ち破る

２）多様性　格差・貧困からの卒業　　自己責任論ではなく、自己決定を

多様性をつくりだすといっても、その基盤が保障される必要がある。「子どもの貧困」は、その基盤が保障されていないことだ。「自己責任」という言葉を、ここ２０年以上よく耳にする。しかし、「子どもの貧困」を子どもの自己責任にするのは、暴論だ。私たちが追求すべきなのは、自己責任ではなくて、自己決定できる力量、創造できる力量を子どもに育て、その出発点となる基盤を保障することだ。そうした基盤を保障しない貧困や格差から卒業することが課題となっているのだ。

格差・貧困からの卒業をすすめる中心役割は社会であるが、強大な権限を握る政府の責任は限りなく大きい。とはいっても、施策の末端にあり、現場でもある自治体としての南城市の役割は、政府に権限の大部分を握られていると言っても、具体的な施策の展開においては、大きい。

しかし、貧困・格差が見えなくしている構図が広く存在している。その一つは、次に述べる閉鎖性だ。

３）閉鎖性の打破

格差・貧困は経済上だけでなく、つながりにもあることを見落としていけない。かつて沖縄は経済的に困難であっても、つながりの豊かさでカバーしていると言われたことがある。しかし、沖縄にあっても、そのつながりが薄くなっていること、つまり閉鎖性を危惧する指摘があちこちでなされている。

「自己責任」論は、子ども自身だけでなく、親・保護者にもいわれており、そのことが、子どもや親・保護者を閉鎖的にしがちである。もう一つ留意しなくてはならないのは、子どもを所有物のように見なす親・保護者が増えていることだ。「自己責任」論は、それを強めがちだ。子どもが何か困難をもつと、それを親の責任だとしてとらえ、親・保護者の責任を追求しようとする動きが強い。それが、子どもと親・保護者の閉鎖性を強めがちで、孤立気味の子どもを育ててしまう。そして、閉鎖性が強い中で、いじめ、虐待が生まれ、増幅されやすい。だから、いじめ・虐待は、子どもや親・保護者の「自己責任」を追求する程、発生しやすいことをみておかなければならない。子ども・親・保護者とのつながりを増やし強める中で、先に述べた、１）集落、２）家族、３）個人、４）関係諸組織・諸施設などがつながりあって、共同で子ども･家族の困難に取り組んでいくことこそが重要なのだ。

子どもを、子ども本人自身・家族・集落・南城市の宝物として育てていくことが基本なのだ。広く深いつながりをもつ子どもは、自分自身をよく見つめ掘り下げ高める行動を進めていくことができる。

６．１１月２０日　**世界とつながり、地元南城とともに育つ子ども**

４）世界を見据え、世界とつながり、地元南城とともに育つ子どもを育てる

閉鎖性を打ち破るには、開放性を持つことが必要だ。それは、子どもだけでなく、親・保護者も地域も関係機関施設にも必要なことだ。それは、世界を見据え、世界とつながるということだ。南城市には、移民・出稼ぎ・就職などで海外に出かけた人が多い。そうした人が、世界のウチナーンチュ大会などを機に、地元南城とつながることが多い。そして、Uターンする人も多い。と同時に、海外県外から南城を訪問し、それをきっかけにして、南城とつながり、南城に移住する人も多い。

そういう点で、南城は、世界を見据え世界とつながる街であり、と同時に、南城という地元を愛し、地元と共に育っていく人が多い街だ。子どもたちにも、世界を見据え、世界とつながり、地元と共に育つことを期待したい。

しかし、残念ながら、地元のことを知らない子どもたちが、余りにも多い。それは学校も含めて大人が、地元のことをほとんど教えていないからでもある。また、地元のことを、世界とつながる素晴らしさを持つ地域として誇ることが弱いこともあろう。

１９６０年代のことだが、日本各地の農村から都市へと大量に若者が移動した時代に、ある校長は「村を捨てる学力」か「村を育てる学力」か、と問いかけた。同じ問いを南城の教育関係者にも問いかける必要があるだろう。

その点で、南城を見ると、子どもたちが南城のことを学ぶことは、大変少ない。ここで、改めて問い直してみる必要があるだろう。「子どもたちは、南城という地域に誇りをもっているだろうか」「子ども達が南城の外に出た時に、南城を誇りをもって語ることができるだろうか」と。

１９６０年代から、南城市域から中卒高卒大卒で「出ていった」若者は大量だ。年によっては、大半が出ていったこともあろう。半数が残れば、「すごい」と言われるような年があったかもしれない。学校を出て再び戻り、ここで働いた人もいるだろう。３０代以降になってＵターンした人もいるだろう。配偶者を連れて戻ってきた人も多いだろう。

しかしながら、かなり多くの方が戻ってきていない。その実数さえつかめていないのが現状だろう。

外に出ていくことも、多いだろう。重要なのは、出ていった先で、南城という地域を誇りをもって語り、出先の地域と南城との「架け橋」としての役目がどれだけ果たせたるかどうかだ。世界のウチナーンチュ大会に集まる世界各地からの南城地域出身者が、先駆的な「架け橋」役割を果たしていることに注目したい。

そうしたことが成立するためには、子どものときに、南城地域にかかわることの知識・思考・体験・感動をどれだけもっているかが大きくかかわるだろう。

小学校でいうと、生活科、総合学習、地域学習（理科　社会）が足掛かりになるだろう。さらに『南城科』を設置することへのステップにしたい。

中学校でいうと、総合学習などに加えて「南城」部活をおきたい。かつて全国の中学校にあって郷土研究部の南城版だ。校外で、「塾南城」（「南城塾」）があってもいいだろう。さらに、南城高校や南城大学を従来の規格とは異なる形でも、存在させたい。そして、南城研究所での南城学研究の展開にも期待したい。

７．１１月２４日　調査データから読めるもの　今後の調査の課題と方法

１０月１５日の第一回委員会で配布された「南城市子ども・子育て支援に関する現状把握及びニーズ調査結果報告書」についてコメントしよう。

この調査は、２０１９年２～３月に実施されたもので、報告書には、２００９年調査、２０１３年調査のデータとの比較も入っていて、とても有意義なものだ。

調査は、子育てにかかわる保護者を対象にしたものだけに、「子育て支援」に求められるものに焦点化された、わかりやすいものだ。たとえば、母親の就労率が、８５．２％にまで上昇していること、就労希望率は、９２．８％にまで上昇していること。学童保育・保育園・児童館・公園などの充実拡充などへの要求が高いことなどである。

無論、「こどものまち」宣言というと、広い分野にわたる。「子育て支援」というと、そこに限定されたものになるので、これらの調査を基盤に、さらに「こどものまち」宣言にふさわしい調査が展開されていくことが期待される。また、上記調査がアンケートによるものなので、数量上の把握が中心になっている。ではあるが、自由記述回答が多く、かつ興味深い点が注目される。それだけ回答者の期待が高いとみたい。

数量上のデータが多いことについて、委員会では、個別のケースにあたって、どのような課題に直面しているのか、どのような取り組みがあるのか、どのような取り組みが必要なのか、などを明らかにしていく調査を期待される発言が続出した。

それらを踏まえて、調査の発展にむけての、私なりの意見を書いていこう。

１）アンケートの統計的調査でいうと、子どもが置かれた状況（経済、家族構成など）の差異と要求の差異とのクロス集計。

２）基礎データとして、産業構造調査の活用。勤務地が市内か市外か。子どもの人口の推移。進路選択調査など。１５~２５歳の転出入調査。

３）統計調査を基盤にしつつ、個別ケースの聞き取り調査が重要になる。なかなか難しいとの声もあるが、委員のほとんどが、子どもにかかわる専門的業務をしているので、そこで出会うケースをより深めるような聞き取り調査。あるいは、専門職員など関係者からの聞き取り調査。その際に、統計でも浮かび出るような内容とは別に、困難な事態への取組みの場合を例にとって言うと、困難にたちいたった原因と経過、そこから脱却していく営み、その過程で見いだされる教訓などを明らかにしたい。それらは、子ども達自身、保護者自身、関係者自身の活動への参考になるだろうし、施策立案のヒントを提出するだろう。

４）小学年高学年以上には、直接、子どもたちから聞き取ることが不可欠である。それは、個別の形もあるだろうし、ワークショップ形式で聞き取り、練り上げることもあろう。

５）調査内容として、子どもたちがやりがいを感じている活動、将来の見通し、それらにかかわって、どんなことを学びたいか、という学習要求などもあろう。

６）南城市イメージ（そして、南城市の課題）についての調査

７）優れた実践例の調査　南城物語の掘り出し　英雄ではなく、普通の人の物語

とどのつまりは、調査ではなく実践である。優れた実践例を浮かび上がらせ、市民が広く共有するものとなれば、実践のうねりが生まれてくるだろう。

８．１１月 29 日　こどもたちがつくる、こどもたちの居場所と活躍場

「こどものまち」は、南城市全域がこどもたちが生活し育つ居場所と活躍場になるということだ。それには、家、そして学校・保育園・幼稚園・諸施設といった生活場・教育場といったものだけでなく、それ以外にも、公園・道・森・お店・公民館といった、子どもだけでなく多様な市民が活用している多様な場を含んでいる。

以上のものを見るとき、多くが、「こどものために」大人が用意したものであり、子ども自身がつくることにかかわったものが、とても少ないことが気になる。だから、こどもがほとんど遊ばないで放置されたままの遊具が公園に残されていたりする。こどものためのものでありながら、大人の希望と都合で、つまり「大人目線」「予算目線」で選択決定されるものがあったりもする。

「こどものために大人が用意した場」では、大人の決めた基準にこどもが従うことが、こどもの成長だという考え方が忍び込む。そして、こどもが、大人の決めたとおりに大人の言うなりにすることが、成長することだということに行きついてしまう。その結果、こどもは、自分の行動に自信・責任をもてずに大人になる。

人間だれしも、大人の部分とこどもの部分とをあわせもっている。だから、大人になっても、子どもっぽさを見せたりする。子どもだって、大人っぽさをみせたりする。７０歳代になっても、「自分は若い」と自慢する人も多い。

いずれの場合も、自分なりの現在の自分を引き受けて自信と責任を持つことが大切だ。大人の言うなりにして

きた子どもが大人になった場合、指示待ち人間であり、いつまでも、自信・責任がもてずに、大人になりきれない。

ということで、こどもの居場所・活躍場も、こどもたち自身で作っていくことが大切だ。前に述べたリンカーンの言葉を借りれば、「こどもたちによる」居場所・活躍場つくりである。

こどもたち自身で作っていくことを支えるのが大人の役目であり、行政の役目だ。だからあえていうと、「子育て支援」ではなくて、「子どもの自己創造・自分育て支援」なのである。

たとえば、保育所を作る時、「子育てをするお母さんを支援するために」と言われることがあるが、まず何よりも、こどもたち自身のためであり、こどもの自分育てを支援するためである。そのことが、子育て支援にもつながると考えるるのだ。

ところが、こどもを抱え込み、こどもは自分の所有物だというような感覚をもつ親・保護者を見かけることがある。こどもと一体化している親・保護者はその例である。それは、こどもを大人へと成長させない危険をはらむと同時に、親・保護者自身が成長せずに、いつまでも「親だ保護者だ」と言い張り、こどもにはうっとうしい親になる危険をはらむ。こどもが成長して自立していくことは、親・保護者が子育てを卒業して自立していくことと並行する。親離れだけでなく子離れが不可欠なのだ。

９．１２月４日　こどもたち自身が多様な場を作り出しつつ、豊かになる

こどもは親の所有物という感覚は、「親の子ども」以外のありようをふさいでしまう。こどもは、〇〇保育園のこどもであり、〇〇小学校のこどもであり、南城のこどもであり、沖縄の子どもであり、世界人類のこどもなのだ。

思い出したいことは、数十年前のこのあたり一帯のこどもたちは、「シマの子ども」であったことである。シマ、つまり集落一帯で飛び回って遊び、働き、シマ住民の大人と子どもと馴染みになって育ってきた。まずいことをしてしまった時、自分の親でなくても、顔見知りの大人が対応してくれた（叱ってくれた等）という話は、よく聞く。

こんな多様なつながりの中のこどもであり、そのなかでこどもは成長してきた。今の６０歳代以上は、皆そうだった。５０代４０代でも、少しだとしても、そうした思い出を持つ人がいるだろう。

ところが、近年は、家族・保育園・学校などに過剰依存しているのではないか、と心配になるこどもが増えている。対照的に、それ以外の世界との付き合いがとても少ないのだ。そして、商品や情報などの既製品のモノ・コトとの付き合いは激増しているのだ。そのために、それ以外の場で他人に会うと、「人見知り」してしまうのだ。会話を普通にかわす人数も減っている。

大学でワークショップ型授業をしていると、「私は人見知りです」と言って消極的になる受講生が、学校で「模範生街道」を歩んできた教職志望者が多いことに気づいて驚いたことがある。そうしたタイプの学生は「指示待ち」傾向が強くて、自分の頭で考え行動する創造性が、大学のなかでそしてワークショップ型の授業の中で、縮こまっている。それを変えていかないと、将来の学校教育が心配になる。創造的人材・人間関係豊かな人材を求める世界的な動向と逆行しているからだ。

子どもだけでなく大人も、過剰依存や、依存症になる人が増えている。子どもも、親を含めた大人もモノやコトに対する過剰依存から卒業して、つながりを増やし、多様な活動に取り組む中で、創造性を高め、自分を育てていくことが求められている。

そのためには、子ども達自身がつくっていくことを基本にする、子どもが育つ場や機会を豊かにする必要がある。大人がすべて用意して、大人の思う通りに行動する場や機会では、どうしようもない。すでに存在している場（施設・機関）や機会を、このような方向に切り替えて発展させるとともに、新たな場と機会をこどもたちとともに作っていくことが求められる。子ども達にサービスを提供するだけでは、子ども達は成長しきれない。子ども達自身が作っていくことが肝心なのだ。

１０．１２月８日　子どもがつくる活躍場・居場所　子どもと大人との関係

かつての子ども達が作った活躍場・居場所には、森・海などの自然、そして大人がつくった道・公民館・広場などがある。それらを、こどもたちなりに作り変えて（形を変えなくても、意味を変えて)、新たなものを作り出した。

それらは、大人の目の届かない「隙間（すきま)」としての場、よく言われる言葉としては、「たまり場」「秘密基地」なのだ。ところが、現在のこどもの居場所・活躍場は、大人の目が届きすぎ、大人に囲われ過ぎかもしれない。

大人に求められるのは、大人が構想する通りに、こどもが動くようにするのではなくて、こどもの行動の豊かさ・多様な変化、ときには激しさを伴うが、それを許容し、変化に対応することである。最低限の安全を保障しつつ、こどもを見守ることである。それは、大人側のかなり豊かな力量が必要とされる。安全とは、がけ崩れなどの災害、ハブの出現などの危険の防止などが中心となる。といっても、７０歳代後半の方は「森などでも、こどもたちが動き回ると、ハブの方が逃げて出てこなかった」と語るが。

そして、こどもの側からの「援助」の申し出があった際に対応できる体制を持つことである。

そのためには、数少ない大人の対応だけでは無理である。こどもに出会う大人すべての対応が求められる。子どもを監視する眼ではなく、子どもの安全と成長を見つめ見守る眼を、広汎な大人が持つ必要がある。それは、一対一の子どもと大人の関係ではない。多数の子どもと多数の大人との関係である。

そして、密着した関係ではなく、適度な距離を持った関係である。適度な距離とは、互いに相手が存在していると気づくか気づかないか微妙な距離である。過保護とかネグレクトの関係は、子どもに密着するか、子どもと全くはなれてしまう関係である。また、一対一関係の場合に生じやすい関係である。そこでは、愛情過多の関係、暴力的な関係が生じやすい。

「シマのこども」のころ、こどもは家業家事でかなり働き忙しかったが、その隙間のなかで、自分で創造的に遊んだ。自然とのつきあいが、現在とは格段と深かった。森で海で道で、いろんな遊びを作って遊んだ。山羊の餌の草刈をしながら、遊びを見つけ作った。

今の子どもたちには、大人から沢山の遊びが提供されている。既製品の遊びが多すぎるぐらいある。勉強・おけいこごとで、遊ぶ時間が足らないと叫ぶこどももいるようだ。

こどもに遊びや学びの場・機会をたくさん提供されているが、それが「こどものために」大人が提供するもの

になり、「こども自身が作る」ものではなく、それだけにかえって、こどもを「指示待ち人間」化していないか、と疑う必要がありそうだ。

１１．１２月１２日　こども・まち・南城市という三つのキーワード

「南城市こどものまち」には、三つのキーワードが含まれている。

１）「こども」　これまでも述べてきたように、「こどもによる」を中軸において考える事

２）「まち」「まちをつくる」「まちをおこす」　こどもと大人のための、こどもと大人によるまち。両者共同の場合もあるし、こどもたちだけでのこともあり、大人だけのこともある。「こどもがまちをつくる」という視点が重要。

この「まち」には、南城市全体を指すこともあれば、南城市に７１ある集落の各々を指すこともあり、「身近にあるまち」を指すこともあろう。

「まちづくり」「まちおこし」は、すでにいろいろなところで取り組まれている。最近取り組み始めた所も多い。しかし、それらにも「こども」がかかわる所は少なかった。そこに、「こども」をかかわらせようというものだから、大人の側の思い切った発想の転換、取り組みかたの転換が求められる。「こども」側にしても、「そんなことは大人の問題だ」「将来は、ここから出ていくかもしれないから、かかわるのは面倒だ」などと思って、距離を置くかもしれない。

いずれにしても、新しい発想・取り組みが必要だ。しばらくは、助走期間になるかもしれない。この策定過程が助走に最適になるようにしたい。

３）「南城市」　「南城市らしいこどものまちづくり」ということだ。当然、この宣言策定も、そうありたい。

南城市も誕生後１３～１４年がたち、「思春期」に入った。これからどう暮らして成長していくのか、を子ども達とともに、追求したい。いいかえると、子どもが育っていくことと、地域・南城が育っていくこととが並行するような関係をつくるのだ。

子どもが「まちつくり」（地域づくり）に参加する経験が大人のころまで続くと、「地元に生きつつ大人になるこども」になるというわけだ。

※　１０年先・２０年先を考えると、「高齢者とともに作る南城市」ということを見据える必要があろう。子ども・成人・高齢者の三者共同、ということだ。

１２．１２月１６日　大人による子どものための組織の変化

１９５０～１９６０年代に盛んであった字幼稚園・教育隣組・学事奨励会が１９７０年代に消え去った。現在、５０歳代半ば以上の人には、字幼稚園に通った記憶を持っている人が多い。字公民館で、字の子どもたちを相手に、１～２名の「先生」が、遊びを中心に、時には歌ったり、字の読み書きを教えたりしていた。米軍から

回ってきた脱脂粉乳を近所のおばあたちの助けを借りながら、お湯で溶かし、ミルクにして飲まさせたりもした。「先生」の給料は、字が出した。少額だが、「授業料」を取ることもあった。

これが、１９７０年代半ばになって、各小学校につくられた村立幼稚園へと、事実上統合されていった。沖縄における幼稚園就園率が図抜けて高かったのも、字幼稚園のこうした歴史があるからだ。

当時は、農業が中心の集落が多く、字幼稚園に通っていることで、母親も畑仕事に精を出し，昼になると自宅に帰り昼食を用意し、帰宅した子どもも含めて、家族で食事するという光景が見られたはずだ。

そして、子どもが小中学生になると、これまた字公民館でもたれる学事奨励会に参加し、記念品と励ましの言葉をもらい、進学する生徒には字奨学金が与えられた。そして、教育隣組が作られて、近隣の子どもたちの学習援助や躾などを、親たちが共同でおこなったりもした。

これらの組織も、１９７０年代には消えていき、代わって子ども会、字ＰＴＡが登場してくる。子ども会では、夏休みになれば、バーベキューをしたり、ごみ拾いやお楽しみ会をする。十五夜などの字行事では出し物を披露したりする。

かつて主として農業である家業での業務だけでなく、家事手伝いも含めて、こどもたちが家族の仕事のなかで重要な役割を果たしていた。しかし、この時期に、その仕事が減少ないしは皆無状態へと移っていく。

そして１９８０年代以降になると、子ども達の世界に、テレビだけでなく、ゲームなどの世界が深く浸透し、地域の屋外で遊ぶ子どもが減ってくる。そのなかで、スポーツチーム、学習塾、お稽古事塾が登場し広がっていく。代表的なものとしては、算盤・習字・野球・空手・サッカー・踊などがある。

こうして、地域まるごと子どもが集まって何かをすることが激減し、集落にかかわりなく、多様な地域から来るこどもが、個人として参加する場が増えてくる。そのためもあって、子どもたち相互の人間関係が薄れてくる。

こうして、子どもにとっては、地域とのつながりが薄れ、家族単位の世界とマスメディアを通しての世界、そして塾やスポーツなどを通しての世界が比重を高めてくる。そうしたつながりさえ薄いこどもたちは、孤立を深め、重い困難をもつこともみられるようになる。

１３．１２月２０日　２０００年代に入って現れてきたこどもの変化

前回述べたこどもを取り巻く環境の変化のなかで、子どもにとって今まで以上に、学校が生活上人生上占める位置が大きくなっていく。家庭教育さえも学校を補う役割を強めていく。学校の宿題を保護者がチェックすることが、「家庭教育？」の重要な役目だと感じさせる傾向も生まれてくる。地域独自どころか家庭独自の教育上の役割が縮小していく。

こうした変化が、１９７０～１９９０年代に進むが、その結果、２０００年代以降あらわになってきたことをまとめておこう。

１）こどもの活躍場所・居場所の変化。森・海などの自然の減少。公園・道なども減少。住宅や塾など建物の中の増大。

２）お金が必要なものの比率の増大。

３）受験で成功を収めることが重視され、受験が大きな焦点となる。

４）遊びも含めて、こどもたち自身が作り出したものではなく、大人が用意したもので子どもたちが生活することへと、移行することが増える。
５）児童館のように、大人が用意するが、こどもたち自身がつくっていける場もでき始める。「秘密基地」や居場所をつくることへの期待。図書室もそうした役割が期待されるが、不十分な点が多い。図書館がないことを問題にする声もある。
６）部活には、４）と５）の双方の性格を持つものが多いが、どちらかというと、４）の比率が高い。部活への期待と並行する部活離れ。学校外での多様な活動の広がり。
７）近隣の要請、支援を受けつつ、有志の大人が始める、こどものための施設・組織が増えていく。保育園、学童クラブの多くが、その典型例。現代風にいうと、起業ともいえよう。
８）こどものなかの新たな方向への兆しが出てくるが、それを大人が見出して前向きにとらえきれない状況もある。
９）人間関係の希薄化と言われ、孤立化がすすんでいるといわれるが、こどもたち自身のやり方でのつながりをつくりだす動きがあるという指摘。たとえば、一人で閉じこもってゲームをするのではなく、人間関係を作りつつゲームをしている。
１０）バーチャルな世界とリアルな世界とを絡めて追求する子供たちの試みの中に、新たな可能性を見いだせるという考え方。これまでの見方では、理解できないという声もある。
１１）「すごい技」を、ゲーム・工作・美術音楽表現などで発揮する子ども。モデルに合わせるのではなく、創作として。
１２）「発達障害」、ないしは「発達障害」かどうか微妙なグレーゾーンのこどもが増えているのではないか、という印象を持つ関係者の声が聞こえる。他方で、それらは、対応できない大人の側の問題なのかもしれないとの声や、「発達障害」と過剰に見てしまう問題なのかもしれないとの声も聞こえる。

１４．１２月２４日　「こどものまち」を作り出す場・組織

「こどものまち」を作り出す場・組織について考えよう。これには、南城市全体、各集落、身近な「まち」のそれぞれで考えたい。

１）意思決定、実行推進組織

アンケート、インタビュー、ワークショップ、投票、子ども議会（大人の議会＝南城市議会と連携共同しながら），南城市子ども会議，南城市親子会議

一時的なものではなく、恒常的なものとして。学校の生徒会児童会をつなぐものがあってよい。１０年の歴史をもつ「あがいてぃーだ」プラン審査会は、一つの足掛かり。

全国的な広がりを見せ始めている子ども議会などは、南城市らしい形で早めに着手したい。

２）子どもの活躍場・居場所

子どもの活躍場・居場所を大人が用意する、というよりも、こどもたちが自分たちでつくることを保障し支援する形で、大人が活躍し、行政が活躍する。場を大人・行政が提供し、子どもたちで設計施工し、管理運営して

いく。長期固定式なものではなく、随時変えられるような柔軟なものとして。一年に一回、季節ごとに変える。

例　秘密基地　子どもの城　子どもグスク　キッズ会　子どもカフェ　子ども食堂　公園　森　道路　空き地・広場　遊び場　学習場所　発見探求場　プレイパーク　「こどものひろば」　「こどものもり」

※ミュンヘンにはじまる「こどものまち」の世界的な動向は、参考になる。

集落ごとにある子ども会（今ではない所が多いが）が、レクなどだけでなく、集落の中で集落にかかわる何か仕事をする（役割をとる）ことで活躍する企画を考えたい。

小中学校の生徒会児童会、学級、部活、委員会などが展開する活動を、市役所大会議室（廊下、ホールでもよい）に展示する。優秀活動に「南城市子ども企画大賞」を与える。

身近な「まち」にある場としては、子ども食堂のような上記例のいくつかがそうだ。テレビ報道にも登場する「駄菓子屋さん」もその一つだろう。街角子ども掲示板があってもよいだろう。スーパーでの子ども作品展もそうしたものになりやすいだろう。そこのコメント欄があったり、その場で作品作成機会があれば、やりとりが生まれ、「まちと子ども」の討論会になるだろう。

諸活動には、一日だけの特別なイベント型と日常型（常設型）とがあるが、両者の要素を組み込んだ企画を考えたほうがよいだろう。そのためには、短期企画型が鍵になるだろう。たとえば、３日間企画は手ごろだろう。全国各地のこどものまち型がそうだ。子ども作品展のように、一週間企画などもよい。そうした企画を間歇泉のように、３ヶ月に一回開くというのもあるだろう。

１５．１２月２８日　こどもまちおこしアイデア

前回までに何度か書いた「こどもまちおこし」の活動アイデアを並べてみよう。

１）「まちおこし子ども会議」　「まちおこし子ども大会」

本格的にやるのが大変となれば、「１０年後の南城を描く会」「子どもが選ぶ南城市自慢ベストテン総選挙」「大募集、南城市にこんなものあれば」といったものがアクセスしやすいだろう。

２）集落ドロケイごっこ。集落鬼ごっこ。現在の３０代４０代の方々がやったという。集落の道路・空き地・緑地・建物の内外をかけめぐる遊びだ。それを通して、大人とも出会い、まさに「シマの子ども」として成長していく。

３）遊びの創造。遊び大会の創設運営。

大人が講師を務める会もあってもよいが、それだけでなく子どもが講師を務める会、さらにはお互いに遊びを紹介し合う会、会場で遊びを造る会など、いろいろな形があろう。会場に、いくつものセクションが作られて、好きなところで遊びながら、遊び交流をするのもいいだろう。

４）マップつくり

子どもたちが（ときに大人たちも加えて）地図を作る。本格的な地図でもいいし、スケッチ風でもいい。プリコラージュでもいい。大きな紙か平面に描いていく。撮影した写真を貼り付けるのもいい。一人でもいいが、何人も居たほうが、作りやすいだろう。

テーマはいろいろとあるだろう。

防災（危ないところ　逃げるところ　対策すべきところ）　集落の歴史（こんなお宝発見）　地域の人たち「こんなすごい人たち発見」　生きもの（家畜・昆虫・鳥・・・）

マップだけでなく、物語を作る。絵本をつくるのもよい。

５）子ども（親子）歩行者天国を子ども達が設計施行する。

「〇〇な人を探す会」「ウォークラリー南城道路めぐり」「道路を美しく飾る会」「道路迷路」・・・いろいろなアイデアがありそうだ。

６）道路つくり　自動車が通る道は、数十年前に始まったもので、もしかすると、時代が変わり賞味期限が短期間になるかもしれない。それ以前は、大人が歩き運搬し子どもが遊ぶ場だった。２０世紀前半に地域住民自身が道を造ったと同様に、大人とこどもがいっしょに作る道があってよい。花いっぱいのコンテナをうまく並べるのも面白いだろう。なかゆくい・ユンタク道をつくろう、も面白そう。

１６．2000 年 1 月 1 日　　正月行事　拡散して視野を広げ、焦点を絞っていく

この地域の方々は、かつて正月に集落のカー（井戸）から若水を汲んで、新年と家族・集落が健康で新たな一年を送れるよう祈った。

今でも、こうした行事をする人がいるが、しない人の方が多数派だろうか。こういう年中行事そのものがほとんどなく、それに代わって、なぜかクリスマスとかハローウィンとかが盛んだ。

それだけに、かつての年中行事を引継ぎつつも、新たな年中行事を作り出していくこともいいだろう。集落いっせいでなくてもいい。家族ごとに、あるいは個人ごとに独自なものでもいいから、作り出していきたい。初日の出を思い思いの場で見る（拝む）のもいいだろう。仕事おこし（ハチウクシ）などを書き初めの形ではじめるのもいいだろう。集落によっては、マラソン大会をするならわしを持っているところもある。

本連載も、ようやく道半ば、「なかゆくい」のころだ。この後、南城のたくさんの子ども・大人の声を反映させて充実した連載後半にしていきたい。そのことで、「こどものまち」宣言を作る作業にプラスになることを期待する。

年末の委員会で、「沢山の課題が連続して登場してきて、施策にしていくには、焦点化が必要ではないか」との声が出た。その通りだ。といっても、現在は、焦点を絞る前に、どんな課題があるのかを、どんどん掘り起こして、視野をうんと広げる作業を進める段階、いってみれば拡散思考の段階であり、次回あたりから、それらを集約し焦点化して、集中思考する過程に入っていくことになるだろう。

そのための調査作業は、業務委託先とともにすすめているアンケート調査や聞き取りとして行っていることだ。私も、数回聞き取りに同席したが、知らないことの続出だ。

そこで、２０数カ所にわたって聞き取りをしている相手をいくつか紹介しよう。

家庭相談員、保育支援員、心理士、母子寡婦会、なんじぃアスリートクラブ、子育てサークル、ファミリーサポートセンター、養護教諭、スクールソーシャルワーカー、発達障害サポート、子ども食堂、児童委員、児童養護施設・・・

視野を広げることで見えてきたものを、この連載でも、次回からしばらく見ていくことにしよう。

１７．1月5日　人口増・子ども増の南城市

調査の中間報告から注目点をいくつか紹介しよう。

１５年近く前に人口４万人ほどで始まった南城市が人口増であることは、よく知られている。１７歳以下の子どもたちも増加している。

２０１４年　８３５１人　　２０１９年　８９９５人　　２０２４年　９９３３（推計値）

０～５歳に絞ると

２０１４年　２６３４人　　２０１９年　３００１人　　２０２４年　３１７０（推計値）

※　２０２１年以降は横ばい

合計特殊出生率

２００９年　１．５７　　２０１４年　１．６６　　２０１９年　１．９９　　２０２４年　１．９８（推計値）

少子高齢化傾向の中、若い層が比較的多い点で、数少ない事例といえよう。沖縄県全体も少子高齢化傾向がゆるやかといわれているが、そのなかでも目立つ数字だろう。

多い若い世代の中で、働く女性が多いのが注目点だが、以下は２０１５年調査の数字だ。

母親の就労率が、８５．２％（子どもが就学前）　８７．５％（子どもが小学生）

母親の就労希望率が、９２．８％（就学前）　９２．１％（小学生）　というのも目立つ数字だ。

女性が就労するのは当たり前だという感覚が、昔から広く存在してきたことの反映でもあろう。夫は職場、妻は家事という発想は、南城に限らず沖縄では大変な少数派であったのだ。それだけに、親だけで子育てするのではなく、広く社会のなかで共同で育てるという、子育ての「社会化」「共同化」が、「シマの子ども」時代から続いているととらえてはどうだろうか。

そして、そのあたりに注目すべき子育て実践が大量に存在しているのではなかろうか。公立・認可私立・無認可を問わず沢山の保育園がつくられてきたのが、それを示している。加えて、この１０年間で学童クラブが倍増以上の増加であることも、それを反映しているといえよう。

１８．１月１２日　南城市外が出身地である親が多い子どもたち

前回のデータ紹介・コメントの続き。

もう一つ、２０１５年時点調査での注目点がある。田舎は、先祖代々そこで生まれ育った人が生活しているという、固定的閉鎖的イメージを持つ人が多い。しかし、次のデータは、それを完全に覆している。

就学前の子どもをもつ両親の出身地

父親　南城市５２．０％　沖縄本島３４．３％　離島２．７％　県外１０．３％　外国０．６％

母親　南城市４０．５％　沖縄本島４１．４％　離島３．０％　県外１４．１％　外国０．３％

５０数年前までは、同じ集落内同士での結婚が多かったが、その後、劇的に変化していく。異なる集落・市町村の人の結婚が普通になり、また、実家に三世代家族などをつくって生活する例が激減した。結果として、両親だけでなく子どもも流動性のなかで人生のスタートを切り、進学就職でどこかに移動し、そしてまたUターンすることもある事例が増加していることを、このデータは反映しているようだ。さらには、両親とも南城市に生育したものではなく、新たに移住して来て、子育てしている例が多いことを示唆しているようだ。

ということは、子育て世代が、自分たちで選んで南城市に移動してきたという事例がかなりあることを示している。そこには、Uターン例も多いだろう。親の一人が南城市出身で、配偶者と子どもを連れて、南城市で生活し始めた例が、近年とても多い。

どうして、これほど市外出身者が多いのだろうか。その分析は、簡単ではないが、いくつか推理できる要因はある。

１）両親のうちどちらかが、南城市内で生育し、進学・就職などのためにいったんは市外に出て、そこで配偶者を見つけ子どもを授かり、どこで暮らそうかという相談のなかで、出身地の南城にUターンすることにした。ここでUターンしたのが母親の場合が多いことに注目したい。父親はついてきたというわけで、私のようなウチナ―ムクがかなり多いのだ。

そして、父子、母子でUターンする例も多い。

２）親の生育地が南城ではなく、市外に住んでいたが、生活し子育てするうえで、南城市は条件がいいので、移住してきた。

その条件の良さとは

ａ　自然が豊かで、生活するうえでも、子どもにとってもよい。

ｂ　住宅価格が安価だし、田舎といっても、買い物などに不便を感じるようではない。

ｃ　保育園などが充実しており、学校はマンモスではなく、教育環境もよく、子育て環境が良い。

ｄ　人間関係ができやすく、大人も子どもも友達をつくりやすい

１９．１月１７日　つなげることがポイント　困難をもつ子ども

経済的困難、発達上の困難、人間関係上の困難などを抱えた子どもがかなりいるといわれるが、そうした事例が気づかれにくい点に注意を払う必要がある。当事者のなかには、人間関係が薄く、短期間で移動する例が多いために、周りに気づかれにくいことがあろう。人間関係が薄くて孤立気味であっても、そうした事例が多くて目立たない都市地域と南城とではかなり事情が異なる。そのため、南城では目立ちやすく、「居心地の悪さ」を感じて、引っ越してしまうことがあるかもしれない。田舎のオープンさが裏目に出てしまうのだ。

そして、困難へのサポートやサービスを受けることを「恥ずかしい」と感じさせてしまうのかもしれない。そうした事情があるとしたら、サービス提供を用意して待っているという対応ではうまくいかない。待っているというのではなく、当事者のところへ出かけるアウトリーチ型を取る必要が高いのだろう。それ以上に、当事者とサポーターとの共同作業型活動が重要だろう。さらに重要なのは、当事者たちが出会い、話し共同し合える場・機会をつくっていくことだろう。それをサポートすることが大切だろう。さらに当事者たちに限定せず、つながりをもてる可能性のあるもののなかに包み込むことが重要だろう。

そうしたことができやすい場・機会を増やす取り組みは始まっているが、それを質・量ともに一段と豊かにする必要があろう。その際、出入り自由な児童館、子育てサロン、広場などが重要な役目を果たすだろう。

それにしても、多様なこどもたちが集まり、出会い、生活する学校・保育園・学童クラブなどが重要な役目をはたすだろう。その時に重要なのは、個別の配慮・ケアをするにとどまらず、困難なこどもたちをつなげていく営みだ。というのは、つながって共同で取り組むという点が不足しているために孤立し、事態をより悪くする例が多いからだ。

そして、学校・保育園・学童クラブで、他の子どもたちとの関係をより広げ深くすることが指導支援のポイントとなる。その際、多様な子どもがかかわり合うことで、豊かさが生まれるという視点が欠かせない。一方的な関わり合いではないのだ。相互にかかわりあうことで相互に豊かになるのだ。

標準を設定して、それにすべての子どもたちを合わせようとする、日本の学校が１００年以上続けてきたスタイルが、画一的学校システムをつくり、困難を抱えている子どもを排除する原因の一つとなってきたが、そうしたやりかたから卒業するための取り組みが求められている。

２０．１月２２日　目に見える困難がないと思っている子どもたちのなかにある困難

前回述べた困難を抱える子ども達以外にも、多様な困難を抱える子どもがいる。ごく「普通」とみられる子どものなかには、抱えている困難で「人知れず」悩む例は多い。逆に当人はちっとも困難と感じないで、大きな困難を抱えている子どももいる。他にも、以下のように、いろいろだ。

繊細な感受性を持って、傷つきやすいこども

おもてでは強がりをいっているが、実は〇〇という困難を抱えている子ども

孤立して友達がいない「優等生」「優等生」だけに他の子どもから避けられてしまう

狭い世界では「お山の大将」だが、一歩外に出ると固まってしまう

テストの点数が高く難関大学に入ったが、「指示待ち人間」化しているために、自主性創造性が要求されて、自信喪失に陥る。

テスト学習は得意だが、人間関係となると固まってしまい、自分は「人見知り」なのだと思い込む。人間関係体験が薄すぎるためなのに。

エリートといわれながらも、テスト点数上の「エリート」であって、他者をリードする体験、自分で創造的に考えて作り出す体験が皆無に近いテスト型「エリート」

目立つわけでもなく、ややこしい困難を抱えるわけでもなく、「フツー」に生きているが、それだけで「可もなく不可もなく」であり、当人自身が自分の持つ価値を確認しきれていない。

自主的に集まって相談し共同活動をしていくクラブ、という性格がほとんどなく、特定ジャンルのスポーツ・音楽などのスキル向上を中心とするものになっている部活。郷土研究会、演劇部、社会研究部、ＩＴ部を見かけない。複数のジャンルに挑戦する総合的な部活はない。部活を自分たちで作る体験をもつ生徒はゼロに近い。部活を通して、自己創造していくことができていない子どもが多い。

１８歳選挙権の時代に、その準備態勢がほとんどできていないなか、若者の大量棄権が生まれている。

南城について学び考え活動する機会・場が、学校の中では極度に少ない。

世界的に見ると、大量生産大量消費時代が終わり、ベルトコンベア型生産要員を作り出すベルトコンベア型学習の時代は、３０年前に終わっているのに、過去の栄光にすがって、それを続けている傾向が濃い。

そこから、いかに卒業するかという課題に、現場から挑戦していく必要がある。「○○に追いつけ追い越せ」という体質は、１５０年以上前には成功を収めた。しかし、いまだに、そのやり方にすがっている「エリート」「リーダー」が多い。

２１．1月２７日　子どもの進路選択進路創造のなかでの南城／地元

１０代半ば（中学生）以降に焦点化してみよう。彼らがどういう進路を選択創造するかが中心事の一つである。子どもに「自分の将来像」を尋ねると、そのなかに南城／地元の影が薄いことが特徴になっていそうだ。それは、１９６０年代から広がった。現在の６０歳代後半から７０歳代前半の方々のころである。多くの人が家業である農業から離れて、別の進路を求めて進学就職していき、また、地元外の人と結婚して、南城／地元から離れていった。その一部には、後にＵターンする人もいたが、戻ってこなかった人も多い。

そうしたことが、この地域の大変化の進行と並行していた。地域の変化、社会の変化が個人の人生の変化としてあらわれたということでもある。だが、それを押しとどめようとする地元の動きは弱かった。むしろ、外に出て活躍し成功することを期待するのが主流であった。学校教育も地域で生きるありようを教えるよりも、外で活躍成功することを目標にして行われていたといえるほどであった。

ここでは、将来を考えるための身近で具体的な基盤が弱い。そのために、子どもたちは空想的世界を漂ってしまう。確定的な将来像は語れないが、なんらかの将来像を語る年頃。それをくりかえしバージョンアップしながら、将来像をつくっていく年頃なのに、そのための足がかりになるものが身近に見えないのだ。よく指摘されるが、働いている親の姿をイメージとして思い浮かべるが、そこでは、父親より母親の方がイメージの足がかりは得やすく、女生徒の方が男生徒よりも具体的であることが多そうだ。

そのため、小学生のころ、歌手・タレント、プロスポーツ選手になりたいという「空想に近い夢」を抱くこと

は大いにありうることだが、それを中学３年生や高校になっても語る生徒が多いのには、こうした背景がある。

進路決定が現実になる頃、若者本人そして親が希望したのは、経済的困難さの打開と安定した職業生活を送る事である。そのなかでも条件がもっともよいのは、医師・公務員・教員であった。それに続くのは看護師・保育士・心理職などの資格をとって就職する事であった。それらに経済的安定さを求めるだけでなく、やりがいも求めた。さらにできることなら、出身地からそれほど離れないことであった。

こうした進路決定の際には、友人知人との相談、親との相談が重要であった。１９６０年代から８０年代ごろまでは、学校が就職の世話をしたことがかなりあったが、その後学校経由の求人が減り、学校は主として、大学や専門学校への進学の世話になった。その際、本人希望も尊重するが、偏差値による進学先選びであった。学校によっては、本人希望を脇に置いて、学校の進学実績を優先する例も見かけた。

こうしたなかで、起業を進路候補にあげることは、ほとんど聞かれなかった。就職と言えば、「雇われる勤め人」というイメージだったのである。

こうした形が数十年続いて、現在に至った。ところが、近年になって、このような在り方でいいのか、という問い直しが広がっている。若者の中にも、いわゆる県内志向地元志向が広がり、大都市志向は弱まっている。進学の場合は、さらに経済的条件が「県外志向」を狭めている。大学在学中の経費負担が可能である経済力をもつ親は多くない。頼りたい奨学金も、貸与型（事実上の教育ローン）が大半を占めている。

２２．２月１日　学校と福祉　学校と地域

前回書いたことは消極的理由である。積極的に県内志向、とくに地元志向を育む要因が広がっているわけではない。それでも、沖縄／地元への愛着を語る声は年々大きくなっているようだ。それが具体的な将来イメージ形成とつながりきれない状況があるようだ。

別の角度からいうと、大人たちが追求している「シマおこし」「まちおこし」「地元おこし」が、若者の進路を考えることと結びつけることが弱い歴史が長く続いた。とくに、若者の仕事起こしと結び付けられないために、地元に残りたい若者が、その希望を満たせていないともいえよう。

こどものまち宣言策定への準備のために、市内のこどもにかかわる多様な組織の方々にインタビューをした。私も、そのなかのいくつかに同行した。その際に、学校関係者以外から、学校への注文が多かったことに驚かせられた。不登校状態にあった子どもが久々に登校した際に、ある教員の言葉（いった本人はフツ―のつもりだったろうが、当事者にとっては傷つく言葉）を発したために、再び登校しなくなったという事例が出された。

これまで、こどもの教育については、全能であるかのように見られてきた、ないしは見てきた学校が、そうでもない状況にあることを、改めて気づかされる。「こうあるべきだ」という言葉に強く囚われ、縛られ過ぎてきた学校の歴史的体質が、そうした発言を生み出したようだ。それに対して、「そうでもない」という当たり前のとらえ方が広がっている。

そうした事例は、学校と福祉とが出会う時に起こりやすいのが、現在の特徴であろう。といっても、福祉関係者のなかでも、困難を抱えた人に対する不適切な対応に起因する最近の不祥事のなかには、そうした「こうあるべきだ」に囚われた発想が潜在していることがある。

私は、３０年前から、不登校は、子どもと学校とのミスマッチングであり、子どもに「変わる」ようを求めることでは事態は改善せず、学校自体が変わることが求められていることを指摘してきた。そして、そうした考えが広がりつつある。といっても、歩みは遅い。

もう一つ、学校と地域の関係についてだが、学校でいい成績を収めれば収めるほど、地域から出ていくことになるという構図が１００年以上続いてきた。最近になって、地域との結びつきが強調され、多様な試みがおこなわれている。大人が学校に出かけて読み聞かせなどのボランティアをするのもその一つだ。といっても、学校で教えていることのなかに、どれだけ地域のことが含まれているだろうか。むしろ地元志向を脱出志向に変えてしまう要因が広く見られる。

「こどものまち』宣言は、こどもと地域住民としての大人、そして子どもに直接かかわる人たち（教師、福祉職、ボランティアなど）の三者のかかわりのなかで追求していく方向を提示するものだ。この三者のかかわりのなかに地域志向をどう育てていったらいいのだろうか。そうした問いかけを含んで考えていきたい。

２３．２月７日　グローカル　学校を変える

ところで、政府は最近、「狩猟社会→農耕社会→工業社会→情報社会→Society5.0」という流れの中の Society5.0 に対応することを強調しているが、そうしたことを視野に入れた教育をどう展開するのだろうか。この構図がどれだけ有効なのかは問うてみなくてはならないが、学校をめぐる現実の施策には、この構図とはかなりの時間ずれを感じるものが多い。これまでの全国学力テストなどは、「工業社会」に特徴的で、大量生産大量消費に適合する子どもを育てる一つの特徴的なありようだろう。画一的なテストなので、そこから外れないようにする志向を強く生み出し、創造的な志向をおさえこむ力学が強く働いているように見受ける。過去問学習などは、その典型だろう。

ところで、南城市内で広がりつつある多様な仕事起こし・起業には、ＩＴ，ＡＩなどが絡んだものが見られるだけでなく、福祉・健康・観光が絡むものが多い。そうしたものには、ここ３０年使われてきた言葉でいうと、グローカル（グローバル＋ローカル）な視野をもつことを子ども達に求める。そのことから考えると、現在の教育がはるかに時代遅れだという疑いが生じるだろう。

国連が提起する「持続可能な開発目標（SDGs)」の日本での取り組みについても、同様なことがいえそうだ。その本気度がためされているとも言えそうだ。「こどものまち」宣言も、これに深くかかわる。

グローカルなものは、たんなる知識ではない。つながりと体験が不可欠だ。そのため、学校での教科学習と部活以外に、多様な世界／地域、そして多様な大人／友人・知人に出会い、共同活動する機会をうんと増やす事が欠かせない。

世界とつながり、世界に飛び立つためには、地域を足場に地域で育つことが必要なのだ。そのためには、１０代の若者たち同士がつながる場をつくる同時に、１０代後半から２０代までを視野に入れて、南城の未来像とかみ合わせた施策の展開、つながりをふくらませていくことが求められる。

そんな時に、コミュニティ・スクールをどうつくるかが話題になり始めた。文科省の施策として上意下達型に指示されていることだというが、コミュニティ・スクールの考えから言えば、住民自身の声として上がってくるのが当然の流れだ。しかし、近代日本の学校史のなかで、長年にわたって作られてきた中央集権的な上意下達スタイルのなかでは、地域住民のなかで、そうした意欲と力量の蓄積はまだまだ不十分だ。学校自体も、そして地方教育行政も、対応できるものにどれだけなっているのだろうか。学校体質を変えないで、うわべだけの対応になる可能性（危険性？）があるのかもしれない。

以前からもそうだが、最近も、マスコミ報道でもたびたび登場するような学校の問題性を訴える声にしばしば出会う。しかしながら、その問題性には、１５０年近くにわたって蓄積してきた近代日本の学校の歴史がある。それを変えていくには、同じ１５０年とはいわないが、かなり長期の課題になるのだ。実は、福祉にしても、同じことが言える。福祉施設の不祥事の背景には、歴史的な問題の蓄積があるからだ。

そうした長期の蓄積をもつ問題性を、長期視野をもって変えていく足がかりとして、「こどものまち」宣言と、それに結びつく取り組みを位置づけたい。

２４．２月１１日　南城の強み・特色・大切にしたいこと１　自然

ここで、視点を変えて、南城の「強味」「特色」、「大切にしたいこと」は何だろうかという点を考えたい。「こどものまち」宣言には、当然「南城らしさ」を帯びるだろうし、南城らしさを生かした「こどものまち」を作る必要があるからだ。

これらには、子どもたちからの聞き取りから得られたことも含まれている。アトランダムになるが、並べてみよう。まずはじめに自然について考えよう。自然といって思い浮かぶものには、次のようなものがある。

海（波）　イノー　サンゴ礁　丘　森　気候（とくに亜熱帯海洋性　台風　美味しい空気）　風・雲　岩　土　水（カー）　星空

動物（虫　鳥　犬・猫　魚　貝）　植物（草　野菜　樹木　花）

潮の干満。ゆったりした時間の流れ。自然のなかにたたずめる場。自然と一つになれる場。自然と調和した人間の文化・景観

こうしたものが、子どもの生活・人生をつくる素材・背景として、どのような役割を果たすだろうか。遊び・学習・仕事・移動のなかで。自然観・人生観・世界観の形成のなかで。原風景としての自然といっていいかもしれない。

ところで、自然の対極にあるのは、人工ということだろう。先日の視察旅は、東京の町田・三鷹・世田谷が中心だったが、自然ということにかかわっていうと、南城とは対照的だ。仮に南城が、自然度６０％人工度４０％とすれば、東京は、自然度５％人工度９５％だ。自然の豊かさが南城の強みになることは間違いなかろう。

ここ百年の人々の暮らし、そして行政施策は、自然度を下げ、人工度を上げることに邁進してきた。人工度上昇に専念してきた行政の仕事は、４０～５０年ほど前に環境行政が登場してから、多少は風向きが変わったが、それでも自然度低下の流れはいっこうに収まらない。

自然度が高いとみられる南城市でも、自然度を高める施策は、着手されはじめたばかりの段階といえるかもし

れず、大勢はいまだ人工度を高める方向にある。忘れないでおきたいのは、戦争が最大の自然破壊であったことだ。と同時に戦後の開発が、戦争に匹敵する程の規模で自然破壊を進めていることだ。南城市域での自然海岸が、ほんわすかしか残っていないことがそれを示している。公園なども、自然度を高めるよりも人工度を高める方向が、全国的には圧倒的だが、南城市も例外ではなさそうだ。

そんな時に、町田市でみた「ぼうけんひろば」では、都市の中にほんのわずかに遺された自然と子どもたちとを結び付けようと必死の営みが進められていると言えそうだ。と同時に、そうした営みが、多くの人・こどもの共感を呼び、行政を動かしていると感じさせるものだった。

残念ながら、これまでの大人の子どもへの働きかけは、自然との距離を引き離す力学を強めてきたようだ。子どもたちの自然との接触は、年々縮小してきている。身近な動植物との接触体験の減少の低下がそれを物語る。仮に、学校で南城市に生育する動植物名のテストをすれば、現在の６０歳以上に人と比べれば、子どもたちはどれだけのレベルだろうか。とんでもない結果になるだろう。

自然とこどもたちとの結びつきを強めることは、「こどものまち」宣言の視野に欠かせないものだ。

２５．２月１６日　南城の強み・特色・大切にしたいこと２　人間関係

人間関係は、専門用語では社会資本とよばれるものだが、その量と質が大人だけでなく子どもの現在の生活、そして将来への準備として重要だ。しかし、「かつて沖縄は経済資本の低さを高い社会資本で補っていたが、その社会資本が乏しくなってきている」といわれるようになっている。特に都市地域で著しいが、南城地域でも、その傾向が出始めている。それでもまだ高い社会資本があるだろう。その例として、子どもの遊び集団の人数の多さをあげられるかもしれない。しかし、「孤独に遊ぶ」子どもが目立ち始めている。また、少人数化した家族が閉鎖性を強め、人間関係が乏しく、親子密着、逆に子どもを放置する親の例が指摘されたりする。それが、虐待を生みやすいとも言われる。

また、出ていく人、入ってくる人が多く、長く暮らしている人々との出会い・交流・協同の豊かさに南城の特色がある。アマミキヨの頃から、あるいは尚巴志のころから、日本本土も含めて海外からの沢山の人の移住の中で、さらには県内各地からの多くの人の移住によって南城は作られてきたともいえる。だから、一見閉鎖的地域に感じるかもしれないが、実は多様な人々が移住し住みついた南城市域なのだ。明治期半ば以降、移民・出稼ぎ・進学・就職で出ていった人も多いが、入ってきた人も多い。だから、停滞社会とはいい切れない。さらに、出ていくだけでなく外に出ていって活躍した後に、Ｕターンしてきた人も多い。近年では、南城に生まれ育って、住み続けている人々をかなり上回る人々が、南城市外から移り住むようになっている。

さらに、長期滞在者・観光訪問者を含めると、人口の数十倍以上の人が、南城を訪問滞在している。その受け皿として、ホテル・民泊だけでなく、airＢ＆Ｂ、マンスリーマンション、さらにはアパート・マンションが、爆発的に増加して、人口増を作り出している。子どもの世界でいうと、転校生が多くなっている。かつては転校生を「よそ者」扱いをしていたが、もはやそういう時ではない。

こうした移動の多さが、前に述べたグローカルな人々をつくりだしてきている。その歴史は、移民・出稼ぎ・

進学・就職などとして、すでに１００年以上の歴史をもっている。そして、その移動のなかで、南城の魅力を感じ取り、南城を育てようとする人も増えていると言えよう。

そうした多様な人々の来訪へのホスピタリティはどうだろうか、付き合い方はどうだろうか、ということが問われ続けてきた。

先に視察訪問した東京の町田・三鷹・世田谷でも、移動の激しさは著しいが、自治体行政は、そうした移動の激しさを前提として営まれているともいえよう。その点では南城市でも、数世代にわたって定住している人々と、数年～数十年単位で移動している人々の双方を視野に入れた施策が求められる時にいたっているといえよう。

２６．２月２２日　自治体の施策の中軸に座る「こども」　世界的動向のなかで

２月４～６日と首都圏視察に出かけたが、その際に気づいたことも含めて書こう。

以前なら、自治体のキャッチフレーズには、平和、反核、産業、景観、教育、文化、国際交流などが掲げられることが多かった。しかし最近では、子ども・若者、そして高齢者に焦点化され、関係する施策を打ち出す市町村が目立ち始めた印象だ。それは、国内だけでなく世界的動向でもありそうだ。国連の持続可能な開発目標（SDGs)、そしてユニセフの子どもにやさしいまちづくり、あるいは子どもの権利条約にかかわるものが目に付く。

それは、人々が生活する場で、多様な世代が尊重される施策の追求となる。その際に重要なのは、子ども・若者・高齢者といった当事者の声、活動を基軸に据えることである。連載の初めの頃に書いたことだが、『こどものために大人が動く』というよりも、当事者であるこども自身の発言・活動、つまり「子どもによる」が中軸に座る事である。

各地の児童館などの施設の掲示板などで、「子ども会議」「子ども委員会」「少年議会（少年議員選挙)」「若者議会」（予算を伴う政策決定に参加）といったものをしばしば目にした。措置された予算をどう使うか子ども達自身が決めるということも見られた。

町田市が展開している子どもにやさしいまちづくりは、ユニセフとつながるものだが、その中身として、次のようなことがかかわっている点にも注目したい。

①子ども参加
②子どもにやさしい法的枠組み
③まち全体の子どもの権利戦略
④子どもの権利部局
⑤事前・事後の子ども影響評価
⑥子ども予算
⑦定期的な自治体子ども白書
⑧子どもの権利の周知
⑨独立した子どもアドボカシー

また、虐待などへの関心の高さから、体罰・暴言・虐待など子どもへの暴力の全面禁止条例とか第三者相談救済制度の設置（子どもオンブズパーソン制度）とかも目立つ。

また、子どもの居場所の設置も重視されている。いくつかの児童館などの施設を視察したが、素晴らしいものばかりで驚かされた。民間・ＮＰＯによるものだけでなく、公営または公設民営の居場所も多くの自治体でつくられている。学童クラブが、民設民営が多かった沖縄県とは対照的に、公設公営で広く作られてきたことは知られていたが、子どもの居場所つくりに公的機関がかかわっている点は注目されてよいだろう。

それらは、建物などの施設だけではなく、施設の中身、使い方の豊かさにも、歴史的成果が反映している。残念ながら、政府による民営化施策や予算不足の中で苦労しているようだが。といっても、沖縄とは比べようもなく高い税収の東京なので、沖縄では難しい施設も作られるという印象だ。

と同時に、住民たちによる子どものための取組みの長年の蓄積の反映が見られる点でも注目されてよいだろう。いわば市民運動として取り組まれてきたのである。

２７．２月２８日　南城の強み・特色・大切にしたいこと３　文化

南城の強み・特色・大切にしたいことの３回目で、文化の豊かさとユニークさについてである。その分野は、衣食住を中心とした生活文化、言葉（シマクトゥバ）、陶芸などの工芸、集落単位で継承されてきた芸能、そして、祈り・癒しなどにかかわる文化、さらにシュガーホールが一つの拠点になっている音楽などの文化、文化協会（絵画、盆栽、写真など）がよりどころになっている市民芸術家の創作。こうしたものが豊かに育まれているので、それらを探訪するエコミュージアムができるほどのものになっている。それらは観光資源ともなりそうだ。

忘れてはならないのは、子どもたちによって継承されてきた遊び文化。ほぼ消滅状態に近いが農作業を含めた子どもの仕事文化が、年配の方々の記憶の中には生きている。

さらにいうと、歴史文化というものがあるだろう。象徴的な存在として、グスク・ウタキなどの記念物が存在する。戦争遺跡も重要である。

これら総体が子どもたちを豊かにし、誇りを感じさせるものとなっている。

また、沖縄戦時・戦後復興期に、自主的に地域づくりをしてきた体験も歴史的遺産である。そのなかで、地域で多様な起業を展開してきた積極性にも注目したい。

以上述べてきた南城の強み・特色・大切にしたいことを踏まえて、こどものまち宣言の作り方自体に南城らしさを伴わせたい。

２８．３月５日　子どもの活発な動きがじかに見られる南城へ

いつのころだったろうか、屋外でこどもたちが動き回っていた時代があった。現在の５０歳代以上の人には、思い浮かぶ光景だ。遊びに仕事に、といろいろだが。早朝の山羊の草刈が日課だった人も多い。道路は遊び場だった。公園というものはなく、子どもがいれば、そこが遊び場だった。秘密基地もあったはずだが、「秘密」だから、所在は不明だ。記憶のなかには残っているはずだ。

子どもの声が「うるさい」、いたずらに困っている、果物やキビを食べる子どもがいる、などと腹を立てる人がいた時代はいつごろだったろうか。窓から外を見て、子どもの姿が見える家は、今では珍しいかもしれない。学校の近くに行っても、子どもが出す音は滅多に聞こえてこない。

自動車によって道路から子どもが追い出された後、子ども達が集まって遊べる公園がつくられたが、幼児期が中心で、大きくなるといなくなる。定番のブランコと滑り台が、公園の留守番をしている光景が見られるようになった。時にはお年寄りが留守番をする。

ということで、屋外でこどもを見つけにくい時代になっている。こどもがいるのは、住宅内、塾、そして、スーパー・コンビニ周辺ということになってきた。例外は、スポーツクラブが活動する運動場だ。

こんな時代に、「子ども（の姿と声）があふれる町」「道を歩けば子どもに当たる町」ができればいいなあと思う。

学童クラブの人気は、こどもたちの遊びを中心とする生活の中で、動きと声がはずんでいるからだろう。児童館も同じだ。小さな子どもなら、スーパーなどの遊び場でも、そんな光景があるようだ。神奈川県での視察では、図書館の一角にそんなコーナーがあり、そこには保育士が常駐し、防音壁もあり、安価な料金で預けて、保護者は読書に集中できる場があった。

そんな姿を作り出す場・機会を増やしたいものだ。そのアイデアを、思いつくままに並べておこう。

・「こども１１０番の家」に、遊び場コーナーをつくる
・集落公園をこども広場にする。
・道路の一時開放。子ども歩行者天国。子どもが飾る・つくる道路。　遊び場としての道の活用
・こども大会　「子供天国」
・「こどものまち」　子どもが運営管理する　2～3 日間連続開催　世界的に行われている　商店・食堂・役所・警察などまちにあるものが並び、こどもたちがそれらの役割をとる。　お金も発行し、物品売買もする。
・子ども自慢大会、一芸発表大会。
・昔遊び紹介大会　すでに実施している小学校がある。
・広場があって、隅に用具入れ倉庫があり、そこから用具を持ち出して、何かを製作する。

２９．3月１１日　地域を育てる学校へ　コミュニティスクール　学校運営協議会

これまで触れることが少なかった学校について書こう。触れることが少なかったのは、学校が地域の中にありながら、地域では影が薄くなっているからかもしれない。学校と地域の距離が遠くなっていることを反映しているのかもしれない。

子どもたちが、学校で学び卒業することで、地域で活躍する流れを生み出すのか、学校を通して地域の外へ出

ていくことを促進するのか、そんな問いを出してみたらよい。１９６０年代に兵庫県の小学校校長が発した言葉、「村を育てる学力」か「村を捨てる学力」か、ということで考えてみたらよい。学校での成績優秀生が、現在、地域の中で活躍しているか、地域外で活躍しているか、ということがわかりやすい問いかけだろう。

こどもを地域おこしと結び付けて考えていくうえで、学校がどういう役割を果たすかは重要な問いかけだ。そんな問いかけもからんでコミュニティスクールということが言われ始めた。そこには学校と地域との距離を縮める願いが込められている。市立小中学校でありながら、文科省立ないしは国立の小中学校になっている現状を改めていこうという願いである。

コミュニティスクールにするというのは、実は文科省がかなり前に打ち出した方針である。しかし、文科省の本気度を疑っているのか、学校関係者の取組みは一部にとどまってきた。

そのコミュニティスクールは、これまであった学校評議員会とは異なって、権限が強い学校協議会を置くこととセットである。

ここで、私の体験を語ろう。１９９９年カナダのトロントで、ある小学校の学校協議会の開催に立ち会うことが出来た。大きな会社の副社長を務める知人が議長（委員長）を務める小さな小学校だ。学校規模が小さいので、委員を選ぶのではなく、保護者全員、教職員、そして子ども達自身も正式メンバーとして参加している。といっても１００人足らずの集まりだ。学校関係者の全員協議会といった感じだ。

私が驚いたのは、議題だ。次々と出される議題の多様さには圧倒された。

・次期校長の選任基準
・遠足の途中休憩場所
・校庭のごみ箱設置管理。

といったものだ。でかい議題と日常生活にかかわる議題とが並んでいる。

暖かい雰囲気の中、いろいろな意見が出ながら、スムーズに進行していく。

３０．３月１８日　**地域と学校　コミュニティスクール**

前回話題にしたカナダの教育行政は、国が担当するのは限られており、州や市町村が担当する部分が大きい。日本ほど中央集権制が強い国は、それほど多くはない。そのカナダでは、校長選任を教育委員会が行う場合もあるが、前回述べたように学校協議会がかかわることがあるようだ。ちなみに、２０年前のことだが、カナダの全国紙の毎週木曜日朝刊の１ページすべてが、全国の学校からの公募欄で埋め尽くされていた。校長人事が多い。その学校の特質にもとづいて、どういう学校経営をする人材を求めているかが簡潔に書かれている。

こうした仕組みのなかでは、校長も含め教員の学校への所属意識は高い。しかも、１校での継続勤務年数は長い。１０年というのは珍しくない。あるモデル校の校長は、４０歳ぐらいに着任し、１０年ほど継続して務めていると聞いた。だから、その学校や校区のことに詳しいだけでなく、愛着も高まろう。沖縄では対照的に、３～５年が多い。校長でいうと、３年を超す例に出会うのは珍しい。沖縄は、日本全体のなかでも短いのだ。

そして、教員のほとんどは、校区外からやってくる。長くて５年という継続年数では、校区のことを知り始めたら転勤となってしまう。そのため、勤務する学校の歴史つくりに参加するという感覚は希薄にならざるをえな

い。

かつては、学校のなかだけでなく、地域リーダーとしての役割を教員が果たしてきた。だが、１９７０年ごろを境にその役目を果たすことが減ってきた。そのころ、教員人事を流動化するために、３～５年での人事異動が恒常化するようになった。そして、教員が地域のリーダーであることは、稀になってきた。

一般の地方公務員は、長期勤務が一般的だから、教員とは対照的であり、彼らの方が地域リーダーの役割を取りやすい。自治体の首長は、かつては多かった教員出身者が激減し、地方公務員出身者が増えているようだ。

私は、地域起こしの一環として「学校起こし」が必要なのではないかと思う。それをわかりやすく言うと、地域が学校をつくり運営するということだ。それは、１００年以上の歴史をもつ中央集権型画一型学校を変えることにつながる。そして、成績優秀生ほど、地域から出ていく構図を変え、地域を育てる人材を育てる学校へと変えることでもある。別の角度からいうと、地域によって育てられる学校へと変わるということでもある。

コミュニティスクールについての概説書によると、コミュニティスクールには、１）学校運営に地域の人材を活用するというアプローチと、２）地域が学校を運営していくアプローチの二つがあり、現在の日本の政策では、２）が弱く１）が中心だという。学校関係者は２）を心配しているようだが、２）は弱い状況だとのことだ。それでも１）の動きさえ、学校関係者のなかでは、忙しくなるなどの理由で、消極的だとのこと。

そんな状況の中では、１）の経験を蓄積するなかで、徐々に２）へと歩むということになるのだろうか。

いずれにしても、地域の学校を育てていくためには、地域に経験蓄積と人材育成が必要になり、１０年単位の着実な歩みとなろう。

３１．３月２５日　**グローカルな学校へ**

地域と学校をめぐっての世界的動向は、前回述べたなかの２）のアプローチが強いと言えよう。多くの先進国では、学校をめぐっては地方自治原理が強力であるところが多く、２）のアプローチが違和感なく受け止めやすいのだろう。

２）のアプローチは、住民共同で学校をつくるものであり、そのための学校協議会ということになろう。

地域の学校は、地域に閉じこもるのではなく、前にも述べたグローカル（グローバルとローカルをかけあわせた言葉で、世界的に強調されるようになっている）なものである必要がある。つまり、地域にもつながるし世界にもつながる学校になるということだ。いいかえると、地域の中に世界を見いだし、世界の中に地域を見いだす子どもを育てる学校ということだ。

そのためには、教員自身もグローカルであることが求められる。地域のこととあわせて世界のことをよく知りつながっている人が求められる。ちなみに、カナダの特徴は、世界どの国の教員免許でもＯＫである。カナダ免許の比率はそれほど高くない。アメリカ免許の人が多いが、日本の免許の人もいた。知人がいる大学では、教育実習も世界各地で行なっている。（以上は、20 年前の話）

ということで、地元出身の教師の比率を高めるとともに、海外出身教員を増やすことも必要だ。現在のように英語を教えるための外国人教師一人というのではない。他の科目担当や担任にも、そうした多様性が生まれてくることを期待したい。国の制度がからむので、時間がかかるが、そうした芽を育てたいものだ。

ついでに言うと、世界とつながり、共同していく動きが、市民のなかにも行政のなかにも必要だ。その点では、南城市は初歩的段階にとどまっているようだ。わずかに短期留学制度が中国とアメリカ向けにあるようだが、限られた人数が対象だ。より多様で豊かな交流協同が出来るようにしていきたい。

その点では、２月の視察で訪問した、ユニセフとつながって積極的活動を展開している町田市の取組みは示唆に富む。

３２．３月２９日　子ども・市民による取組みを中心にする。それを支える自治体

「こどものまち」を実現するための取り組みにあたって強調したいことを、１０項目ほど述べていこう。

１）子ども・市民による取組みを中心にする。それを支える自治体

『南城市こどものまち』宣言というと、自治体がしていることだから自治体の問題だと考えがちだ。しかし、当事者は子ども自身だし、子どもにかかわる住民自身だ。「こどものまち」は、与えられるものではなく、子ども・住民がつくりだすものだ。

子ども・住民の活動を支え促進し、子ども・住民の必要・要求にこたえる自治体、という構図でとらえたい。

２）そのために自治体がもつ制度・施設・権限・財政支出を生かす。

制度・施設としては、学校・保育園・学童クラブ・公園などがある。自治体立のものだけでなく、自治体から予算措置が講じられているものも含んで考えたい。実のところ、子どもにかかわる支出の多くが国庫支出であるなかで、それをどのように運用するかということと、自主財源をいかに活用するかでの工夫が必要だ。

３）キャンペーン型動員型啓蒙啓発型取り組みではなく、創造的取り組みを多様に並行させる。

取組み企画についていうと、事前に決まっていた通りに実行するというのではなく、取り組みに参加する子ども・住民の発案・活動のなかで変化発展していくようにしたい。

それは、市民が主体となる市民参加型の取組みであるが、既定の方針を宣伝浸透させるというのではなく、当事者たち自身が創造する多様な取り組みを、自治体が促進奨励し拾い上げ施策にしていく取組みが基本となろう。

４）とりわけ子ども達の取組みにする

子どもたち自身が、施策立案実行にかかわっていくことを重視したい。『こどものまち』宣言もそうである。住民代表として構成されている市議会と並んで、子ども達の代表で構成される「子ども議会」がともに立案・決定するようにしたい。すでに、多くの自治体で『子ども議会』が作られているので、南城市子ども議会にふさわしいものを作り上げていきたい。

無論、「議会」形式にこだわる必要はない。子ども・市民が中心になってすすめる形は多様に存在する。ワークショップもその一つだろう。

こうした形の蓄積は多くないので、試行錯誤や不首尾がありそうだが、試みるなかで前進させていくことが大切だろう。行政やどこかの組織に任せきりになることが多い中で、市民・子ども中心の大胆な取り組みが期待される。

３３．４月３日　一般市民と専門家や担当者　若者・高齢者の取組み

５）一般市民の取組み

この取り組みは、専門家や担当者がやるというよりも、市民自身が行うものである。いいかえると、「専門家担当者に預ける」のではなく、子ども・住民が、専門家や担当者のアドバイスを生かしながら、作り出していくものである。つまり、限られた数の専門家担当者がすすめるのではなく、子ども自身・市民自身が行う活動である。

専門家担当者にしても、教員・保育士・心理士・カウンセラー・医師・看護師保健師といった「資格」をもつ人たちだけでなく、一般市民と専門家担当者の中間に位置する方々が大量に存在することに注目する必要がある。なかには、無償で、こどもたち（とくに、障がい、ひきこもり、不登校、経済的困難などの課題を抱えた）のケアをしている人々がいる。そういう「無償労働」に支えられている現実がある。こうした人たちの活動を住民の目にみえる形で広め、より多くの住民がかかわるようにしていきたい。と同時に、ボランティアに過剰依存している現状、あるいは低給与で働いている担当者の現状を大胆に改善する施策が求められる。

６）若者・高齢者の取組み

一般市民である大人と子どもの間にいてつなぐ役割の人を育てることが重要だ。専門家や担当者もそうであるが、彼らとは別に、１０代末から２０代の若者たちの存在は大きい。たとえば、学童支援員には、若い人が多い。なかには１０代の人もいることが注目される。子ども会のジュニアリーダーというシステムをもつ地域もあるが、南城ではどうだろうか。中学での部活指導に、その部に属していた卒業生があたることも見られる。いわば先輩だ。

そうした若者は、市内に何百人といるだろう。彼らはいわば「子ども応援隊」だ。そんな肩書をもってもらうのもいいだろう。

高齢者が子ども達の世話をするのは、長い長い歴史的「伝統」だろう。自分の孫だけでなく、近所の子どもたちの世話をし、一緒に遊ぶのだ。学校で「昔遊び」を紹介している人もいる。子ども達の高い人気を得ているようだ。

こうしたことを、青年会や老人会で取り組んでもいいだろうし、「子ども応援隊」めいた組織ができてもいだろう。子どもの世話ということで、自分たち自身も楽しんでいいのだ。他市町村では、公園で子どもたちと高齢者が場所取りでトラブルになる話も聞くが、逆に交流協同の場になればいいと思う。

３４．４月８日　専門家が専門家になっていく　こどもサポーター

７）専門家が専門家になっていくために

子どもたちの取組みを促進・支持する大人たちが活躍する場や組織が重要であるが、そこには専門家がいるといいが、専門家といえるほどでない人もかかわれるようなありかたを追求したい。

そこで、ご本人の希望を出発点にして、希望を現実のものにするための人材養成を重視したい。読み聞かせのための「こどもの本」講座のような機会をつくっていくことだ。そして、経験交流し、他の人の実践から学ぶ機会をつくることだ。

ところで、すでに専門職のような地位で働いている人も多い。保育士・教師・看護師・児童館厚生員・学童クラブ支援員などがそうである。最初は多少未熟でも、いずれ専門家といえるほどの体験と力量を獲得していく。ちなみに、保健師のような職種を除くと行政の職員の多くは、３年程度で配置換えが行われるので、担当分野の専門家というよりも、行政業務の専門家といったほうがいいだろう。子ども関係部局にあっても、子ども・教育・福祉の専門職というわけではない。また、子どもの関わる社会運動にたずさわる人にしても、社会運動とか、政策の専門家であっても、子ども・教育・福祉の専門家であるとは限らない。

といっても、そうした行政の専門家や社会運動に携わる人が子ども分野の専門家になれないわけではない。逆に、子どもにかかわる職についている人が専門家になっているとは限らない。職について日が浅い人は、その後の経験と学習によって、専門家になっていくのだ。

ということで、こどもとかかわる方々が、自分なりの専門性を経験と学習の中で身に付けていってほしい。そうしたことを促進するために、「南城こどもサポーター」という仕組みをつくって、リストに載った人々が、相互に情報交換、経験交流などができるのもいいだろう。そして、そうした希望を持つ方々の活躍場所を紹介し合うのもいいだろう。そうした拠点として「南城子どもサポーター広場」を設定してもいいだろう。

学校教員についていうと、教員としては専門家であるにしても、南城のこどもにかかわるしごとにおける専門性ということでは、そこまではいかない人が多い。急いで身に付けてほしいことだ。といっても３～５年で転勤してしまうと、身に付け始めた専門性が薄れていきかねない。そのあたりの改善工夫を期待したい。

８）実践・取り組みの発見共有のための場の設定と紙誌の発行

こうした専門家の育成、あるいはリーダー養成について触れておこう。

まず、そうした方々自身の情報交流の場を大切にしたい。というのは、研修というと多くの場合、講師の話を聞く形が多い。それが必要になることもあるが、日々実践している専門家自身の経験に基づいた交流を通しての発見と掘り下げを増やすことを中心にしたい。そうした実践交流の集会をできる限り多く持てるようにしたい。それには、施設や担当部局が開催することと同時に、実践者自身が主催して持つことが欠かせない。というのは、実践は、その場・人・課題に応じた多様性があるからで、それに即応した対応深化が求められるからだ。

そうした集まりで生み出された実践例などを、情報紙誌・研究紙誌として発刊することは重要だ。専門家だけでなく、周りの人々に自信と励ましを与えるからだ。『南城のこども』という定期刊行物があれば、すごいだろう。

そうしたなかで、実践を奨励促進し、周りの市民の「こどものまち」への取組み参加を促すだろう。

３５．４月１３日　**南城こども研究**

９）南城こども研究　南城研究

ここで「南城のこども」研究について書こう。「南城のこども」をテーマにして専門的に研究している人はおそらくいないだろう。それは、どこの市町村をとってもいえることかもしれない。さらに『こども』に限らず、南城に焦点を当てた研究、つまり南城研究そのものも、未開拓状態に近い。

そこで、新規テーマというべきこのテーマについて、実践動向を含む実態の調査研究、それにもとずく課題把握と、課題追求のための研究が必要だ。同様なことは、南城についての他分野の研究についてもいいうるだろう。その際、個人の研究にとどめず、共同研究として追究できればなおのことよい。

その点では、「こどものまち」宣言策定にかかわる 2019 年実施の調査研究は、大きな足掛かりだ。とくに、子どもにかかわる多様な実践者への聞き取り調査は貴重なものだろう。今後、それをどのように生かすか、また継続調査をどう進めるかが重要になろう。

ところで、行政としての地域研究・子ども研究は、すでにいろいろな自治体で行われてきている。その多くは、施策立案の基礎資料作成として行われているので、行政上の調査研究ともいえよう。自治体だけでなく、銀行などの付属機関でも行われている。また、自治体のなかで、統計を扱う部門や市町村史を担当する部門でも、研究といえるものが蓄積している。

しかしながら、それらの多くは、施策立案に向けて作成されることが中心である。その施策立案を超えて、その地域の自然・文化・生活生産のありよう（アイデンティティ形成）にかかわる研究作業が、数年間以上の長期にわたって行われることが期待される。地域の将来の主体としてのこどもをめぐる研究も期待される。

そうしたことを長期にわたって継続できる恒常的体制ができればいいが、なかなか難しいかもしれない。それでも、なんらかのかたちでも継続性が保障されることが望まれる。そして、その水準を築くために、専門的研究者の関与が不可欠だろう。

こうしたことを踏まえて、一般市民――子どもサポーター――担当者・専門家――研究者というつながりを継続的に作り出すために、何らかの研究会（例えば、南城子ども研究会）をつくり、子どもにかかわる活動、前回述べた子ども実践にかかわる報告交流、専門的研究をつなぐものを構想していきたい。そのつながりに沿いつつ、市の施策が展開されることを望みたい。

こうしたことも、『こどものまち』宣言の視野に入れておきたいものだ。ということで、宣言をきっかけに、こうした研究がスタートし持続していくようにしたい。年１～２回程度以上の研究会、研究紙誌の発刊からはじめてはいかがだろうか。

こうしたことを考えるうえで、小中学校および学校教員の果たしている巨大な役割を、いかに位置付け生かしていくかも視野にいれたい。

３６．４月１６日　こどもが充実する場を無数につくる

１０）こどもが充実する場を無数につくる

以上述べてきたこどもたちの多様な活動を行う場は、実に多様だ。まずイメージするのは、公園などの遊び場だ。それはグスクロード公園のように広くて、本格的なものだけではない。屋外の公園ということでいうと、３～4 人が集まって遊べば「もういっぱい」といった小さなところまで視野に入れたい。屋外に限らない。半分家の中といった感じの軒先でも構わない。無論、森もあるだろう。

常時使うわけにいかないが、週末だけ開放される場であってもよい。なかには、歩行者天国のような道路でもいい。公的な施設でなくてもよい。個人宅が数時間だけ開放されるのでもよい。空き屋敷の活用でもよい。「秘密基地」のように、大人には知られないものでもよい。営業日以外の会社施設を開放するのもあるだろう。

こうした場が、市内のどこからも、徒歩１０分以内で行けるところにあるといい。公式に公園と認定されていなくても、こどもたちが集まって何かができるちょっとした所でいいだろう。

幸いなことに、南城市の各集落には、公民館や小公園が、多様な名称だが用意されている。だから、市全体で数えれば、そうした場は、１００～２００となる。いや、もっと多いだろう。

そうした場を、子どもが独占する必要はない。と同時に大人が独占する必要もない。多様な人々が集まって、「何かがある」というものでよい。ニュースポーツを多世代で楽しむこともあろう。かつてのモアシビ広場のようでもいいだろう。こども芸術広場もいいだろう。

こうした場は、予め予想された使用法にこだわる必要はないだろう。こどもたち自身、あるいはサポートする大人の知恵も借りて、使用法を編み出せばいいだろう。公園活用アイデア大会があってもいいだろう。遊び場リレー方式ウォークラリーなどがあってもよい。それをきっかけに、地域発見、面白い人発見大会などが行なわれるのもあるだろう。

その場には、遊びや活動が発展しやすい素材置き場（一坪ほどの倉庫など）が用意され、段ボールや簡易工具などが置かれ、それを使って何かを作れるようにしたい。そんな物品の世話管理をしつつ、遊びを膨らませる役割をする大人のサポーターがいると素敵だろう。学生アルバイトに頼んでいいかもしれない。

そうしたことは、学童クラブなどの組織と協力関係を築いて、補助金を投入して、相互を活性化することを考えてもいい。現在の児童館のイメージをより多様化するのもあるだろう。

こうした取り組みの場・施設を、取り組み発展の足がかりにしていくのだ。

３７．4月２０日　「南城市といえば、こどものまち」といわれるように

多くの関係者に支えられて、連載を続けてこられた。といっても、初年度の２０１９年度は、準備年度というべき年であり、この連載も予習段階のものだ。２０２０年度からは、宣言文案作成も含めて、さまざまな取り組みの具体化がすすむ。そこには、こどもたち、こどもサポーター、担当者、専門家など多様な方々がかかわってくる。

取り組みの具体化ということでいうと、イベント型だけでなく、日常型の取組みをスタートさせていく必要がある。また、他の取組みだが、よく考えれば「こどものまち」のための取組みだというものを拾い上げていくこともあろう。

市の担当部局は、子育て支援課や教育委員会に限られない。多様な部局が関連する取り組みをすすめることを期待したい。また、子育て支援課でなくて、ずばり子ども支援課、あるいは子ども課そのものでもいい時期が、いずれくるかもしれない。

「南城市といえば、こどものまち」「こどものことなら、南城市に行けばよい」といわれるような姿が実現することが期待される。こどもガイドブック、こどもマップなど多様なグッズがつくられるだろう。市外からも、こどもたちが集まってくるような企画があってもよい。お絵かき・工作広場。ビーチ企画。ウォークラリー企画。尚巴志マラソンのようなものもいい。そんな企画アイデア大会も開きたい。
「どこに観光旅行に行こうか相談する時、こどもが希望する行き先に南城が選ばれる」ようにしていきたい。

※　書きたかったこと、書くことが望まれること、いくつも書き残してしまった。たとえば、トラブルなどの難題への対処、緊急保護が必要な時の対応、経済的貧困への対応、あるいは転入者へのサービスなどなど、それらにかかわる人間関係作り、行政の対応、諸施設の対応といった課題については、機会をみて述べてみたい。

こどものまち宣言の進め方プチワークショップ　政策立案遂行のためのワークショップ

2020 年 06 月 15 日

他の自治体ではどうなのかわからないが、南城市役所では、政策立案のためのワークショップを以前からしばしば行ってきて、私も何度か参加経験がある。無論、ワークショップの場で政策が決まるわけではない。でも、そこで参加者から出された意見・アイデアが、その後の政策形成推進へのヒントになることが多い。
自治体が出した案について意見を求めるという会では、意見を出すのは、時間の都合で人数が限られるし、政策案提出職員とのやりとりに限定されがちで、たくさんの参加者が発言し、その意見が政策に反映されるのは、とても限定的だ。ときには、対立構図になってしまうこともあり、後味が悪いことがしばしばだ。
無論、ブレインストーミング型の会もある。私が進行役を務める会議では、その時間を大切にし、発言を大いに促すが、それでも限度がある。それに対して、ワークショップ型では、限度が外れたように、多様な意見アイデアが、参加者ほぼ全員から出てくる。そして、出てきた意見・アイデアをめぐって、賛成反対、膨らませ体験アイデアが続出する。しかも、それらを短い時間で展開できる。ブレインストーミング型の１０倍ぐらいの意見アイデアがでてくるだろうか。
場合によっては、グループなどを使って共同作業ができて、参加者の相互関係も発展していく。ワークショップで出された意見・アイデアの量が多いので、それを整理しまとめる担当者の大変さはあるが。

ということで、ワークショップをより一層活用してもいいだろう。とはいっても、政策立案遂行型のワークショップは、めったにあることでなく、参加者も未体験がほとんどだ。そのファシリテーター（私はコーディネイターと呼ぶが）を経験した人もほぼいない。ということで、今回のワークショップは、私が企画しコーディネイターを務めた。
今回のいきさつを書いておこう。

当初の計画では、市内の小中高校生、保護者、市民、子どもにかかわる組織で働く人など、多様な人が集まって、ワークショップをくりかえし開いて、そこで、宣言文案や先行的施策についての意見・アイデアを出し合い、宣言・施策をつくりだしていくというものだった。ところが、新型コロナの関係で、大型のワークショップを開くことができなくなったので、各地に小会場を開いて、そこで出た意見アイデアを集約してまとめていくしかできなくなった。そこで、そのやり方について、市職員や関係者が集まって、そのやり方を考える「こどものまち宣言の進め方プチワークショップ」を開いたというわけだ。７月に入れば、続々と展開していきたいのだ。

このワークショップでも「三密」を避けるための工夫が必要だった。アイスブレイキングとして行う「じゃんけん列車」「自動車と運転手」も、距離をとるための「リモコン」式でしたが。それがかえって興味深いものとなった。

また、討論時間をいっぱいは盛り込めないので、大型付箋紙を大量活用し（一人当たり２０枚ほど)、それに対する意見も「素敵・大賛成」は緑、「もっと話を聞きたい」は赤、「ちょっと違うんじゃないの」は青の、ドットシールを貼る。それらに基づいて意見交換を進める、と言う流れだ。

写真は、それらを貼り付けた模造紙だ。まさに「満載」になってしまった。新鮮な意見アイデアが登場し、今後の展開が楽しみだ。

三密を避けるということを「逆手」にとって、これから、市役所ホール、小中学校玄関ホール、児童館などたくさんのところで、こんな模造紙が大量出現し、市民・子どもの声で、「こどものまち」宣言と先行施策が作られていくことだろう。楽しみだ。

このワークショップでふと気づいた事がある。『こどものまち』宣言は、文章にしなくてもいい。「なんじぃ」のようなキャラクター、絵、図、造形などもあるなあ。という事だ。無論、文章も OK だが。

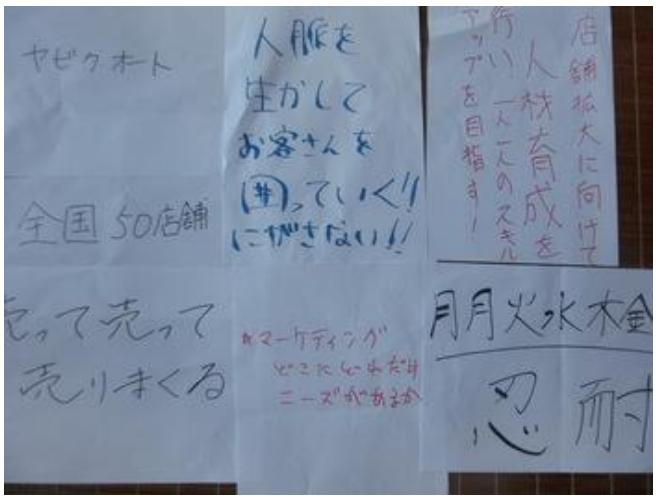
沖縄の教育　　2013~2019 年

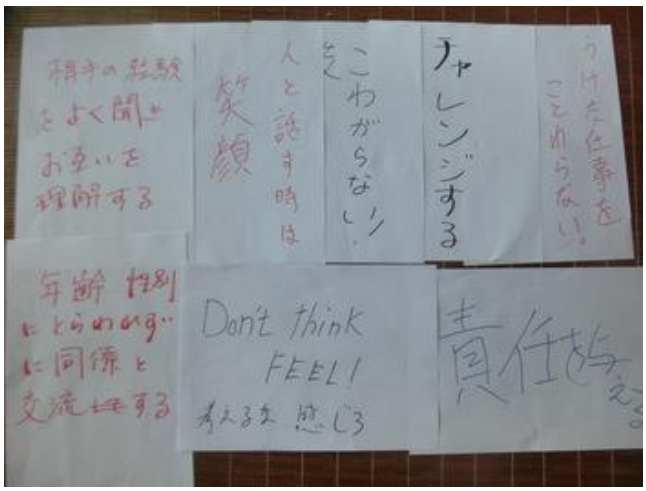
新入社員に、どんな力をつけるか　第２５期同友会大学　　2019 年 07 月 14 日

１３日午後、沖縄県中小企業家同友会主催の第２５期同友会大学で、「新入社員に、どんな力をつけるか」をテーマにワークショップを行った。長いもので、もう１５回近く担当している。当初は、沖縄の教育問題を中心にしていたが、徐々に発展させ、昨年からは今回のようなタイトルにしている。

今年も、多様な業種――コンピュータ関連、ガス供給、自動車販売、機械レンタル、医療、イベント設営、薬品、など――から３０歳以上で、年齢幅がある参加者があり、豊かな共同活動が進んでいった。

参加者相互は、同友会大学で初めて出会った人が多く、新鮮味溢れる。講義スタイルが多いなかで、私のような





なワークショップは少ないので、当初は緊張感に満ちていたが、すぐに楽しく活発な展開となった。さすが経営者・幹部社員の方々である。

採用面接→新入社員教育という流れでのロールプレイでは、楽しいドラマの続出だった。

写真左は、「５年後のわが社の課題と私が貢献したいこと」のプレゼンで出てきたポスターのごく一部。

写真右は「新入社員教育のための発想を広げるキーワード大会」で出てきたものの、ごく一部だ。

主催する同友会は魅力的な活動で会員企業をどんどん増やし、勢いがある。そんな会社から来る参加者たちも元気で明るい。そして、日常生活で出会う身近な会社が多いので、親近感がわいてくる。

沖縄の専門学校の注目すべき位置・役割　　2019 年 2 月 12 日

沖縄県企画部統計課編『１００の指標からみた沖縄』（沖縄県統計協会２０１８年刊）は、次々と新バージョンが出されるが、最近では発刊されるごとに眼を通している。そのなかに「専修学校・各種学校数」というのがある。普通には、専門学校とよばれているものは、この統計数値に含まれているようなので、ここでは専門学校と略して書くことにする。

沖縄では１０万人当たり６．４８校であり、全国平均３．４０校をはるかに超えている。本書には、この項目の直前に、高等学校進学率９６．８８％、大学等進学率３９．５３％という数字があるので、専門学校進学率の統計があればいいと思うが、専修学校・各種学校には、多様な年齢層が通学しているので、その統計はだせないのだろう。

それにしても、高卒者のうち、それらに進学する率はかなりのものであろう（※中卒進学や社会人入学も多いが、データが少なくて書くことができない）。学校数統計にはそれが反映しているように思う。医療系・福祉系・IT 系をはじめとして、高卒者のかなりの比率がそれらに通っているようだ。大学等進学率にそれらを加えれば、かなりの高率になる。実際、たとえば看護大学に通う層と看護系専門学校に通う層は、重なるだけでなく、在籍者数は大学より専門学校がはるかに多い。

受験高校を含めて高校普通科出身者の話を聞くと、進路選択の際、大学と専門学校のどちらを選ぶかという現実的選択に直面した人は多そうだ。

この迷いは、当人だけでなく、保護者にも高校教師にもあるようだ。看護系でいうと、４年制か３年制か、学費の違い、受験科目の違い、自宅からの通学の可否など、迷う要因は多い。

注目したいのは、専門学校の多くが、就職に直結する実技的な専攻分野がほとんどであることだ。就職率の高さをウリにしている専門学校が多い。

しかし、生徒が専門学校を選択しようとする以前には、それについて持っている情報が少ない。進路選択直前になって急いで情報収集することが多い。高校教師についてみると、本人がほとんどの場合、大学卒業者なので、専門学校についての知識は、大学・短大にくらべて圧倒的に少ない。

ひるがえって、教育研究分野をみてみても、専門学校についての研究蓄積はとても少ない。こう書いている私自身も、専門学校の非常勤講師を始めた１０年余り前から、ようやく関心を持ち始めたのだ。

各専門学校にあっても、各校の教育活動や社会的役割などについての検討研究をすすめ、広く社会的に知らせる活動がそれほど進められているわけではない。学生募集案内が中心の広報にとどまってしまう。
政府や自治体も、大学などと比べれば、比較にならないほど低額支出であり、有用有効なサポートを行っているとはいいがたいだろう。

にもかかわらず、社会的役割はすごく大きい。たとえば、看護師の圧倒的多数は専門学校出身者なのである。

それだけに、社会的関心が高まることが期待され、研究検討の価値が大きい専門学校である。

沖縄県中小企業家同友会大学　新入社員教育　　2018 年 08 月 01 日

２８日、沖縄県中小企業家同友会主催の同友会大学で、担当の「教育」を、例年同様ワークショップにて行った。例年通り参加者の奮闘と豊かさにより、大変楽しく充実したものになった。

今年は、１０年ぶりにフルモデルチェンジした。

ごく一般的に、「教育」とくに学校教育を扱うのは、10 年以上前からやめている。中小企業を担う方々の立ち位置と関心に沿って、中小企業における社員教育にひきつけて考えてきたのが、ここ数年の展開だった。それを一層中小企業の新入社員の現実と課題と見通しにかかわって展開したのが、今回のワークショップだ。

課題のおおまかのところを話し、参加者相互の人間関係を豊かにする活動をした後、三場のロールプレイを進めた。参加者を新入社員、新入社員教育担当、会社幹部に三つの役目を交代しながら、即興のロールプレイを進めた。第三場は、5 年後のわが社に焦点化して、新入社員に取り組みを提起してもらうポスター討論で締めくくった。

参加者も満足の様子だが、私も大変満足した。来年は、より一層具体的なものを展開したいな、と思う。

翻って見ると、これまでの教育学では、中小企業における社員教育というテーマは、関心の外の外という感じだった。だが、実際には、膨大な教育的な活動が日常的に展開している。その質と量は学校教育に匹敵するほどだ。日本では学校教育における評価は、テストという形にまとめあげる傾向が強い。中小企業では、現実の会社活動の形であらわれるが、それが「見えやすい」ものではなかっただけに、どのような教育がよりよいものかを問うことさえ、少なかっただろう。中小企業側にしても、社員教育を「教育学」的に検討することは稀だったろう。

このあたりにメスを入れて検討していきたいと思っている。たとえば、「知識」「意欲」「創造力」「人間関係」の四点に焦点化して、新入社員の現状と、その成長のための教育についての見通しと方法をより具体的に考えるワークショップを展開するなかで、具体的な提案が出せるようになればと思う。

乾他編『危機のなかの若者たち　教育とキャリアに関する 5 年間の追跡調査』東京大学出版会

2017 年を読む　　その 1　　2018 年 01 月 11 日

本格的専門調査に基づく大部の書籍だ。5 年間にわたって全国各地の千人近くの同一の若者を追跡調査したものだ。近年この種の調査が試みられはじめたが、これだけの質と量をもつものは初めての印象だ。しかも、労働、家族、地域、学校、意識と人間関係と多面にわたっており、若者が何を感じ考え生きているかをつかみ考える上で、重要な踏み台を作ってくれる。

これまで想定されていたものと同じ結果になるもの、異なるもの、分け入って分析すると新たな発見があるものなどと興味深いものが続出だ。

ここでは、注目したり気づいたりした 2，3 だけ紹介しよう。

「処遇やキャリア形成にかかわる格差が拡大し、雇用の不安定さが広がれば、不利な条件に置かれた女性や非

正規の若者を中心に、仕事への不満やモチベーションの低下をもたらし、仕事へのコミットメントや生産性の基盤を掘り崩す怖れがある。しかしながら、（中略）女性や非正規の若者を含め、彼らを労働市場につなぎとめ、「やりがい」や「手抜きをしない」働き方を調達し、実際にハードな労働や重い責任を受容させ、それを年々昂進させる強力な「包摂・統合」のメカニズムが機能している」ｐ７４

「「やりがいの搾取」というような状況が、「強制」か「自発」かの区別がつかないような形で、若者をからめとって仕事への拘束性を強めていることが重要であり、それゆえに多くの若者の側では、報われない労働にも、「強いられた」ことを意識せず、「自発的」にのめり込んでしまう。」ｐ７６

注目すべき調査結果である。やりがい論と自己責任論の隆盛のなかで、こうした捉え方が若者に広がっているようだ。

本調査とは直接にはつながらないことだが、私の一言。

どういう職業・仕事をどのように行っていくかより、どういう就職をするかに焦点化してしまい、もっぱら就職に関心を向ける風潮が強い。就職活動をする学生や求職者たち、さらには保護者や学校、さらには諸統計もそうした構図に強く縛られている。しかも、新規学卒者の就職に焦点化される。転職がごく通常であるという感覚を欠いているために、転職を低く評価する傾向があるし、さらに起業を含めて自営業を無視する傾向は根強い。

就職に焦点をあてるため、就職先の会社に焦点化し、まさに就社となり、仕事内容が会社内部に閉じられてしまい、ブラックなありようをはびこらせているといえないだろうか。

私が住む地域で、まわりの 60 代にいたるまでの成人たちを見渡すと、ここ数十年の間、いくつもの雇用先を経験する人が多い。そこでは、人は会社にとりこまれてはいない。会社への就職から、仕事を分離してとらえるありようの追求を期待したい。

次は、就職と地域移動についてである。

「「地元」を離れることに対してネガティブな予測をもち、移動という選択肢を放棄することで就業機会の限定という結果を招いている状況」ｐ２０１

「高学歴者のように「遠く」に移動することで安定したキャリアを獲得するのではなく、高卒層は「身近な」地域のなかで移動することで安定した初期キャリアを築く可能性を高めているのかもしれない。」ｐ２１０

ここ数十年は大きな移動の時代であった。近年では海外まで選択肢に持つ人も増えている。他方で、大卒も含めて地元志向が強まっているようにも感じる。今後どうなっていくのだろうか。

ここで沖縄に焦点をあててみよう。沖縄でも、1990 年代から新規学卒者のストレートな就職を「標準化」する発想が強まり、就職に焦点があてられてきているが、今日なお、というか益々県内就職希望が圧倒的に多い。

「沖縄の若者は全国と比べ相対的に低学歴者が多く、就労状況を見ても不安定で，高い非正規雇用比率や失業率，低収入等の厳しい状況の中におり，結果，不安定な移行をたどる若者が多い．これらは沖縄に経済的に困難を抱える若者が多く存在することを意味するが，それは将来の収入不安を抱える者の比率の高さとして現れていた．にもかかわらず沖縄では将来の生活全般の見通し，結婚などの見通しに不安を抱える若者が全国より少なく，とくに男性は，全国と比べ明確に高い結婚見通し意識を示していた。ここでは，そのような見通しを支えるのが，おそらくその豊富な表出的関係であることも見えてきた．また，全国ではとくに不安定就労を続ける早期・非正規男性が人間関係を縮小させ，結婚の見通しを持てずにいたが，逆に沖縄の同層は表出的な人間関係が

豊かになり，結婚を見通す者を増加させていた。以上から沖縄の若者，とくに男性が，不安定さ，経済的困難の中にあってなお、不安定就労継続層も含め結婚など将来を見通そうとしている姿が浮かび上がり、またそれを支える人間関係がある可能性を見ることができた.」ｐ２２５

その２　沖縄に注目　　2018 年 01 月 13 日

これらは、沖縄に生活している人々にとっては、日常感覚で受け入れられる調査結果だろう。しかし、他府県の人たちにとっては、これらは注目すべきことであるし、逆に、他府県のありようを問い直すきっかけを与えそうだ。

その人間関係にかかわる章も興味深い。男女差について次のように指摘する。

「総じて女性の方が，人間関係が豊かで安定的であり，男性の関係性は，学歴や就業形態といった状況による影響を受けやすく，また関係性から疎外されやすい．属性や境遇の不利と関係性の弱さが連動する可能性が高いと考えられる．もう１つの男女による顕著な違いは，親との関係である．女性の場合，頼りにする人間関係に一貫して「親・保護者」を挙げる場合が多く，20 代前半でも親との関係が重要な意味を有していると考えられる。」ｐ３５６

「現在の生活や将来に対する肯定的積極的な意識の背景には、概して関係性の豊かさがある」ｐ３５８

当然視されそうな指摘だが、改めてその意味についてのとらえ直しが必要なように感じる。

以上膨大な指摘のなかのほんの少しだけ紹介してきたが、これらの指摘は、沖縄のユニークさを浮かび上がらせてもいる。現在私は、南城市における集落史を調べている最中だが、1960～2010 年代の沖縄における概況が、本書の調査とどのようにかかわるか、という角度から考えてみたくなった。高卒のみならず大卒が増えてくる近年であるが、これまで同様、県内就職を希望するものが圧倒的に多いし、実際そうしている例が多そうだ。そのことが、人間関係ともかかわるし、地元つながりという集落を含めた多様な人間関係・地域関係が背景にあるし、若者自身もそれを強く意識している。

こうしたことも深めていきたいと思う。

加藤彰彦ほか編『沖縄子どもの貧困白書』2017 年かもがわ出版を読む

2017 年 12 月 28 日

深刻な事態にある沖縄子どもの貧困についての実態を明らかにするだけでなく、行政施策も、そして多様な取り組みも紹介する好著だ。国の高率補助に誘導されて、大規模建設投資が行われる一方で、教育福祉分野では「社会的排除」を生み出すような事態が作られ、格差拡大、子どもの貧困率２９．９％が作りだされた。そして、事態の「改善」は当事者の自己責任に任せるといった新自由主義が蔓延している。

そうしたなかで、ＮＰＯなど多くの住民の自主的な動きが生み出されるのと並行して、最近になって沖縄県をはじめとする自治体も動きはじめ、実態把握と具体的施策が展開され始めた。そして、調査が進めば進むほど、事態の深刻さが明らかになってきている。

本書は、実態を明るみに出すだけでなく、具体的な取り組み例の紹介があふれている点で注目される。私に強い印象を与えたのは、居場所づくりでの南風原町の取り組み、浦添での地域自治会の取り組みである。また、鋭い分析を行う田嶋正雄などの論稿も注目される。

こうした貧困をめぐる事態に対して、かつてなら、シマ、地域自治会による協同が対応してきたが、それが弱まる中で、困窮事態が個人問題として隠されてきた状況をいかに突破するか、それらの手がかりが本書には満ちている。

このような子ども貧困が生み出された事態は、地域協同のありよう、政治および自治体のありよう、学校教育のありようへの鋭い問題提起となっている。それは、一部の問題ではなくて、それらの体質そのものを問い直すものとなっている。たとえば、全国学力テスト順位上昇に焦点化してきた教育界は、従来の体質の再検討再構築なしには､貧困問題に立ち向かえないし､子どもを排除するのではなく包摂するありようへの転換は困難である。また、沖縄の産業もまた、この問題の「犠牲」のうえになされる投資・雇用によるのではなく、この問題の解決を前提にしなければ、前に進まなくなる事態に遭遇するだろう。

貧困対処を含む福祉施策を前面に出した全面的施策なしには、行政も進まなくなりそうである。そして、格差と自己責任論が生み出す住民の分化に焦点をあてて考える必要がある｡困窮事態にある多くの住民がいる一方で、困窮事態は自己責任問題だとして、自分にも及ぶ問題、そして自分自身が生活する地域の問題としてとらえない住民が増えている。

そのなかで、沖縄の巨大な宝であるつながりの急速な縮小をくいとめる課題が、沖縄の課題の前景に出てきている。こうした意味では、沖縄における貧困問題を軸にした福祉施策、住民協働の推進は、米軍基地問題と並ぶ社会的問題になってきていると言えるだろう。そのことは、戦争直後と並んで、新たな沖縄の歴史的課題になり始めている。

「学校・企業・社員　どんなちからをつけるか」　沖縄中小企業家同友会の同友会大学で

2017 年 07 月 27 日

２２日午後、一年に一回の講師を務める。もう１０年を越したかな。このところは、「学校・企業・社員　どんなちからをつけるか」というタイトルで、内容を定着させているが、参加者の反応のなかで進行を変化させている。今年は、受講者が多く、元気があるだけに、ノリがいい。ということで、今年なりの深みができていった。

多様な業種の会社からの人たちで、出会いそのものが楽しいのも、講師を続けている魅力の一つだ。休憩時間に、代表の方から、別の組織でもやってくれないかと持ち掛けられたが、朝の６時からだという。ちょっと自信がないなと率直にお応えする。でも、いろいろな機会で、私流のワークショップをするのは楽しいし、良い経験になるから、できれば挑戦してみたいとも思う。

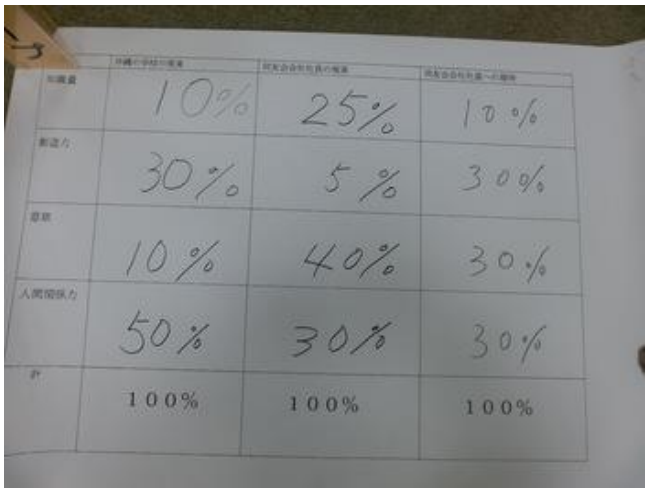
さて、受講者の方々は、各社を担っておられるから、私の途方もない活動提起に、最初は「難題」と感じながらも、そのうち、ぐいぐい乗っていかれた。定番の「多様な挨拶まわし」などは、短い挨拶どころか、本格的な挨拶がすすんでいく。

定番の「今の沖縄の学校教育は、先進国型か途上国型か沖縄独自型か」討論は、見事に皆さんの主張が多様になり、多様な意見に感心するばかりである。

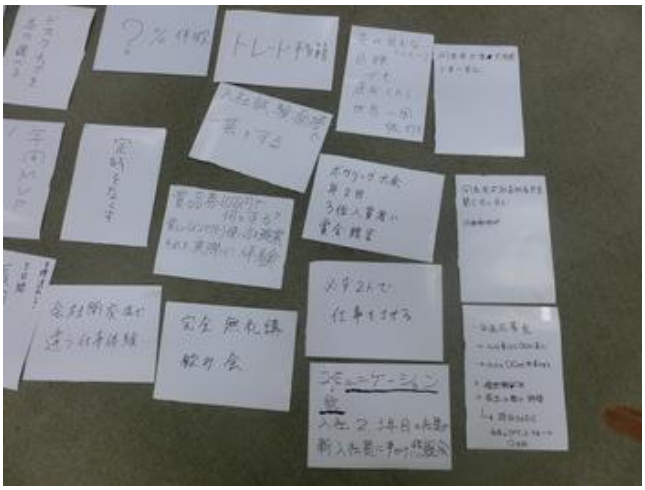
「どんな力をつけるか」では、今年は、人間関係力は高いという現実認識が特徴的だった。それにもとづいて「同友会社員への期待」として、多様な分野での力をつけようという主張が多かった。（左写真参照）

最後にした「社員教育への提言」が今年の興味深さの象徴となった（右写真参照）。写真では読み取りにくいので、いくつか紹介しよう。

・会社間交流で、違う仕事体験
・年間ＭＶＰ№１にオーダースーツ
・デスクチェアを各々が選べる



知識量	10%	25%	10%
創造力	30%	5%	30%
意欲	10%	40%	30%
人間関係力	50%	30%	30%
計	100%	100%	100%



・屋久島チーム別トレッキング
・入社試験の面接で一芸をする
・（部署間の）トレード移籍をする
・商品券１０万円で何をする？　楽しいインパクトのある使い方を提案する。それを実際に体験してみる。

こうして、多様な会社からの参加者が、自社の枠を超えて討論し、共同作業することが、多くの発見創造を生み出すが、そこが同友会大学の魅力の一つだろう。

上間陽子「裸足で逃げる　沖縄の夜の街の少女たち」太田出版 2017 年を読む

2017 年 02 月 18 日

著者から送っていただいた最新本。衝撃度の強い本で、発売そうそう話題になっている。

帯にある岸政彦さんの文が、本書の特徴を簡潔に提起しているので、まずそれを紹介しよう。

————それは、「かわいそう」でも、「たくましい」でもない。この本に登場する女性たちは、それぞれの人生のなかの、わずかな、どうしようもない選択肢のなかから、必死で最善を選んでいる。それは私たち他人にとっては、不利な道を自分で選んでいるようにしか見えないかもしれない。上間陽子は診断しない。ただ話を聞く。今度は、私たちが上間陽子の話を聞く番だ。　　この街の、この国の夜は、こんなに暗い。———

著者が沖縄のある街に繰り返し通い、キャバクラで働く少女たちの物語を聴き記録したものを編集した本だ。彼女たちの余りにもリアルな話に読者は驚くかもしれない。こうした記録を、上間さんの研究仲間は、全国の各所で作りだしており、私のこのブログでも繰り返し紹介してきた。

上間さんは、「聴く」こと以外に、彼女たちに「診断」を与え、何らかの意図的働きかけをしているわけではない。しかし、聴くこと自体が、彼女たちに与えるものは大きいと思う。聞いてもらえる機会があまりにも少ないこともあろう。また、余りにも重すぎて、「聴く」こと以上になにかができるということには、なかなかならない。にもかかわらず、この話す―聴くという関係のなかで、なにかが芽生えてきたことだろう。

と同時に、本書を読むことをとおして、読者が何かを感じ取り、何かにつながっていくことが多大だろう。それは、これまでこうした類は、外側からの大まかな情報として手に入れることはできても、当人たち自身の気持ちと論理のなかで、文字化されることがあまりにも少なかったからだ。

とくに、社会的に標準的なものとして承認される業務、たとえば教育に携わる人にとって、本書に登場してくる多くの事は、「聴けば、直ちに否定され、そこからの脱出を求める」世界だからだ。標準的なものに縛ることが、実は彼女たちの苦難を作り上げている仕組みになっていることに無意識である人が多い。無意識でなければ、そうした地位を得ることが出来ないのだろうか。

こうした虚構的な標準ではないありようが、追求されなくてはならない。そして、多くの人は、実はこうした世界が自らの日常生活のすぐ傍らにあることを避けている。あるいは鈍感でいようとする。

こんな状態にある人々に対して、本書は非常に刺激的である。その刺激をきっかけにして、自らの周辺のなかで、自らの眼をどのように見開いていくか、あるいはどういう関わり合いをつくっていくか、人々に寄せられる要請は大きい。

ところで、私自身も、30 年ほど前、全く異なる苦難ではあるが、難題にかかわる多様な若い人々とつきあったことがあるが、私自身の存在に耐えられないほどのものを感じて、距離を置いたことさえある。

こうした苦難と伴走しながら、研究的実践、実践的研究をすすめている上間さんに敬意を表したい。本書が、研究の世界に与える重要な問題提起が、広く深く受け止められることを期待したい。

南城市史インタビュー　「シマの子ども」　公民館幼稚園など　　2017 年 01 月 17 日

南城市史「民俗」編の集落の暮らしについてのインタビューを続けている。４つの集落を担当しているが、今年度は二つに焦点化し、次年度に次の２つを焦点化するつもりだ。

このところ、１９６０年代と７０年代についてのインタビューが多い。この後、８０年代、９０年代の話を聞く予定だ。事柄の性格上、年長世代が多くなるのは当然だが、できるだけ多様な世代、多様な方々にお聞きしている。

子育てについての話を聞くことが続いたので、ちょっと感想めいたことを書こう。

１９６０年代までの農村では、「シマの子ども」という性格が色濃い。親たちが農作業などに出かける間、４，５歳の子どもたちは、シマの公民館におかれた幼稚園に通う。区が一人の保育者を雇い、３０人ほどの子どもの世話をする。保育者は、海岸や森など自然のなかで遊ぶ「先頭に立つ」といった感じだ。

保育者の口が楽器の役割を果たし、歌う。黒板にアイウエオを書いて、竹の棒で指して、読み方や単語を教える、といったこともする。

配布された脱脂粉乳をお湯で溶かしたミルクが途中で配られる。それを近くのおばあさんたちが手伝う。

保育者は、高卒の若い地元女性が担う。幼児教育の専門知識があるわけではない。戦争直後の小学校もこんな感じだったようだ。

昼頃には、母親が帰宅して昼食の準備を始める。昼食ができたころ、父親も子どもも帰る。公民館幼稚園は昼で終わりなのだ。

こんな公民館幼稚園が、１９７０年前後の村立幼稚園設置に伴い閉鎖になる。これが、沖縄県が全国で断トツの幼稚園就学率になった一つの背景である。

そのころ子どもは、「家族の子ども」であると同時に「シマの子ども」だった。そして、小学生頃になると、放課後は、地域遊び集団を形成するとともに、農業を中心とする家業の重要な担い手でもあった。そして、学習意欲盛んな子どもに、奨学金をシマが出して進学を支援するといったことが行われた。学事奨励会とか教育隣組とかが活動していた時代だ。

１９７０年代に入ると、事情が変化し始める。とくに１９９０年代に入ると、著しく事態が変わってくる。家業手伝いの激減。子ども会・子どもスポーツ組織の拡大。おけいこ事塾・学習塾の増加。

都市地域が先行するが、農村地域でも９０年代に入ると、変化が鮮明になる。「シマの子ども」の比重が低下し、「家族の子ども」になってくる。家族における教育は、親が教えるというのではなく、学校・塾・スポーツ組織などの補佐役・応援役として親が活躍するという形になる。

この変化は、劇的だ。南城市は農村地域であるが、今では、１９６０年代的な雰囲気を探し出すのは困難だ。

こんな話を聞いていると、実に感慨深い。無論、以上の話は、何人もの話をつなぎ合わせたものだ。この大変化のなかで、シマはどうなっていくのだろうか。シマの地盤沈下とでもいえそうな事態の進行の中で、有効な対応策が打てずに、ジリ貧状態にあるシマ、「シマ起こし」の多様な取り組みを展開するシマ、これまた多様だ。

名桜大学での九州教育学会に参加　「地域と大学を考える」　2015 年 12 月 7 日

名桜大学で開かれた九州教育学会のなかの５日午後開かれた総合部会に、シンポジストとして参加する。テーマは「地域と大学を考える」というものだ。

名桜大学には、隣接する北部学習センターを含めると、数回目の訪問ということになる。立派な施設に、できたばかりの学生会館サクラウムが加わる。新しい看護学科を含めて、２０００名の学生数の立派な大学になっている。

早めに着いたので、名桜大学周辺を散策。自然豊かなところだ。周辺には、学生向けのマンションが立ち並ぶ。豊かな自然は、自然のままだ。

１０年前は、教職志向の学生サークル対象にワークショップを展開したが、今回も学会にたくさんの教職学生が参加していた。学生層が様変わりした感じだ。女子学生が大変多い。職員に聞くと、県外出身者が半数だ。終了後の懇親会でエイサーを演じた学生たちも女性が半数を越えていた。大太鼓を女性が叩いていた。「ピュア」という北部における地域支援の活動に参加している学生も沢山いるとのことだ。

シンポは、「地域」「大学」「教育」といったテーマがからみあうなかで進行した。三人の提起の後の、１時間余りの会場とのやり取りが結構面白かった。ともすると、こうしたシンポでは、発言者が慎重・丁寧になりすぎたり、事実報告とそれへの質疑応答にとどまったり、キーワードがばらばらに並立して、提起が相互に絡み合わなかったりしがちだ。

しかし今回は、かなり大胆で問題提起的な要素がかなり高く、また質疑応答も、提起者にとってはアドリブ的な対応が求められることも含んで、突っ込んだ発言が求められることが多いなど、面白さを増すものになったようだ。退屈とは真逆の緊張と発見の連続だった。

私も、私自身の実践をベースに、かなり粗削りな発言をして、参加者の思考の展開に資するようにしたつもりだ。

中部地区公民館研究大会での私の「指導助言」発言内容　　2015 年 10 月 24 日

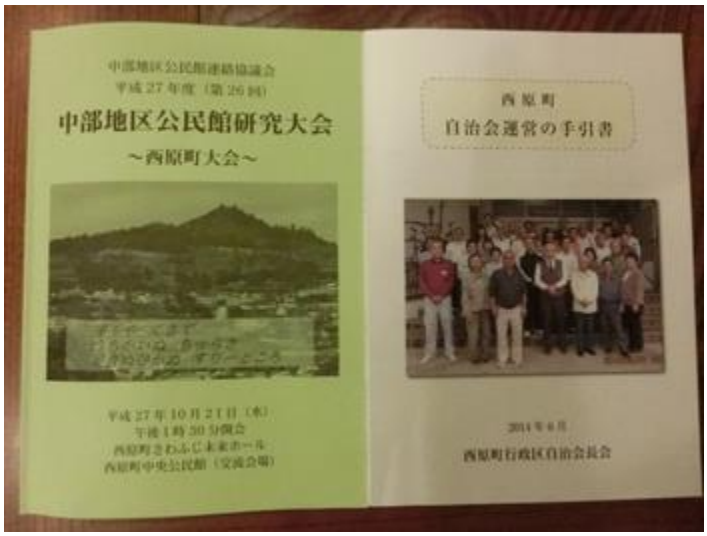
２２日午後、西原町さわふじ未来ホールで開かれた会に、依頼があって参加した。完成して１年ほどのホールは町役場と一体になった建物で、とても素晴らしい。ここは、１９７６～１９９０年に私たちが住んでいた小波津団地から徒歩で１０分ほどの所であり、サトウキビ畑だった。我が子たちは、このあたりを徒歩で３０分余りかけて西原小学校に通学していた。隣にある公民館が、当時唯一と言ってよい建物だった。娘は、学校からの帰路、毎日のように公民館に立ち寄り読書していたと記憶している。（左写真は、交流会での指笛合奏）

この大会の参加者は、中部地区（恩納村を含む）の公民館関係者たちであるが、ほとんどが各字の区長さんなど集落公民館からの参加者だ。全部で、２００～３００人ほどだろうか。ロビーには、西原の各字の公民館活動のポスターなどが貼られ、雰囲気を盛り上げている。

そのなかに、西原町行政区自治会長会「西原町自治会運営の手引書」が置かれ、集落運営に強い興味を持っていたので、一冊いただいた。一問一答で、５５項目が並んでいる。「６　アパート・マンション居住者の加入率が低い」「１３　親の自治会への関心が低く、子ども会が作れない」「１９　限られた会員だけが協力している」「３０　自治会記念誌・字誌の発刊方法」「独居・障害を抱える高齢者への支援体制」「４０　地域にひろばや公園がない」「４４　雨水対策・測候対策を望みたい」「５０　広報チラシが多すぎる」・・・・

まだ目次しかみていないが、なかなか便利で有益な冊子のようだ。

右写真は、大会冊子と「西原町自治会運営の手引書」



さて、会は、開会行事、基調講演（島袋正敏さん「地域自活と自立を求めて)、事例発表１　奥間自治会「地域防災を活かした新たな公民館活動」、２　宜野湾中央公民館「公民館におけるサークルとの共存、育成と活用について」、交流会という流れで進んだ。

私は、事例発表のあとの質疑応答が終えたあとに、１０分ばかり「指導助言」の発言をした。

おおよそ、こんなことを話した。

現在、南城市で市史の一環として、全集落７１の「暮らし（民俗)」を調査する活動に参加しているので、本日の集落公民館を中心とする諸発表・発言などは、私にも大変有益でありがたかった。沖縄の集落における諸活動には、素晴らしいアイデアが満ちており、全国の社会教育研究者たちが大変強い関心をもち、研究調査を３０年以上にもわたって行い、何冊も本を出している。他府県にはない優れた組織・活動だからだ。

ある研究者の著書にヒントを得て私なりにいうと、先進国においては、１００年前、２００年前から、地域のコミュニティ（共同体、シマ）から「離陸」し、自然からも「離陸」し、そのことで、金銭・商品を中心にした右上がりの大量生産・消費の社会をつくりあげてきた。しかし、それはいまや行き詰まり、停滞縮小が始まっている。そこで、コミュニティ（人間関係）や自然への再着陸が大きな課題として登場してきている。

その点では、沖縄は大きな宝物をもっている。このような流れとは距離をおいて、自然との関係を保ち、地域における人間関係・コミュニティを大切なものとして持ち続けてきたのだ。その拠点として、シマ・集落公民館があるのではなかろうか。

そのなかで、多くの人々がＵターンＩターンしてきている。そして、若者も地元志向が強い。それだけ、沖縄にシマに愛着を感じているのではないか。

「全国○○位」ということに固執して、順位を上げるという営みが広く行われているが、その発想から卒業して、沖縄独自の宝物を活かし発展させる取り組みを推し進めたい。その点では、集落・集落公民館が大変重要な

位置にある。

無論、これまでのコミュニティ（共同体）が人々を縛りすぎるので、そこから逃れたい、都市に出て、「自由」になりたいという気持ちを持つ人も多い。そして、自由参加のつながりを作っていきたいと考え、実践する人も多い。その点では、縛りを感じるようなコミュニティのあり方の検討が必要だろう。と同時に、そうして作った自由参加のつながりが、地域・コミュニティに関わるような工夫も重要になっている。この二つのつながりのありようを工夫創造していくことが今日の重要な課題となっている。

自由を求めながら、結果的に孤立・「ひきこもり」になってしまう人もいる。あるいは、地域に無関心になる人もいる。つながりといっても、会費や授業料を支払うという金銭で結着をつける発想も見られる。その点で、公民館などを足掛かりの場として、多様なつながりを作り出していくことが、今日の重要課題となっているのだ。仕事起こし、娯楽、芸能、ものつくり、子育て協同（保育・学童保育・ファミサポなど）、防災、地域作業などの多様な活動を創造的に展開してほしい。数年前に読谷の社会教育諸団体とともに、多様で豊かな活動をつくるアイデアつくりのワークショップをしたが、実に豊かな発想が満ちている。

そうしたアイデアをもとに、新たな活動を創造していくことを期待したい。

その際、教育委員会系列の中央公民館と、自治系列の集落公民館とが、壁を壊して連携していける体制を築くことがとても重要になる。また、集落公民館では、保育園とか高齢者福祉施設とか、他集落とか、多様なところとつながり、協同する実践が創造されている。

そうした新しい創造活動がさらに発展することを期待したい。

沖縄の若者の生き方をめぐって　日本生活指導学会報告　　2014 年 09 月 04 日

これから数回にわたって、沖縄大学で８月２９～３１日に開かれた日本生活指導学会の大会なかで、私が参加した分科会などについて、報告コメントしていく。

まず課題研究Ａ「青年期生活指導実践――他者と共に生きることの学び」分科会で、コメンテイターを務めた私のコメントを中心に紹介していこう。

この分科会では、「南城市における若者の現状について」（喜瀬斗志也）、「暴力を統制する」（打越正行）の二つの報告をもとに討論が進行した。双方とも、沖縄の若者をめぐるものだが、置かれた状況がかなり異なる。

そこで、私は「論点地図」というタイトルをつけてコメントした。

二つの報告が対象とする若者の位置（沖縄の中での位置、世界の中での位置、これまでの本分科会での位置）はどうか。各々の共通性と特殊性はどうか。

１．若者たちの現在認識と将来構想はどうか。

２．地域のなかで、人間関係のなかではどうか。

３．地域の共同体とのかかわりはどうか。青年会には、多種がある。たとえば、戦前来のもの、戦後スタートのもの、最近形成のものなど多様だ。

４．直接かかわる社会の特性と変動のなかではどうか。

私が関心をもついくつかの点

１.「沖縄の下層若者」という表現が報告の中に登場するが、「下層」の意味は多様であり、「下層」という枠で言い表せるもの、そうでないものがある。また、エイサーが話題になったが、エイサー集団にも多様なものがある。山城千秋が紹介した浦添内間青年会（『沖縄の「シマ社会」と青年会活動』（エイデル研究書２００７年））、あるいは、地域密着型（例　道ジュネー）とサークル型（ヨサコイソーランなどに類する）などの違いもある。

２．地域おこし・地域創造への若者のコミットには多様なアプローチがある。

３．若者相互の人間関係には、旧来の共同体型と、結社型（多様な形がある）とが存在する。人間関係の希薄化がいわれるなかで、それにもかかわらず、多様なものが作られている。

４.「地域との関係性が希薄な若者」といわれるが、地域との関係性が強くても、１０代半ばで疎遠になっていく若者がいるし、その程度の差異も大きい。進学就職などによる居住地移動の有無が大きくかかわる。

５．地域アイデンティティ（沖縄アイデンティティと生育地アイデンティティ）の濃淡も強くかかわる。沖縄と生育地とがひきつけるものの検討も必要だろう。職探しが困難でも、収入減であっても、沖縄にとどまる、あるいはUターンする若者がかなりいることをいかに分析するのか。

６．地域での仕事起こし、仕事探しのありようの検討が必要だ。

７．地域での家族形成・分解過程の検討も必要だ。

８．ジェンダー視点も重要だ。女性の困難と強さと、それとは対照的な「立ち遅れる男性たち」が目につく。

９．仲間相互、あるいはＤＶなど、人間関係と暴力が問題となっているが、そのありようと濃淡の分析が求められる。報告は、暴力依存を自己抑制することに焦点をあてている点が注目される。それは、広く男性の課題ともなっている。また、それは「強さ」へのこだわりからの卒業という課題とも重なる。「強さ」にこだわる人の多くは、いずれ強さに頼れなくなる。そうした時点でどうするのか。アイデンティティを「強さ」に求めるという体質を問うていく必要がある。

１０．１０代後半から３０代前半までの長い試行錯誤期間というのが、ごく普通の時代になっている。

１１．沖縄建築業が話題になっているが、職人不足人手不足の中で、建築業の現状分析が必要だろう。

１２．エイサー、ヌーバレー、ミュージカルなど、地域の多彩な芸能にかかわる大量の若者たちの存在に注目したい。

１３．若者にかかわる実践者たちは、以上述べてきたことにどのようにコミットしていくのだろうか。

私の「地域起こしと人生創造――沖縄県南城市での事例をもとに――」の発表　日本生活指導学会報告

2014 年 09 月 06 日

学会の２日目午前に行った私の発表の一部を紹介しておこう。

地域起こしと人生創造　――沖縄県南城市での事例をもとに――

２０１４年８月　　浅野誠

１）私の研究史　(略)

２）社会分析と人生計画

・社会変動と生活変動と人生変動

これまでの右肩上がり発想の流れでいくのか、物量的過剰を認識して、豊かさの中身を変える発想でいくのか

・社会変動と地域おこし　ハード型・誘致型からソフト型・自立型へ

地域起こしの中心に、子育て教育・福祉・医療・コミュニティ形成が座るようになってきた

藻谷浩介・ＮＨＫ広島取材班『里山資本主義』（２０１３年角川書店）

広井良典『人口減少社会という希望―コミュニティ経済の生成と地球倫理』（２０１３年朝日新聞出版）

・老年期・高齢期把握　アンチエイジングからサクセスフルエイジング

エイジングの受け入れと「熟」　多世代協同へ

五木寛之『新老人の思想』(幻冬舎２０１３年)

・人間関係（社会資本）つくりとコミュニティつくり　社会資本論・コミュニティ論の流行

そこでのコミュニティは、地域つながりを軸にしたアソシエーション型が多い。

３）こうした課題に取り組む地域における専門家とクライエント　(略)

４）田舎（農村）へのＵターンＩターンをどうみるか

・南城市の人口増　直接的には、アパート増

那覇など都市地域へ通勤する若い家族　南城市内に実家をもつ例が多い。

いざという時のサポートが期待できる。生育地とのつながり（クラスや部活の仲間、青年会など）が濃厚

・移住者の多様性

本土からの移住者　アパート・借家から始まり、一戸建て住まいへ　都会へ戻る例もある

東北からの移住者もいる。

那覇などからの移住

Ｕターン者　三世代同居もあるが、近接地に別居する例は多い。

仕事にあてがある場合もあるが、あてがなく、「なんとかなるだろう」という人も多い。起業に至る例も多い。

典型例――ＩＴ技術者で、大都市での苦節体験から田舎に戻り、精神的身体的に回復しつつ、地域起こしにかかわる新たな仕事に就く例。　２０代３０代Ｉターン者にも多い。

５）南城の特性

・田舎・自然
・インフラ　道路　下水道　住宅　保育　学童保育　整備が急速に進む
・人間関係
伝統的コミュニティ（シマ　字）　血縁（門中など）　老人会など地縁性をもった組織　アソシエーション
・雇用増　　第一次関連産業　観光産業　例琉球王国村
・文化・イベント　観光・カフェ　　「文化が主導する地域づくり」
高齢者施設　障がい者施設
地域おこし　地域活性化で知られてきている

6）組織と企画

・小規模財政、行政改革（保育園の民間委託　職員削減など）　縮小可能性と一括交付金
・多様な企画
アガリティダプラン　中学生が審査
シュガーホール第二次活性化計画　　新人演奏会　オーケストラ　沖縄芸能　ミュージカル
エコミュージアム構想（尚巴志活用マスタープラン）
半島芸術祭　クラフトフェア　オープンガーデン　尚巴志マラソン　青年芸能祭
・諸団体・諸組織
観光協会　老人会　女性組織　農協　青年会　シルバー人材センター
花野果村・軽便駅・高原の駅など農家の直販店　　起業
社会福祉協議会　福祉施設　福祉組織

7）私がかかわるもの　かかわったもの　　(略)

8）浮かび上がってくる検討分野

・生き方・生活の単位としての地域（字レベルと市レベル）
・充実した生き方・生活を保障促進する地域とは
・諸分野と相互関係
生産・雇用・職業・仕事起こし　　生活（衣食住）（地産地消、買い物）
子育て・教育　　福祉　　医療・癒し　　自然　　防災・安心安全　　文化・余暇
・自治体の役割
・地域と個人のアイデンティティ
・地域での取り組み・活動　　対人援助職としての専門家に必要なこと・やりがい

9）焦点的問題

・仕事おこし　とくに対人サービス業務　医療福祉・観光・地域おこし関連業種

地域産業である農業と、第２次第３次産業とを結びつける第６次産業の創成
第６次産業とサービス産業とを結びつける。
・住みたくなる・住み続けたくなる魅力　　自然・人間関係・インフラ・文化・仕事
・諸分野の連携活動の先導例つくりとその意味付けと紹介
例　文化と福祉　シュガーホール・シルバーコーラス
学校教育と文化　シュガーホール・出前授業
・これから他分野との連携に取り組む分野
例　医療・保健　　ケアリングコミュニティ　　福祉文化　　防災
・「コミュニティつくり」　従来のシマの新展開
シマヤーつくり　小谷マーイ　シュガーホールの出前企画
新たなコミュニティ創生　　結成参加型で地域とのつながりをもつコミュニティ
大橋謙策編著「ケアとコミュニティ」（２０１４年ミネルヴァ書房）

１０）地域起こしのキーパーソンたち　インタビューをもとに　(略)

１１）これらのなかでの私の高齢者人生

健康回復から健康維持へ　　加齢（＝熟）の受け入れと対応
４分野　　1）研究　　2）大学授業（週２～３コマ）など　　3）地域とのかかわり　　4）畑庭作業など
2）が減少し、3）の比重が高まる。　1）4）は、しばらくは維持できよう
5）終末期の準備が必要。　　まず、老前整理などから

全体会　「生活変容」　日本生活指導学会報告　　２０１４年9月8日

大会２日目午後の全体会は、「変容する＜生活＞の実相をみつめる――歴史的転換期における「生活変容」への生活指導論的アプローチの試み――」というタイトルのもとに、西本勝美「「空間」、「手入れ」、そして「生活のかたち」」、喜屋武幸「国策に翻弄される地域の生活と教育～新基地問題に揺れる辺野古の苦悩と葛藤」の二本の問題が提起がなされ、かなり難しいが興味深い討論が展開した。
そのなかで、私なりの注目点を含めて、当日行ったコメント的な発言を記そう。

人々の生き方・生活のありようにかかわるものには、多様なレベルのモノ・コト・ヒトがある。そのなかで、人々の内在的継承的でないものによる強い影響が急激に訪れることがある。沖縄でいうと、基地・戦争・政治的軍事的支配がある。たとえば、１７世紀初めの薩摩支配の開始、琉球処分、沖縄戦と米軍支配の開始がよく知られている。
と同時に、緩慢であるにしても根底的な影響をもたらすものがある。沖縄でいうと、１９００年前後の金銭・

商品経済の浸透があるし、戦後、とくに「復帰」以降、金銭・商品経済の圧倒的支配がみられる。辺野古問題を含む近年の沖縄の基地動向には、急激かつ緩慢な、双方の強い影響があり、人々を翻弄し続けているとも言える。

それらは、人々を自然から引き離し、都市的生活を否応なくさせるという面を持っている。西本が引用した桑子敏雄流にいうと、「空間の履歴」「人間の履歴」を断絶させ、自然の（自然な）流れに合わせた生活を破壊していくものだった。

そうしたありようから回復し、自然との付き合い方、西本流にいうと、「手入れ」をしながら、自然との関係を築いていくことを求める動きがある。

西本の場合、その自然のなかで、農業的自然がぬきんでて強調され、人間関係については慎重な評価が与えられる。「「人間関係」に還元される理論と実践は、必然的に市場原理に絡め捕られざるをえない」とまで評価される。私の場合、「自然と人々とつながる田舎暮らし」という表現を使ったが、自然のみとつきあうのではなく、人々といかに関係を築くかに焦点を当てている。

金銭商品経済にあまりにも支配され過ぎた今日の状況を、自然・人間関係を含めた生き方・生活の創造をいかに展開するのか、という重大な課題に、人々自身が直面している今日である。辺野古問題を含んだ沖縄はその鋭い問いの前に立っているといえよう。

沖縄の矯正教育　日本生活指導学会報告　　2014 年 09 月 09 日

今回の学会の注目点の一つは、沖縄の矯正教育がそろって発表したことだ。普段は、接する機会が少ないこうした施設の発表を聴けるのは、この学会ならではである。関係者のご尽力に感謝したい。

沖縄女子学園の発表は、私が参加する分科会と同時並行だったので、聞けなくて残念だったが、沖縄少年院と那覇少年鑑別所の発表を聴くことができた。

二つの発表について紹介しつつ、私なりのコメントをしていこう。

１）沖縄少年院の方の発表は、２度目以上の入院になる「再入者」に対するグループワークについてのものだ。２割程度の少年が再入者になっているが、繰り返さないために、「対話と共感を通して自らの本音を発見し、少年院生活に対する問題意識を持たせる場」としてのグループワークである。それは、「前回の少年院生活でよくなかったこと」という少年自身の作文をもとに、再入者である５人の少年と２名の教員とで討論する形で進められる。

少年院の指導は、ここ２０年余りで劇的に変化してきている。いってみれば、ハードなものからソフトものへと軸足を移しつつ、入院している少年たちの変化にも対応しつつ、多様な実践形態を追求しており、グループワークもその一つだろう。

グループワークの過程では、少年たちから職員批判もでてくるので、子どもの声に耳を傾けようとする職員自身の発見にも通じる。グループワークの過程で、職員は褒めもせず叱りもしないという態度で臨み、少年たち自身の気づきを重視しているとのことだ。

週一回６０分を６回、同一の５人メンバーで進めるという。私語を厳しく制限する少年院での、人間関係形成の要素をもつ、このありようは注目されよう。
今後の展開が注目される実践だろう。

２）２０１４年６月に少年鑑別所法が成立したばかりの少年鑑別所は、新たな転機を迎えようとしている。それは、以前以上に関係諸機関との連携をはかり、鑑別所の機能をより活かしていこうとする側面を帯びたものだ。
鑑別所だけでなく少年院も含めて、収容される少年たちには、矯正教育だけでなく福祉的ケアの必要がますます高まる傾向があるなかで、矯正教育と福祉との関係をめぐる実践創造が求められている。また、学力不足や発達障害を抱えた子どもの増加傾向も顕著であり、関係機関や学校などのそうした問題への対応の一層の工夫が求められる時代だ。

３）発表は、那覇少年鑑別所の多様な活動を紹介するものだった。
この発表とそれへの二人のコメンテイターのよるコメントは、２）で書いたことを含めて、示唆に富むものだ。
少年への評価（鑑別）を行う機関であるが、評価には判決のために行うものと処遇を決めるためのものの二つがあるという提起は興味深い。両者がすっきり分けられるものでないにしても、少年の今後の成長のために上手く活用されていく工夫が期待される。無論、個人情報なので扱いに慎重さが必要だが、少年に関わる人たちが共有した方が良い場合もある。

４）入所してくる少年たちがかかわる非行に特徴的なことは、家庭的に不運な状態にある例が多いこと、夜社会・アルコールからみが多いこと、地域や仲間の掟を破ったということでのリンチが多いということも、注目される。

５）討論を聴きながら、矯正教育や福祉などの場面で、少年たちに「強い個人になること」を求めるのか、「弱い個人である自己を受け入れつつ、関係のなかで、弱さをカバーできる個人」を求めるのか、といった問いが必要になるという印象を持った。無論、二つにすっきり分けられるものではないが、実践の持つ性格がどちらに傾いているのかを意識し、希薄な方の関わり方を、いかに補充していくのか、という視点が必要だろう。
まずい人間関係の中で生活する中で非行に陥ったから、その人間関係を断ち切れる強い個人を作るという論理が、これまでは強かったが、そうしたことだけでは、再入を避けられないという事態のなかで、新たな実践的模索での、こういう視点での新たな関わりも必要なように感じる。

私にとっても、実り豊かな中身を持った学会発表・討論だった。

沖縄民間教育研究の会議と南城学童連絡協議会の総会出席　　2014 年 05 月 19 日

１７日は、久々に、一日２回の会議、プラス α　で、少々疲れた。
元気になったとはいえ、一日に２つも付き合うと、オーバーワークだなと感じるのは、老化のためか、それとも、疲れを疲れと感じられるようになったということか。以前は、「これくらいは大丈夫。なんとか頑張らなくては」ということでやってきたが、それががんばりすぎであり、長い間苦しんだ体調不良を生んだのだろう。
それでも、前向きで充実した会議だったので、単純疲れだけで、ストレスをためないで良かった。

午前中は、那覇で、沖縄の教育を考える民間の人たちの集まり。オブザーバー参加した。１９９０年春までは、こういう会議の連続だったが、２４年ぶりということになる。
話があっちこっちしたが、学力の取り組みをめぐる学校現場でのいろいろなことを興味深く聞いた。「取り組みを担当する中心者自身が、実際のところ、無理のある取り組みが多く、表での発言と本音が違っていること」「取り組み管理の形式性が強まっていること」「小学校で高成績なところでは、なぜか中学校になると、下がる事例があること」「自宅で親はいないが、祖父母がいる県では好成績だが、高校になると下がるという例」「教師が、クラスメイトの前で、特定の生徒を否定的に語り、その生徒を不登校に追い込むが、その認識がなく、その生徒が弱いからだと発言する例」・・・
いささか、いやになるほどの例が続出する。沖縄の子どもと教師たちの事実に即しながら、問題を前向きに解決し、共同的な取り組みが増えることを願いたい。そうした実際の取り組みを起点にした研究活動が求められているようだ。

会終了後、数名の方が、我が家を訪問されて、ハーブを楽しみ、老前整理中の書籍をたくさん引き取ってくださった。そこでもユンタクがはずみ、なんと３時間近くにもなった。
この機会に新しい出会いもあった。教師以外の豊かなキャリアを持つ人との出会いが面白かった。今後の楽しみが増えた。

夜は、市役所で、南城市学童連絡協議会の総会が開かれた。いつも盛況だが、今回は、市の担当課長をはじめとする職員、さらには６名の市議会議員も参加されて、盛り上がった。これまで民設民営ばかりだったが、公設公営のものをいくつかつくる動きが進行していることは喜ばしいことだ。
顧問役を務めている私の役割もいろいろと出てきそうだ。あいさつで、子どもたちの自主的共同的な活動展開のなかで学習意欲を高めている点でも、学童クラブが大きな役割を果たすことを期待されていると話した。

末本誠「沖縄のシマ社会への社会教育的アプローチ」を読む　2013 年 12 月 22 日、24 日

サブタイトルが「暮らしと空間のナラティヴ」で、福村出版から２０１３年に出版された本だ。
かなり以前から、沖縄のシマ（字、区、部落）が、公民館があることをはじめとして、社会教育的役割を果たしてきていることに注目して研究をすすめてきた社会教育関係者がいる。
その一人である松田武雄さんからは、いくつもの分厚い研究成果をいただいたことがあり、ブログでも長期連

載で紹介コメントしたことがある。また、山城千秋さんの青年エイサーの取り組みを軸にする書籍も、このブログで長期にわたって取り上げてきた。

そうした社会教育研究者のお一人として末本さんがおられる。長年の研究成果を集約する本を最近出版され、私もそれを読んだ。字公民館、基地とかかわる地域課題、字誌づくり、沖縄戦体験記録、村踊り、個人の「人生の出来事」というように、シマに注目して収集した資料をもとにした、分厚い研究書だ。

この末本さんの提起をどう受け止めらいいか、本格的に論じるには、まだ時間がかかる。今回は、いくつか考えたい問題を提出するにとどめたい。

ところで、私自身は、そのシマに住んでいるので、日常的にシマとの関係のなかで、いろいろと生活し考えている。たとえば、共同清掃作業をはじめとするシマの日常生活、そして豊年祭などの行事にかかわる。現在は区の評議員もしている。ワッターシマの約２２０人のなかの１００人近くは名前がわかる。シマ生活に必須の屋号も７０戸のうちの半分近くはわかる。

私が住むシマは、本書に書かれている字誌や戦争体験記録はない。村踊りは、かつて棒（スーマチなど）や獅子舞いなどが盛んだったらしいが、今では御願の際に獅子舞い「もどき」をするくらいだ。だから、本書に描かれているようなシマの姿とはだいぶ異なる。といっても、４年に一度のジーハンタは、シマあげて（今は那覇などに住む出身者を含めて）の盛大な行事であり、字の会議は結構ある。御願なども役員を中心に途切れることなくなされている。大雨の後の補修、街灯維持、カーブミラーなどの設置、国道バイパス工事に伴う諸対処など、沢山のことがある。私も、そうしたことに積極的ではないにしても、関わる事がある。

加えて、私は、南城市の地域おこしに強い関心をもって、尚巴志活用マスタープラン作成委員会座長とか南城市文化センターシュガーホール運営審議会会長などもしている。市域一帯の地域行事にもかなり参加している。

こうして、地域に関わっている私だが、本書がいうような社会教育にかかわっているという意識は、これまでもっていなかった。私の意識の中では、もっぱら「地域おこし」ということでやってきた。また、当然、南城市には社会教育関係部署があり、社会教育関係者がいるはずだが、接点はなかった。

ということで、本書を契機に、改めて「シマと社会教育」をどう考えたらいいだろうか、ということを考えようというのが、現段階の私だ。

地域おこしという角度からシマについて考えてきた。シマは地域おこしにうえで重要な位置を占める。

南城市でも、「町おこし課」を設置するなどの展開をし、シマを重要なものと位置づける動きは強い。そうした動きに、残念ながら社会教育が登場することは少ない。私がかかわる尚巴志活用マスタープラン作成も、社会教育と同じ教育委員会内の文化課が担当しているのだが、そこではエコミュージアムということが話題になっている。

そうした動向と社会教育がどうかかわるか、ということを考えていきたい。

関連していうと、本書第２章第２節で沖縄集落研究での様々な学的関心事例が紹介されているが、自治研究にも触れてほしかったと思う。

ところで、シマの１９世紀半ば以降の歴史をみると、いくつかの大きな変化がある。

その一つは、シマの生産単位として役割が、１９世紀から２０世紀へと移行する時期に、大きく低下すること

がある。いまでは、それは消滅に近い。それでも、サトウキビ収穫など農業活動の調整などをシマが担う例はある。また、シマおこしと言う場合に、この視点を重視する動きも出てこよう。

戦争期と戦後復興期は、シマのありように大きな衝撃がもたらされるが、その時期は、むしろそれまでのシマをバネにして、活動を展開するという色彩が強かったともいえる。

生産単位としてのシマ機能が低下したとはいえ、生活単位としてシマ機能は、戦後のかなりの時期まで継続していた。本書で新生活運動（生活の近代化）とか学事奨励とか保育とかで登場するものも、その例だろう。また、冠婚葬祭などをシマ単位で行うのもその例だろう。それなどは、いまでも濃厚に存在している。

そうした生活の共同的展開に大きな衝撃が訪れるのは、１９６０年代から７０年代にかけての経済成長期だろう。人々の生活におけるシマの占める位置の低下が進行する。

そして、近年の動向も、新たなシマの変容を作りだすのか、それともシマの解体傾向をさらに強めるのか、その逆に、シマの再創造の動きを作りだすのか、地域おこしとかかわって、注目すべき事態を生みだしている。たとえば、平成の大合併は、自治体のなかの単位としてのシマの位置・役割を高める要素をはらんでいる。また、ＵターンＩターンする人々が、シマの中で暮らす動きも目立っている。

このことは、本書が次に述べる通りである。

「このように今日「住む」という行為は、さまざまな形での移動（モビリティ）の可能性が前提となる社会において､ある場所に留まろうとしまたその範域を拡げようとする個人の意見や判断の結果として成り立っている。住民が他の場所ならざる「ある集落」に住むということは、単にその場所を居住地として選び取ったということだけではなく、自らがその場所で生活的な諸実践に参加し集合的な意味の発見や再構築の過程に、個人の経験を介して加わるという行為なのである。」Ｐ３４２

以上述べてきたシマの変遷のなかで、シマが『生き残ったのか、生き残らなかったのか』という問いも含めて、そのなかで社会教育、ないしは社会教育的なものが、どういう位置・役割をはたしていくのだろうか。

これらの点で、本書が提起するものを考えていきたい。

乾彰夫編『高卒５年　どう生き、これからどう生きるのか』を読む　沖縄の若者たち

2013 年 09 月 03 日

沖縄での若者たちには、全国的に現れている近年の変化と同様なものがありながらも、東京を含めた全国的傾向とは異なる特質がある。しかも、それが長期にわたって継続している。

まず学卒と同時に「（１）仕事への安定的な移行を手がかりに見通しをもつ若者たち」は、決して多くない。人口比率で言うと、１０％もいるだろうか。１０％よりはるかに低いだろう。

対照的に、「（２）「趣味」や「仲間」を「導きの糸」とする若者たち」「（３）移行過程への安定した「見通し」をもつことが難しい若者たち」が圧倒的に多く、わけても（３）が多い。かといって、暗いイメージを濃く帯び

ている例は多くはない。

「(２)「趣味」や「仲間」を「導きの糸」とする若者たち」という分類でいう「趣味」「仲間」という事例について。いずれも、よく見る例だろう。とくに部活仲間の事例は多いだろう。

また、「仲間」というと、同世代に限定されるイメージだが、同世代に限らない多様なつながりの中で考えてみる必要がありそうだ。転職を含め多様な付き合いの中で、多様な人間関係を生み育み、それらをもとにして、数年～１０数年かけて、職業的安定に到達する例が多そうだ。パートなどの非正規雇用と言う事で言うと、２０代だけでなく、３０代でも女性を中心にかなり多数が存在する。

（１）の事例に近いと思われる公務員や教員でも、数年以上かけて正規雇用になる人が多く、３０代の事例は珍しくない。だから、彼らも、まずは（２）（３）に分類され、正規雇用をえる時期になってようやく（１）に該当するともいえよう。

もう一つの特質として、模索過程に、地域移動を含む比率がかなり高いことがある。本調査では微々たるもののためか、分析対象としては登場していない。沖縄では、半数以上がそうで、地元に残る比率は高くない。

こうした状況の中で、沖縄の若者たちは、どのような「導きの糸」を見出しつくりだしているのだろうか。とくに、職業的なレベルだけでなく、家族形成を含めた人間関係構築が、大きな比重を占めていることに留意していく必要があろう。

最後になるが、この膨大な長期調査には、調査対象者が作り出す物語に対応して、調査者側の発見変化の物語が大量に潜んでいることが推察できる。（１）の流れをかなり有利な位置で歩んできたと推定される調査者たちが、対象の若者たちの物語に出会う中で遂げた変化に、私は興味を抱く。